
ピタゴラスちゃんのジレンマ

伊吹 由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピタゴラスちゃんのジレンマ

【Nコード】

N1365Z

【作者名】

伊吹 由

【あらすじ】

聖フィロソフィー学園・・・通称・テツ学。最近男女共学になったこの学園では、あらゆる生徒が哲学を中心に勉学に励んでいる。主人公のピタゴラスちゃんは、恋する乙女。勇気をふりしぼって、憧れの男子生徒にラブレターを届けようとするが・・・不可思議なミステリーに遭遇する。同じ倶楽部のデカルトちゃんやラッセルちゃんと共に、そのミステリーに挑むのだが・・・事態は思いがけない方向へと進んでいく。数学、物理、化学・・・全ての学問は哲学に通ず。実際の哲学論理的思考あり、哲学バトルあり、推理小説の

ような謎やどんでん返しあり・・・真実を証明するには？神は存在する？因果律とは？あらゆる哲学的要素を盛り込み、ピタゴラス達は困難に立ち向かう。そして彼女たちが行きついた先に見たものは・・・？

第1話 始まりはラブレター（前書き）

【哲学的な彼女】という企画に投稿を考えている作品です。この企画の要点は2つだと個人解釈。1つは「哲学に萌えを」（これ、企画側的には大事な点らしい）。そしてもう1つは哲学を知らない人が、「ふーん、哲学ってこんなものなんだ」と、入り口的な物が見える点。個人的には古代や近代あたりが好きですが、時空を超えてあらゆる世代の哲学者を登場させ、謎解きあり、哲学的論理解釈あり、バトルありという形で書いていきます。最後の最後には、多くの科学者が議論している1つのテーマを元に・・・推理的トリックを用意してますので、推理小説が好きな方は謎解きに挑戦してみてください。

第1話 始まりはラブレター

～ 第1話 始まりはラブレター ～

3月14日。

「哲学者として、もっと成長したいから・・・
簡単には、先へ行かせないで・・・」

ピピピピピピピピ・・・

「は!?!?」

一気に目が覚めた。鳴り響く目覚まし時計を見ると・・・午前6時。

「・・・」

なんかやけに・・・リアルな夢を見ていたような・・・?

「・・・」

目覚ましを止め、夢の内容を思い出そうとするが・・・思い出せない。

「そうだ！」

この日は、私・・・ピタゴラスにとって、大切な日。

・・・。。

いつもよりかなり早く起きた私は、午前7時前の誰もいない学園に登校した。

そして今・・・

ある靴箱の前に立っている。

「きよ、今日こそ・・・このラブレターを・・・
ルブラン君に・・・」

そう。私は今日、あこがれの男子生徒にラブレターを届ける。そのため、ほぼ徹夜でラブレターを書いた。1時間しか寝てないが、眠気はない。

「・・・」

直接渡す勇気なんてない私は、定番中の定番【靴箱にラブレター作戦】を決行するというわけだ。

「・・・」

学校の靴箱は、みな扉がついている。だからラブレターを入れて、扉を閉めちゃえば・・・誰かにそれを見られる心配はない。

「・・・」

右手でギュッとラブレターを握りしめる・・・自分でどんな内容を書いたか、今は覚えてない。見返すと、届ける勇気が削そがれちゃいそうで・・・

「こういうのは・・・勢いが大事よね。

見直しなんかせず、私が思ったありのままの・・・

愛の言葉で・・・」

ラブレターを握りしめたまま、しばらく靴箱の前でたたずむ私。この土壇場に来て・・・

トクン トクン・・・

心臓が高鳴り、行動を起こせない。

「このままじゃ・・・誰か来ちゃう・・・」

髪につけたアクセサリーの三角定木を、左手で握りしめた。 1：2：3の方。

「・・・」

30度を握ると・・・少し落ち着きを取り戻す。

「よし！」

勇気を振り絞った私は靴箱の扉を開け、ラブレターを押し込もうと・

「!？」

したその時だった。靴箱の中に・・・

【ルブラン君へ】

そう書かれた手紙が1枚、入っている。

「ラ、ラブレター!？」

ハートマークのシールが貼られた、ピンクの封筒。どう見てもラブレターにしか見えないそれを見て・・・

「だ、誰が・・・？」

私は呆然とした。

(第2話へ続く)

第1話 始まりはラブレター（後書き）

次回予告

謎のラブレターを手にとった私。その内容を盗み見た・・・
そしてこのラブレターを書いたのは・・・？

次回 「 第2話 数学ガール？」

第2話 数学ガール？（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを  
入れようと思ったたら・・・

その靴箱の中に、何者かのラブレターが!?

~~~~~  
第2話 数学ガール？
~~~~~

## 第2話 数学ガール？

「・・・」

靴箱の中を覗き込みながら、私は思う。

「ありえない・・・」

私は昨日・・・最後に学校を出た。警備の人が出入り口の力ギを閉める直前まで、私は目の前の靴箱に三角定木をあてている。

ルブラン君がラブレターに気づいた時、最もインパクトを与えるため・・・

【靴箱とラブレターのサイズは、どんな【比】であるべきか？】

この問題を必死で考えていた。

「あの時は、上履きしかなかった・・・」

このラブレター、昨日はなかった。だとしたら今日・・・

「私より、早く来た人が・・・？」

リン・・・ ゴーン・・・ カーン・・・ ゴーン・・・

7時ちょうどチャイムが鳴り響く。

ガチャリ。

「!？」

学生用入り口が開いて、誰かが入ってきた。

「カントちゃん・・・」

【近代組】の彼女は、必ず同じ時間の7時ちょうどに登校してくる。

「ど・・・」

パニックった私。靴箱の前で、あたふたとする。とりあえずカントちゃんに見えないよう、身をかがめた。

「あらゝ こんな朝早く、珍しいわね・・・ デカちゃん」

1つ向こうの靴箱で、カントちゃんの声が聞こえる。

「ど、どうしよ・・・」

私は思いがけず・・・

「・・・」

靴箱に入っていた、何者かのラブレターをわしづかみにした。

「・・・」

慌てて靴箱を閉めると・・・カントちゃんに見つからないよう、足早にその場を立ち去る。

「・・・誰が・・・？」

主のわからぬラブレターを握りしめ、自分の教室【古代組】へと走って行った。

・・・。。。

教室にカバンを置いたあと、トイレへ駆け込む。誰もいない個室に入ると・・・

改めて

【ルブラン君へ】

と書かれたラブレターを凝視した。

「・・・」

裏を見ると

【from】

そう書かれている。【】？ 何？ なんて読むの？

「・・・」

封を開け、中身を取り出した。中にはたった1枚、真ん中2つ折りの便せんがあるだけだ。

「・・・」

人のラブレターを盗み見る事に抵抗はあるけれど・・・

「・・・」

私はそれを広げ、読み始めた。

~~~~~  
愛しのルブラン君へ

毎日学園の窓から、あなたを見つめています。
もつとあなたの・・・近傍きんぽうに入りたい。

私の心はあなたに収束中・・・
限りなく近付いていきます。

メールアドレスを教えてください・・・
毎日メーラー展開します

今日の放課後、校庭裏のポール公園にいます。
トイレ近くのベンチまで、来て下さい。

時間は5時13分でどうでしょう？
私、1分前にはいておきますから。

それじゃ、放課後・・・

お会いできる事を信じて、お待ちしております。

P . S .

あなたにとって、私が十分である必要はないけれど・・・
あなたにとって必要になれば、私は十分です。

~~~~~

「・・・」

そのラブレターを見て、呆然とする。

「なんて、センスのいい・・・」

そして・・・

「これならルブラン君を・・・落とせる」

心からそう思った。と、同時に確信する。

「手紙の主は・・・」

数学倶楽部の人間だ・・・間違いない。

ライバル  
恋敵は・・・

私の所属するクラブにいる。

(第3話へ続く)



## 第2話 数学ガール？（後書き）

次回予告

手紙の主は、私の所属する数学倶楽部にいる。  
そう確信した私は、授業が終わった後・・・部室を探ってみた。

次回 「 第3話 数学倶楽部 」

### 第3話 数学倶楽部（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の主は、私と同じ数学倶楽部に違いない。

### 第3話 数学倶楽部

### 第3話 数学倶楽部

午後3時。

最後の授業終了を告げるチャイムがなった。ショートホームルームを終えた私は、すぐに部室へと向かう。

【数】

【学】

【倶】

【楽】

【部】

部室の前にある、古びた立て看板。それを横目に勢いよくドアを開け、中に入ってしまった。15畳はある、まあまあ広い部屋。

「・・・」

部員は結構いるはずだが、9割以上は幽霊部員。入り口に入っすぐの壁には・・・数学倶楽部の部員が書いた、書き初めが貼られている。

【人間は、考える葦だっぴょん】

1番手前にあるのは、顧問であるパスカルちゃん先生の言葉だ。その横に、部員の言葉が続く。

【前に進んでるって？ 嘘、嘘！】

【我思ふ、ゆえに我萌え〜】

【万物の根源は・・・ 水であるけー】

【ナマギーリ女神の、おかげです】

【ひとなみに、おごつてよー】

正直言つ。私はこの【ひとなみに・・・】の作品、大嫌いだ。

【神。お前はもう、死んでいる】

【余白が少なねーってば!!】

【いまいましいフレンチマドモアゼル!】

【みんなの幸福の総和が、大きくなりま

用紙に入りきれてない。

【3 , 2 , 1 !    ラッセル    ラッセル    】

【天ではない、地が回っているのだ!】

・・・

このような己の言葉を書道作品にしたものが、卒業生も含め50枚ぐらいある。

【3 ^ 2 + 4 ^ 2 = 5 ^ 2】

私は自分の作品を見ながら推理した。

「ラブレターの主は・・・」

学園の窓から見つめていると言っていた。

ならば卒業生は、犯人じゃない・・・」

私は自分も含め、在校生の作品を眺める。

「ちょうど20枚。その中に犯人が・・・」

いつの間にか私は・・・あのラブレターの主を【犯人】と呼んでいた。

部室の中をさぐり、何か犯人に繋がるものがないかを見て回る。でも・・・

「この部室。基本、紙と鉛筆と本しかないのよね・・・」

あとは、真ん中にテーブルが2つ。その周りに椅子が数脚あるだけ。本は結構あるけど、全て数学書。数冊の本を手に取り、パラパラとめくるが・・・

「・・・」

犯人に繋がるようなものは、見つけれない。簡素な部屋ゆえ、部屋の中の搜索はすぐに終わった。

「・・・」

犯人の手がかりは得られず、三角定木で頭をポリポリとかく。 1：  
1： 2の方で。

キーン コーン カーン・・・

校内放送だ。

【昨夜、校舎の屋上に小さな隕石が落下しました。

一部、金網に破損がありましたので、現在修復中です。

修復作業が終わるまでの間、全校生徒の屋上への立ち入りを禁じます】

キーン コーン カーン・・・

「・・・」

そう言えば昨日・・・何とか流星群の隕石が屋上に落ちたって、誰か言ってたな。まあ、私は星には興味ないけどね。

そんな事思っていたら・・・

数少ない部員が入ってきた。

（第4話へ続く）

### 第3話 数学倶楽部（後書き）

#### 次回予告

部室に現れたのは、同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃん。

この日の数学倶楽部では、【集合論】を専攻しているラッセルちゃんの講義。講義の途中、4人目の人物が部室に入ってきた。

次回 「 第4話 デカルトちゃんとラッセルちゃん 」

## 第4話    デカルトちゃんとラッセルちゃん（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の主は、私と同じ数学倶楽部にいると確信し、部室を探してみた。

でも、何も手がかりを得られず・・・

~~~~~ 第4話 デカルトちゃんとラッセルちゃん ~~~~~

第4話 デカルトちゃんとラッセルちゃん

部室に入って来たのは2人。

「はわ？ Pちゃん。今日、早いですね」

私の事を【Pちゃん】と呼ぶのは、【近代組】のデカルトちゃん。

「おろ？ ピタ子。教団の集会、今日はないの？」

そして【ピタ子】と呼ぶのは、【現代組】のラッセルちゃんだ。

・・・。

ここで簡単に・・・私から2人を紹介しておこう。まずはデカルトちゃん。【TRUTH】と書かれたバッグを持ち歩き、ポニーテールを水色のリボンで止めている。そんな彼女は・・・

校内1の遅刻魔で有名。

「無理して起きたら死んじゃうもん」

が、口癖の基本ワガママっ子だが、何故か校内にファンクラブもあるほど人気度は高い。ついでに言う・・・非常に疑り深い子で、何か気になる事があれば

「ない・・・絶対とは言えないから・・・

意地悪な悪霊さんに、ダメされてるから・・・はわわ・・・」

とにかく疑えるものは疑ってかかる。【これは疑えないだろう】って事に関しては【悪霊】が登場する事になるらしいけど・・・ちょっとイタイ子？ その【悪霊】の前では、全てが疑う対象となるらしい。

「疑う事は萌え」

未だに理解出来ないが、彼女にとって【疑う】事は【萌え】に繋がるらしい。あと正直言っけど・・・

「でもね。デカちゃん・・・

疑ってる自分、すなわち萌えの自分だけは・・・

絶対いるのよね」

自分の事を【デカちゃん】というのに、ちょっとイラッとくる。とりあえずデカルトちゃんの紹介はこの辺で。ラッセルちゃんの紹介は・・・後でね。

・・・。

「今日もデカちゃん、遅刻しちゃいました」

「また？ デカ子、出席日数ヤバくね？」

ラッセルちゃんは、デカルトちゃんの事を【デカ子】と言う。

「・・・」

「そうなんです。」

デカちゃん、出席日数微妙なんです。」

はわわ……」

1つ確かな事がある。

デカルトちゃんは犯人じゃない。手紙の主は私より早く登校し、ルブラン君の靴箱にラブレターを入れている。

あれ？ でも待つてよ……？

「デカルトちゃんさ。今日の朝……学校来てなかった？」

「はわ？ 無理して起きたら死んじゃうもん」

出た。

「今日もデカちゃん。超遅刻です……！」

いや、そこで胸を張られても。

「でも私……」

朝、靴箱のところでカントちゃんが言ってたの、聞いたわ……

【こんな朝早く、珍しいわね。デカちゃん】って……」

確か……そう言ってたわよね？

「デカちゃん、今日起きたの・・・12時ちょうどです。
学校来たのは、お昼の2時ですから」

今、3時過ぎだけど・・・何しに学校来たんだ、この子？

「あのさ・・・僕の推理が正しければ・・・」

ラッセルちゃんは、自分自身の事を【僕】と言う。

「多分、僕と同じクラスのハイデガーちゃんの事だと思うよ。
彼女、【デガちゃん】って呼ばれてるし」

なるほど。

「そうか・・・私の聞き間違えね。

デカちゃんじゃなくて、デガちゃんだったのね・・・」

まあおかげで・・・

朝が苦手なデカルトちゃんは、真っ先に犯人候補から除外された。

一方、ラッセルちゃんは・・・

「さあ、今日は昨日の続き・・・僕が集合論の基礎、教えるからね
」

あの手紙の主の可能性はあるのだろうか？

・・・。

では、ここでラッセルちゃんの紹介。

何を隠そう、数学倶楽部の部長。ミニスカ+ヘソ出しルック・・・ちよつと時代遅れな感はあるが、ツインテールの元気な女の子。かの天才アインシュタインちゃんとも仲が良く、校内でも随一と言われるほど豊富な知識を持っている。

部長は集合論を研究してるらしく・・・ここ最近の数学倶楽部では、毎日部員相手に集合の話をしてきている。もつともそれを聞くのは、私とデカルトちゃんの2人だけ。あとは幽霊部員だし。

いつけんしつかりものの部長だが・・・まあ、その本性は次のエピソードで解る事になるでしょう。

・・・。

「はわわ　　昨日の【空集合】は難しかったです」

「集合論はロジックとも密接につながってるんだから。

デカ子、論理的に【神の存在】を証明したいんでしょ？

じゃー、ちゃんと学ばなきゃダメよね」

集合論を学ぶ事は、哲学を学ぶ上でとても大事だと部長は言う。私達にゲーデルちゃんの【不完全性定理】まで教えると言っているんだけど・・・正直難しいのよね、集合論。でもこれらを学ぶ事は、哲学的にも大きな意義があるんだって。

私は哲学者として成長したいから・・・難しくて頑張って勉強す

る！

ちなみにこの【集合論】は数学の世界でも割と新しい研究分野らしく、聖フィロソフィー学園の中でも【現代組】の子達しか学んでいない。

果たして【古代組】の私と、【近代組】のデカルトちゃんに理解出来るのかしら？

昨日の部長の講義で、【部分集合】と【空集合】について学んだ私達。

「昨日習った・・・

【空集合は、全ての集合の部分集合になる】。

私も、そこがよくわからなかったわ」

空集合というのは、中身が空っぽの集合の事なんだけど・・・そんな集合考えて、意味あるのかしら？

まず【 x が集合 A に属する x は集合 B に属する】が成り立つとき、 A は B の部分集合という。

例えば、

$$\begin{aligned} A &= \{1, 2, 3, 6\} \\ B &= \{1, 2, 3, 4, 6, 12\} \end{aligned}$$

という2つの集合の場合、 x が A に属している（この場合、 x は1, 2, 3, 6のどれかになる）ならば、その x は B に属している。だから、 A は B の部分集合なのだ。

「それはわかるんだけど・・・」

【空集合は、全ての集合の部分集合になる】と部長は言う。

「だったら・・・」

【 x が空集合に属するならば、 x は全ての集合にも属する】・・・

それが成り立って事よね？」

「そだよ」

即答する部長。

「でも、空集合って・・・中身空っぽなんだからさ・・・

x が空集合に属するって・・・おかしくない？」

「デカちゃんも、そこ・・・よく、わからなかったです」

「OK。じゃあ、今日は集合とからめて、論理の基礎を教えよう」

私達はテーブルの周りに座った。

「まずは・・・」

【デカ子がテストで100点とったならば、僕がケーキおごる】

って、命題あったとするわよ？」

命題というのは【正しい】か【正しくない】かが、ハッキリとしている文章や数式の事。

あらゆる真理探求命題の真偽を議論するのも哲学の1つ。例えば命題【神はいる】とかね。

あ！勘違いしないでよ。命題【神はいる】ってのは【神がいる】事を、必ずしも言ってるわけじゃないの。命題ってのは【正しくない】とハッキリわかってる事に対しても言っんだ。だから【 $2+3=100$ 】のように、完璧間違っている事も立派な命題なのだ。

一応私達の認識では【神はいる】か【神はいない】かの2択でしょ？
なので神がいても、いなくても・・・【神はいる】は命題の1つなの。
の。

【デカ子がテストで100点とったならば、僕がケーキおごる】

部長は紙にその命題を書き、テーブルの真ん中に置く。

「デカちゃん、ケーキ、大好きです」

「いや、例えだから・・・で？ 部長、続きを」

「ケース1。」

デカ子が100点とった。そして僕がケーキおごった。

この時この命題は・・・正しい？ 正しくない？」

「それは正しいです」 100点とったんだから」
デカちゃんがケーキごちそうになるのは、当然です」

「ま・・・ 疑う余地はない。正しい」

「正解。じゃあ、ケース2。

デカ子が100点とったのに・・・ 僕がケーキをおごらなかった。

この場合、この命題は正しい？」

「それは間違ってます」

「うん。100点とったらケーキおごるんだから・・・
100点とったのに、おごらないのはおかしい!!」

だからこの時、命題は・・・ 正しくない!!」

「OK! ではケース3。

デカ子が100点とらなかったので・・・ 僕はケーキをおごらなかった。

この時、命題は正しい？」

「正しいです」

「うん、私も正しいと思う。

100点取れてないから・・・ ケーキもらえないのは当然」

「よし! 今のトコ、全て正解・・・ ではラスト! ケース4!

デカ子が100点とれなかったのに・・・僕はケーキをおごった。

この時、命題は正しい？ 正しくない？」

「これは・・・正しくないです」

「私も正しくないと思う」

ガラリ！！

その時・・・部室に入ってくる人物がいた。見覚えのない顔・・・誰？

「ラ・・・ラマヌジャンちゃん！？」

部長が裏返った声をあげる。ラマヌジャンちゃん？

「あら・・・ラッセルちゃん」

名前、聞いたことある。確か部長と同じ、【現代組】の子だ。肩まで伸びた真っ黒な黒髪と、大きなクリツとした黒い目。見た目からして、インド出身だろう。何となく、神秘的な魅力がある。

「な・・・何故、ここへ？」

そして数学倶楽部の・・・幽霊部員の1人でもある。

「ただ・・・私の本を取りに来ただけ・・・」

【デカ子がテストで100点とったならば、僕がケーキおこる】

「……………」

ラマヌジャンちゃんが、部長の書いた命題をじつと見つめた。

「あ、デカルトちゃんが100点取らなかった時にね……
部長がケーキをおごったら……この命題は正しいかって話をしたの。」

私とデカルトちゃんは、正しくないって思うんだけど……」

「絶対正しくないです」

命題は正しくないという私とデカルトちゃんに対し……ラマヌジャンちゃんは、首を横に振ってこう告げた。

「それ……正しいわよ……」

「え？　嘘……」

「はわ？」

思わず声をあげる私達。

「何で……？　100点取ったらケーキおごってもらえるなら……」

100点取らなかつたら、おごってもらえないでしょ？

なんでこの命題が……その時、正しいって言えるの？」

「わかるの。ナマギーリ女神のおかげで・・・」

「え？」

「はわ？」

そう言うトラヌジャンちゃんは、ニッコリと優しい笑顔を見せる。

いや・・・笑顔はステキだけど・・・ な、何？ナマギーリが何と
かって？

部屋の奥の方へ行ったトラヌジャンちゃんは、数冊の本を手取る
と・・・

「それじゃ・・・私はこれで・・・」

そのまま笑顔で、部屋を出て行った。

「・・・」

「はわわ・・・」

彼女が出て行く姿を呆然と見つめていた私達。

「なんだか・・・ 不思議な子ね・・・」

閉じた扉を見ながら、私は呟いた。

「まあ・・・天才と何とかは、紙一重らしいからね。
僕にもあの子は・・・イマイチわかんないだね」

そう言えば、ラマヌジャンちゃんは・・・かなりの天才肌だって聞いた事ある。

「はわわゝでも、ホントにラマヌジャンちゃんの言う通りゝ
デカちゃん100点とらなかったのに、ケーキをおごってもら
って・・・」

この命題が正しい事になるんですかゝ？」

「私も・・・信じられない・・・」

半信半疑の私達に、部長はきっぱりと言う。

「うん。正しい」

え！？ ホントに！？

「論理の世界では正しいんだ。こう考えるといい。
例えばデカ子が99点取った。そこで僕はこう言う。

【100点じゃないが、よく頑張った！ だからケーキをおご
ろう！】

どう？ そういう成り行き、割と自然じゃない？」

「自然ですゝ ケーキ、欲しいですゝ」

「うゝん・・・それは自然に思えるけど・・・」

「いい？」

【デカ子がテストで100点とったならば・・・】という命題。

これは100点をとった時の事を言ってるだけで・・・」

「うん・・・」

「100点を取れなかった時の事は一切言っていない。
デカ子が100点取れなかった時・・・

僕がケーキおごっても、この命題を否定しいてる事にはならない
の」

「なるほどです　デカちゃん、わかったです」

「・・・」

デカルトちゃんは納得してるようだけど・・・私は・・・

「結論。【pならばq】という命題を考える場合・・・
前提pが正しくないとき、qが正しくても正しくなくても・・・

命題【pならばq】は、正しい事になるのよー！」

$$\begin{array}{c|c} p & q \\ \hline p & q \end{array}$$

$$\begin{array}{c|c} T & T \\ \hline T & T \end{array}$$

$$\begin{array}{c|c} T & F \\ \hline F & F \end{array}$$

F—T—
F—F—
T

部長はこんな表を書いた。

「これ、真理値表しんりちって言うんだ。

Tは【TRUTH】で、【真】って意味ね」

「デカちゃんのバッグにも、【TRUTH】って書かれています」

「そうそう。まさにそれ！ 【真実】とか【正しい】って意味。

Fは【FALSE】。もちろん【偽】【正しくない】って意味ね」

「うーん・・・」

しかめっ面の私。

「はわわ〜。確かに【p】が【偽】の時、【p q】は2つとも【真】です」

「だから

【xが空集合に属するならば、xはどの集合にも属する】ってのはさ・・・

前提の【xが空集合に属する】がすでに間違ってるから・・・
この命題自体は正しい事になる！」

「むむむ・・・」

まだ微妙な理解の私。

「ゆえに【空集合は全ての集合の部分集合である】ってわけ！
ん」。Q・E・D・ね」

「デカちゃん、わかったです」

「う、うん・・・」

論理は難しい。

こうして・・・

この日の部長による【集合論講義】は終わった。何となく解ったよう
な、解らなかったような・・・

「ピタ子さあ、今日もブラジャーつけてるよね？」

講義を終えた部長が、私に声をかけてきた。

「え？」

さっきも言っただけ、私の事を【ピタ子】と呼ぶんだけど・・・

「デカ子のブラジャーは認めるけどさ」

デカルトちゃんは【デカ子】と呼ぶわけで。

「・・・」

つい、自分の胸を覗き込んだ私。明らかに・・・

胸の大きさを【デカ子】【ピタ子】と呼んでいる。失礼な！

ここだけの話、ラッセルちゃんの胸は・・・

ペタンコだ。

「僕、思うんだけどさ。ピタ子に・・・ブラ、必要ないよ？」

胸がつるぺたで、自分を【僕】と称するので・・・時々、男の子に間違えられる部長。本人は男の子と間違えられる事をすごく嫌うので、そこをイジったりはしないんだけど・・・

「あのね、部長。前も言っただけど・・・

私・・・こう見えても、Bはあるんだから・・・」

思わずそう言ってしまった私。だってラッセルちゃんよりは胸あるのよ！これは真実！！

「こう見えても？ 見えてないけど？」

出た。この言い方は彼女の作戦の1つ。

「ぐ・・・だ、だからそれは・・・ 例えであって・・・」

わかってはいるんだけど・・・

「ピタ子、【見えても】と仮定しているのに・・・
見せないって事？」

いつも、ラッセルちゃんの術中にハマってしまう私。

「そ．．．それは．．． そうよ．．．」

「見せないんならさ．．．」

【こう見えても、私はHカップ】とでも言えるじゃん!」

なんていうか．．． 人の揚げ足をとるのが絶妙なよ、部長は。

「そ．．． そりゃ、そうだけど．．．」

「つまり本当はAでも、Hだと言う事が出来る．．．
見せないこと前提なら．．． 何でもありじゃん!」

「う．．．」

言い返せない私。後で知る事になるんだけど．．．これは昔の哲学者の常套手段、【詭弁^{ぎへん}】というものらしい。

「結局はさ。ブラを脱ごうとしないってわけよね?」

「う．．．」

始まった。

ラッセルちゃんは．．．1年前、通称【ブラパラ事件】を起こした張本人。いわゆる【ブラジャー・パルドックス事件】。この事件は、彼女の集合論的パルドックスの追求による結果起きたらしいんだけど．．．

説明すると話が長くなるので、この事件の詳細は【番外編？】に預ける。

「きよ、今日はスポーツブラだから・・・」

「えゝ・・・ハズし甲斐ないゝ。なっせるゝ」

なっせる？

明らかにテンション下がった部長はちよつと落ち込んだ後、私を見た。いや・・・私の胸を見た。

「じゃあ、スポブラの先に豆つけたら？

おっぱい、大きく見えてセクシーになるよ！」

私が豆、大嫌いなのを知ってて言ってる。ここでカッとなったら、またさっきの繰り返しだ。

「豆つけたら・・・ラッセル、ラッセル」

とにかく彼女は下ネタが大好き。あと、オヤジギャグも。てか、中身はただの【エロセクハラ中年オヤジ】だと断言していい。

数学や哲学やってる時は超真面目なんだけどなゝ。

「・・・」

私は思う。このエロオヤジが、あんなセンスのいいラブレターを書いたなんて・・・まず、ありえない。そうとなれば・・・

「ねえ。あなた達・・・」

私はテーブルの上に・・・

「ちょっとコレ・・・見てくれる？」

あのラブレターを置いた。ひと癖もふた癖もある連中だが・・・

「はわ？」

「何？」

この数学倶楽部で、数少ない毎日顔を見せる部員。

「コレ、誰が書いたか・・・わかるかな？」

そして、頭はキレる子達だ。

「はわ？ ラブレター？ いやいや・・・

これがラブレターとは・・・簡単には信じないです」

何かの罰ゲームの可能性もあります」・・・」

私は中から便せんを取り出し・・・それも広げて見せた。

~~~~~  
愛しのルブラン君へ

毎日学園の窓から、あなたを見つめています。  
もっとあなたの・・・近傍きんぽうに入りたい。

私の心はあなたに収束中・・・  
限りなく近付いていきます。

メールアドレスを教えてください・・・  
毎日メーラー展開します

今日の放課後、校庭裏のポール公園にいます。  
トイレ近くのベンチまで、来て下さい。

時間は5時13分でどうでしょう？  
私、1分前にはいておきますから。

それじゃ、放課後・・・  
お会いできる事を信じて、お待ちしております。

P.S.  
あなたにとって、私が十分である必要はないけれど・・・  
あなたにとって必要になれば、私は十分です。

~~~~~

「有界名閉集合にして、この文章センス・・・」

「部長、何言ってるの？」

「コンパクトなのにセンスがいいって言うてるの！
まあ、僕ほどじゃないけどね」

「・・・」

部長のギャグには、センスのかけらもない。

「玄関の前で、コレ落ちてるの見つけてさ……」

私は嘘をつく。愛のためなら、嘘だって平気。

「落とし主に、返してあげたいんだけど……」

これも嘘。私以外に誰がルブラン君を狙ってるから知りたいだけ。

「だからコレ……誰が書いたと思う？」

こうして……数学倶楽部に所属する私・ピタゴラスと……

「デカちゃん的には、まずは部員、全員を疑ってみる！
手紙の主は……」

あなたよ！Pちゃん！」

朝が弱く、疑り深いデカルトちゃん。そして……

「僕が犯人？　ち！　バレちゃしょうがない……
どうせ有罪は確定だ。それならば……」

お前のブラを頂く！」

私のド下手な物真似をする部長。すなわちエロオヤジのラッセルちゃんの3人で……

「おら！ デカ子！ 僕にお豆を見せなさい」

「はわわゝ（笑）」

このラブレターの主を探し出し・・・

「あまいわ！ ラッセルちゃん！

デカちゃんが、女の子と信じているようだけど・・・

果たして真実かしら！？」

そしてその子が【犯人】である事を証明するため・・・

「そんなの・・・ブラを頂けば、解ること！」

「それはどうかしら！？ 仮におっぱいがあつたとしても・・・
意地悪な亡霊さんに、ダメされてないかしら！？」

動き始めた・・・

のか？

（第5話へ続く）

第4話 デカルトちゃんとラッセルちゃん（後書き）

~~~~~

### 次回予告

1年前に起こった、【ブラジャー・パラドックス事件】。

これはラッセルちゃんの、集合論的パラドックスを追求する事がきつかけで起こった。最初の犠牲者はカントールちゃん。

そして・・・

次回 「番外編？    ブラジャー・パラドックス事件」



番外編？      ブラジャー・パラドックス事件（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この2人と共に、真犯人を探し出そうとする。

~~~~~  
番外編？      ブラジャー・パラドックス事件

番外編？ ブラジャー・パラドックス事件

今から約1年前・・・

その事件は起こった。

【現代組】所属のラッセルちゃん。昔から自分より胸が大きい子を見ると、ブラジャーをハズしたくなる衝動に駆られる子だった（これは本人も認めている）。

ある日彼女は

【自ら<sup>みずか</sup>ブラを脱ごうとしない子から、強引にブラをはぎ取る僕】

の存在について考えてみたらしい。そして、本人曰く

「僕も【自らブラを脱ごうとしない子の集合】に属している」

との事。そうすると、どういう事が起こるか？

「僕はブラを脱ごうとしない女の子から、強引にブラをはぎ取るから・・・」

自らブラを脱ごうとしない僕自身の、ブラもはぎ取らなければいけない。

でも、そうすると・・・自らブラを脱いでいる事になってしまい・・・

まさにパラドキシカル！！」

・ 自己存在のパラドックスに直面した彼女は興奮し、あるうことが・

【自ら<sup>みずか</sup>ブラを脱ごうとしない子から、強引にブラをはぎ取る僕】

を【実践】する事を決意。本人曰く、それも立派な哲学的実践だと・  
・・・？

とはいえ、そのためにやるべき事といえば・・・

明<sup>あき</sup>かた<sup>ひ</sup>だ。

最初の犠牲者は、同じクラスのカントールちゃんだった。ラッセルちゃんは彼女に・・・

「ねえ、ブラとって」

と言った。

「は？ 何言ってるの？ 嫌に決まってるじゃん!」

というカントールちゃんの返しに對し・・・

「ふ・・・ 自らブラを脱ごうとしないわけね・・・」

ニヤリと笑ったラッセルちゃん。カントールちゃんの背中に忍び寄り・・・

「3-1」

彼女のブラホックを、一瞬でハズしたかと思うと・・・

「2!」

まるでマジックのように、ブラジャーをはぎ取った。

「1!」

目撃者の証言によると、ラッセルちゃんは奪い取ったブラを高々と持ち上げ・・・

「ラッセル、ラッセル」

と、勝利の雄叫びをあげていたそうだ。

「これで私は、パラドキシカル! ラッセル、ラッセル」

ついでに彼女は・・・どんなブラも、3ステップでハズせると豪語している。そんなスキル、人生で有用か?

こうして・・・

彼女自身、パラドキシカルな存在になりたいがため・・・

クラス中の女の子を巻き込んだ【ブラジャー・パラドックス事件】、通称【ブラパラ事件】が勃発。

この事態を収拾しようと動いたのが、同じクラスの学級委員長・ヒルベルトちゃん。

「は？ ブラはずせ？ あなた、気は確か？」

そんなクラスの秩序を乱す生徒の言う事が聞けるとでも？」

矛盾のない完全なクラス体系作りを目指していた彼女も・・・

システム

「自らブラをハズす気・・・無いわけね・・・」

「当たり前でしょ！ 完全な・・・」

「3！ 2！ 1！」

言わずもがな。2人目の犠牲者となった。

「ラッセル ラッセル」

そしてクラスの女子達は、次々とラッセルちゃんの毒牙にかかる。

「ブラとって！」

の要求に対し

「いや！」

と言う女子のブラをはぎとっては

「ラッセル ラッセル」

勝利宣言と同時に、ブラを高々と持ち上げる。パラドックス以前に、もはやただの変態だ。

「ブラとつて！」

このラッセルちゃんの理不尽な要求に・・・

「いいわよ」

唯一「Yes」と言ったのが、ラマヌジャンちゃん。彼女・・・論理は通じないが、超のつく天才肌で、あらゆる公式を見つけるのが得意な子らしい（ラッセルちゃん情報）。

「じゃあ、取るね」

というラマヌジャンちゃんに対し

「あ！ 待って！ いい！ あんたじゃ、パラドキシカルに反する  
！！」

初めてうるたえたラッセルちゃん。矛盾に反するというのも、変な話だけど？

こうして・・・

ラマヌジャンちゃんを除く【現代組】の女子全て・・・ラッセルちゃんの犠牲になった。

「ラッセル ラッセル」

やがて【現代組】の女の子達だけでは飽きたらず・・・他のクラスの女の子を標的にし始める。

・ 【古代組】に侵入したこのテロリスト・・・いや、エロリストは・・・

私と<sup>あいたい</sup>相対した。

「・・・・・・」

ラッセルちゃんは私の胸をじっと見つめた後、こう言った。

「ブラ、必要？」

これがラッセルちゃんにかけられた、最初の言葉。

「は！？ Cあるから！！」

そしてこれが私からラッセルちゃんにかけた、最初の言葉。

「C？」

「あ・・・ホントは、B・・・プラス・・・  
Bプラスよ！ 四捨五入してCよ！！」

「Bプラス？ それ以前にさ・・・ おっぱいに、四捨五入ってあるの？」

言うなれば、四捨五乳ってか？ ラッセル、ラッセル」

（「な、何よ・・・ この子？ 人のおっぱいをネタにして・・・」  
）

ラッセルちゃんの目がキラリンと光ったかと思うと・・・

「ぶっちゃけ言っけどさ・・・ Aでしょ？」

自信満々でそう言ってきた。

「は！？ Bあるし！！」

「じゃあ、ブラとってよ・・・」

「はあ！？ 頭おかしいんじゃないの？  
なんで、ブラとる必要があるわけ？」

「ふむ・・・じゃあ、あなた・・・」

この当時はお互い名前も知らない。

「自ら、ブラを取ろうとしないわけね？」

「あ・・・当たり前でしょ！？

あんただって、ブラ取りなさいって言われたら・・・

取らないでしょ！？」

「うん」

あの時の嬉しそうなラッセルちゃんの顔は・・・忘れたくても忘れられない。嫌な意味だね。

「3・・・」



「？」

ラッセルちゃんは、突如・・・

「2・・・」

カウントダウンを始めたかと思うと、私の背後に忍び寄り・・・

「1！ ラッセル ラッセル」

瞬殺でブラホックをはずし、ブラジャーをはぎ取った。

「き・・・ きゃー！！」

この後、どうなったかって？

私の口から言いたくないし、言えるわけがない。それは読者の想像に任せる事しておく。

・・・。

事件から数日後。私は数学倶楽部に入部するため、部室を訪れた。  
そこでラッセルちゃんと再会する。

「お？ 古代組の・・・ えっと・・・」

彼女は私の胸を見て、何かを思い出した。

「そうだ！ ピタ子！ 【古代組】のピタ子だ！！

正真正銘のピタ子だ！」

いや・・・ そんなピタ子ピタ子、言わなくても・・・

「・・・」

あんだだっで、胸ピッタコンじゃん。私は失礼かなと思って、触れないでいるのに。

「すでに証明済みだもんね。ラッセル ラッセル」

このセリフから、ブラをハズされた後の事を・・・少し想像できるだろう。

前述したけど、ラッセルちゃんはつるぺたぴったんこ・・・学校1の貧乳だ。

【自分より胸が大きい子のブラをハズす】 【学校1の貧乳】 〓 【無差別エロ】

【 】は、【かつ】と読む。

この命題における等式は、【現代組】で【ラッセルの法則】とよばれている。【ド・モルガンの法則】よりも明かで、本人以外周知の公式なんだって。まあ、集合論は【現代組】しか習っていないから、

私にはあまりわからないけど。

そんなつるぺたびったんこのラッセルちゃんに・・・

「ラッセルちゃんこそ、間違いなくブラいらないから」

なんて言おうものなら・・・

「あなたこそ、ブラ、必要なの？」

となり、あの事件の繰り返しになってしまふ。そんなラッセルちゃんが・・・

数学倶楽部の部長だったのには驚いた。

「僕、集合好きだから」

意味不明な動機で、自ら部長に立候補したらしい。基本、数学倶楽部の人間は・・・自分にしか興味が無い。倶楽部会議で集合に興味あるという彼女以外、立候補する人も推薦される人もいなかったらしい。

「じゃ。僕、部長ね　ラッセル、ラッセル」

こうして我が聖フィロソフィー学園、数学倶楽部の部長に・・・

「集合に必要なのは・・・エレメント！

ん、何かエロい【ひ】【び】【き】！」

エロオヤジが就任したというわけだ。

人のブラをハズすのが趣味・・・そんな子が上の立場に立つなんて、  
どんな混乱を招くだろう。

そう思っていた私だが・・・

現代組のラッセルちゃん。彼女こそ部長にふさわしい・・・

だんだんそう思うようになってくるから不思議。それはこの小説を  
読んでもらえれば・・・みんなわかってくれるだろう。

そしてもう1つ。

後に私は・・・

このラッセルちゃんの【驚くべき事実】を知る事になる。

(第5話へ続く)

番外編？      プラジャー・パラドックス事件（後書き）

次回予告

私達3人は、【from】を見つめながら議論する。

この記号、部長は円周率だといっただけど・・・？

まさか・・・？

次回 「 第5話      パイからの手紙 」

## 第5話    パイからの手紙（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この2人と共に、真犯人を探し出そうとする。

~~~~~  
第5話    パイからの手紙  
~~~~~

第5話 パイからの手紙

「やっぱり・・・ まず、コレからよね」

ラブレターを裏返す私。

【from】

「これ・・・フロム何？ 何かの記号？」

私の質問に、2人は即答してくれた。

「はい！ デカちゃん、わかります！」

これは円周率のパイです！」

「そうそう。おっぱいの【】（パイ）ね」

とりあえず部長は無視したいが・・・

「パイ？ パイって、【】じゃなかったっけ？」

「それ小文字よ。大文字で【】って書くの。」

ピタ子・・・ホント、無理数とか苦手よね」

現代組の部長の知識は、犯人捜索に欠かせない。

「仕方ないでしょ！ 【古代組】では無理数、教わらないんだから！」

「そういえばピタ子。無理数の質問しにきた、教団の弟子・・・半殺しにしたってホント？ すっごい噂になってたよ？」

「あ！ その話！ デカちゃんのクラスでも話題なっていました」

「・・・」

「いくら自分が無理数わからないからってさ。

弟子を半殺しにするってのは・・・僕はどうかと・・・」

「あ、あれは私じゃない！ 私のとりまきが勝手に・・・

【禁忌に触れし者、制裁あれ】とか言ってたさ・・・

その子を校庭裏の川に投げ込んだのよ。

私は一切、関与してないから！」

ここで【ピタゴラス教団】について説明しておこう。いわゆる私のファンクラブで、何故か私は【教祖様】と呼ばれている。そしてファン連中は自らを【弟子】と称し、ぶっちゃけストーカー並に盲信というか、妄信するコアな連中が多い。

デカルトちゃんのファンクラブとは違い・・・私の教団は一步間違えれば、犯罪者になりそうな子ばかり。【万物は数なり】【ピタゴラスの定理】【豆禁】が教団の3大キャッチコピーになっているらしい（私は関知していない）。

弟子になって日の浅い子は・・・熱心なのはいいけど、私が苦手な無理数に関する質問をする時がある。そんな時、これまた熱心な先輩弟子が・・・質問した子を校庭裏の川に投げ込むのが慣例だ。

先にも言ったが、私は豆が大嫌い。死ぬほど嫌い。死ねばいいのに。

そんな私に、新人弟子が【納豆】を差し入れた事があった。

「僕が聞いた話じゃ、納豆差し入れた子をさ・・・半殺しどころか、全殺しにしたって聞いたわよ」

「・・・」

ノーコメント。

「豆、体にもよくて美味しいのに」。
「デカちゃん、豆、好きだけどな」

「僕もお豆、大好き」

部長が言うと、エロにしか聞こえない。

【from】

「^{はなし}話を戻しましょう。じゃあ、これは・・・パイからの手紙？」

「ん・・・僕には、インターセクションに見えるな」

「インターセクション？」

「そ。2つの集合の共通部分。交わりつて事。

僕、一昨日教えたじゃん。

ホントは【U】をひっくり返した感じなんだけど・・・」

うーん。【U】を逆さまにして【∩】か。まあ、見えなくはない。

「デカちゃん。共通部分の事、忘れたです」

「教えたばかりなのに・・・デカ子、もう忘れた？」

ここ最近、部長が講義してくれている【集合論】。一昨日は【共通部分】と【和集合】の話も出た。

例えば、

$$A \equiv \{ 2, 3, 5, 7 \}$$

$$B \equiv \{ 1, 3, 5, 7, 9 \}$$

という2つの集合があった場合、どちらの集合にも属する要素の集合を、AとBの【共通部分】インターセクションといい、 $A \cap B$ で表す。

$$A \cap B \equiv \{ 3, 5, 7 \}$$

つてわけ。ちなみにどちらかに属している要素を集めた集合は【和集合】ユニオンといい、 $A \cup B$ で表す。

$$A \cup B \equiv \{ 1, 2, 3, 5, 7, 9 \}$$

というわけだ。部長曰く、集合論で【共通部分】【和集合】は基本中の基本との事。

「インターセクションか・・・
ルブラン君と、交わりたいてって意味じゃね？」

部長のエロトークはおいといて・・・

「顧問に聞いてみようかな？」

顧問なら部員のことをよくわかるはず。このラブレター見せたら、一発で手紙の主を特定してくれるはず。我ながらいいアイディア。早速・・・

「デカちゃん、思っんですけど」

顧問に頼るのは、多分ダメです」

ところがデカルトちゃん、私の意見にダメだしする。

「顧問のパスカルちゃんは」

学校終わったらすぐパチンコ屋行きます」

パチンコ屋？

「そつえば僕、日曜日にパスカルちゃん見たよ。

赤鉛筆耳にかけて、競馬新聞を凝視してた」

競馬？

「その新聞の裏側にさ・・・裸の女の人も載ってて興奮したわ」

ラッセル、ラッセル」

「デカちゃんの担任ですけど・・・」

そつ。数学倶楽部顧問のパスカルちゃんは、【近代組】の担任でも

ある。

「放課後」担任、見かけた事無いです」

「でも授業だけは上手よね、あの先生。

僕、確率論の授業受けた時さ・・・

わかりやすくて、けっこう感動したわ」

「ええ？ デカちゃん、しょっちゅう怒られるです」。

【お前、空しいよな】【お前の哲学、浅いんだよ】って・・・」

「【古代組】の授業では、なんか変な事言ってたな」。

【結婚＝殺人】が成り立つとか・・・」

「あー！ それ、言ってた！ 僕も聞いた！」

井戸端会議になりかけたが、話を総合すると・・・どうやらは顧問はギャンブル好きらしく、授業が終わるとすぐにパチンコ屋が競馬場に出向くらしい。

「ふむ。パスカルちゃんに頼る作戦は・・・ 無しね」

「無しです」！」

「ナッセル！」

なっせる？ こうして顧問経由の犯人搜索は、全会一致で否決された。

「どうやって手紙の主を見つければ・・・
他に何か手がかりないかしら・・・？」

部長が手を挙げた。

「容疑者の人数は、有限なんだからさ。
しらみつぶしに、部員全員あたればいいんじゃない？」

【あなた、ラブレター落としませんでした？】ってさ

自信満々で言いあげたものの・・・

「でもほとんどの部員・・・学校終わったら、散らばるのよね」

部室に顔出すのは、私達3人ぐらい。他の部員は、基本幽霊。たまに顔見せても、すぐどこか行っちゃう。

「うーん、確かに。僕達は、毎日ここ来るけど・・・
帰宅部員を始め、他の部員がどこにいるか把握できないな」

かといって、休み時間に各クラス回るのも・・・

「【古代組】 【中世組】 【近代組】 【現代組】 【東洋組】の5クラス。
ス。

部員は、全てのクラスに散らばってるし。

1つ1つ回るのも、けっこうめんどくさいわよ。」

「デカちゃん、めんどくさいの嫌いです」

「あ、僕もめんどくさいのダメ。はい、ナッセル!」

なっせる?

「はい!」

今度はデカルトちゃんが手を挙げる。

「はい、どうぞ」

あまり期待せずに、彼女に発言権を与えた。

「5時過ぎにポール公園行けばいいと思います」

「あ・・・」

「あ・・・」

部長と同時に声を上げる私。何故、気づかなかったんだろう?
時計を見ると午後4時過ぎ。学校から公園までは、10分もあれば
行ける距離だ。

「デカルトちゃん・・・ あなたの言う通りだわ。
手紙の主は・・・」

ポール公園、トイレ近くのベンチに座っているはず・・・」

「デカ子! 冴えてるじゃん!
ご褒美に・・・ラッセル、ラッセル」

「きゃゝ!!」

また始まった・・・。

私は2人を部屋に残し、部屋を出ようとする。

プチン

「!？」

瞬間、ブラホックがハズれる感覚を味わった。

「ふふ・・・スポーツブラなんて嘘ね。僕にはお見通しさ!」

酔っぱらって気分が高揚すると、キスをしたくなるオヤジがいると聞くが・・・

「【ブラを脱ごうとしない子のブラを、強引にはぎ取る女の子】
この命題のパラドックスに・・・ いざ、挑まん!」

部長は気分が高まると、人様のブラをハズしたくなる・・・結局エロセクハラオヤジってわけだ。

「ラッセル ラッセル」

「ちょ・・・」

この変態のせいで・・・ 無駄な時間を過ごしたのは言ってもない。

(第6話へ続く)

第5話 パイからの手紙（後書き）

次回予告

部室を出た私。思いがけず何者かとぶつかった。

目の前にいたのは・・・部長と同じ【現代組】のソーカルちゃん。

不思議な服装の彼女は、突然意味不明な事を言ってきた。

次回 「 第6話 ソーカルちゃんと理事長 」

第6話 ソーカルちゃんと理事長（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この2人と共に、真犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に行こうとするのだが・・・？

第6話 ソーカルちゃんと理事長

第6話 ソーカルちゃんと理事長

ボタン！！

「あ．．．」

部室を出た私は、出会い頭に誰かとぶつかり．．．

ドスン

その場で倒れてしまった。

「いてて．．．」

お尻をさすりながら前を見ると、ぶつかった相手も尻餅をついている。

「2分の1mVの2乗が、帰納的に分子間力によって引き裂かれ．．．」

「？」

その子の洋服には、色々な数式や化学記号がプリントされていた。

「じ、ごめんなさい．．．」

前を見ず部室を出た私．．．明らかに私の不注意でぶつかったので、素直に謝るが．．．

「ユークリッド空間なら・・・カノンコードで調和がとれるけど・・・」
もし、遠近法によるミステイクシヨンの世界なら・・・？」

その子は、ニヤニヤしながら私に語りかける。

「は？」

首をかしげる私。

「オールの雲の中で見たわ。
垂直落下式・・・クローズインターバルによるタイムトラベルを・・・」

「ちょ、ちょ・・・あなた、大丈夫？」

絶対、この子・・・

「エントロピーが増大すると、ジュール熱によるガンマ線の波長が・・・」

打ち所が悪かったんだ。

「おろ？ ソーカルちゃん・・・」

私に続いて、部室を出てきた部長。私がぶつかった相手に、手を差し出した。

「・・・」

その子は部長の手を握り、ゆつくりと立ち上がる。

「1/f揺らぎってあるでしょ？」

ベジタリアンの世界じゃ、ヴァンデグラフにG難度なの」

立ち上がると、ニヤニヤの視線をラッセルちゃんに向け・・・さらに語り始めた。

「ロンゴロンゴ文字で、コックリさんやるとさ・・・」

4コマ滑りのディアミドフから逆転してヒーリーを得られるから！」

「はいはい。わかった、わかった・・・」

ラッセルちゃんは、その子の背中を押し・・・

「相対性理論も、アウトオブプレイスアーティファクツも・・・
フラクタル音階で、現在完了なの」

「ほら。【物理倶楽部】は、隣・・・」

隣の部屋へ押し込む。

「私！！ あなたのドッペルゲンガーを見たわ！！」

押し込まれたその子は、私を指さしてそう言った。直後・・・

「じゃ、また明日ね。ソーカルちゃん」

ボタン！

部長が物理倶楽部の扉を閉める。

「ふゝ・・・」

やれやれという表情を浮かべる部長。幸いにも、その子が再び私達の前に現れることはなかった。

「ソーカル・・・ちゃん？」

「うん。僕と同じクラス。【現代組】のね・・・」

「デカちゃん、聞いた事あります」

ラッセルちゃんの後ろからひょっこり現れたデカルトちゃん。

「デカちゃんが聞いた話では、早口言葉で専門用語を言って、校内意見発表会で最優秀賞とったんです」。

でも授賞式で【全部嘘ぴょん】って、笑い飛ばしたって聞いてます」

「お？ デカ子、よく知ってるね」。

【ソーカル事件】って、ヤツだね」

「ソーカル・・・事件？」

「まあ、クラスでもかなり変な子だからさ。
あまり気にしない方がいいよ。さ、公園行こ」

【現代組】 って所は部長を始め・・・

「うん・・・」

変人の集まりらしい。

「数学倶楽部のメンバーで外へ行くのって、初めてかも。」
デカちゃん、ドキドキです」

「お？ ドキドキしてる？ どれどれ・・・
ちよっとブラジャーハズして、お胸を・・・」

「きゃ」

また始まった・・・。

「これ！」

不意に男性の透き通るようなテノール声が、私達にかけられた。

「あ・・・」

物理倶楽部の前にたたずむ、スーツ姿のダンディなおじさん。少し
白髪が目立つ巻き毛で、身長は推定185cmと大柄。ネクタイ姿
をビシッと決めた我が聖フィロソフィー学園・・・

「サンジェルマン理事長・・・」

「・・・」

私達3人を睨み付けている。いや・・・私を睨み付けてる？

「廊下で騒がないように。部室に入るか、静かに廊下を歩きなさい」

目つきは鋭いけど、優しい口調で注意する。

「すみません・・・」

頭を下げた私。後ろの2人も、一応頭を下げている。

「仲がいいのは良いことだが・・・
君達は今朝早くも・・・校舎の屋上ではしゃいでいたね？」

「え？」

「はわ？」

「えゝ？」

私達は同時に、疑問の声をあげた。

「僕たち、朝は一緒じゃないですよ？」

「そうです。デカちゃんは今日、遅刻しましたゝ！」

いや・・・だからそれ、胸をはって言える事か？ しかも理事長の前で？

「そ、そうです。私達は今日、倶楽部で初めて顔を合わせました」

「・・・」

理事長の眉がつりあがる。

「そうか・・・。失礼。人違いだったようだ。
まあ、とにかく。はしゃぐ時は、場所をわきまえて」

「は、はい！ 失礼します！」

私は横にいた2人の袖を引っ張り、その場から立ち去った。

「僕たち、誰と勘違いされたんだろうね？」

「デカちゃんも気になります」

「・・・」

チラッと後ろを見ると・・・理事長が、こちらをジッと睨み付けた
ままだった。

「理事長・・・」

ロリコンかしら・・・？」

女子高生を見つめ続けるって事は、その可能性も否定できないって
わけよね？

「わ。理事長、ずっとピタ子見てるよ。
ひよっとして、興味あるんじゃないの？」

部長が私の背中をポンと叩く。

「可能性アリです」。だからあんな作り話を言って、気を引いたんです」

「まさか・・・」

再び後ろを振り返ると、彼が物理倶楽部に入っていくのが見えた。

「・・・」

確か理事長・・・化学の先生だったはずだけど？ 何故、物理倶楽部へ？

サンジェルマン理事長の事をちょっと気にしながらも・・・

私達3人は、学校を出ようと1階へ降りていった。

（第7話へ続く）

第6話 ソーカルちゃんと理事長（後書き）

次回予告

外に出ようと、1階の廊下を歩く私達。タレスちゃんやヘラクレイトスちゃん達が、万物の根源についてディスカッションしている所へ遭遇する。

次回 「 第7話 万物の根源^{アルケー} 」

第7話 万物の根源（アルケー）（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この2人と共に、真犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に行こうとするのだが・・・？

第7話 万物の根源^{アルケー}

第7話 万物の根源（アルケー）

一介の化学教師だったサンジェルマン先生は、ある日偉大な化学の実験に成功した。くわしくは知らないけど、人はそれを【錬金術】と言ったって。そのおかげでサンジェルマン先生は超のつくお金持ちになったらしい。

そして私立学校として経営の危機だった聖フィロソフィー学園を立て直すため、理事長に就任したのが数年前。彼のおかげで廃校の危機を免れた本校・・・最近、共学になったのもサンジェルマン理事長の発案だったそうだ。

まあ私的には、ルブラン君と運命の出会いをしたのだから（遠くから見つめるだけで、喋った事ないんだけどね）・・・サンジェルマン理事長様々って感じよね。

そんな聖フィロソフィー学園・・・通称「テツ学」。放課後の廊下を歩くと、色々な連中と遭遇する。今、私達は玄関に向かうため、1階の【古代組】の前を通っているが・・・

「万物の根源は・・・水ですわ」
アルケー

「いやいや、火だっぺよ!!」

「原子だっちゃ!」
アトム

そこでは毎日、万物の根源・・・すなわちアルケー探しのディスカッションが行われている。

「水はどんな形にもなれるのよ。それに生命の起源は水にあり。もつとも万物の根源にふさわしいのは・・・水ですわ」

まるでネグリジエのようなスケスケの服装で・・・おっぱいも大きいタレスちゃん。

「それなら火だって、形を変えられるっぺよ！」

魔法使いのような出で立ちのヘラクレイトスちゃん。

「いやいや。原子^{アトム}の結合次第では、どんな形にもなれるっちゃ・・・」

巫女のように可愛らしい姿のデモクリトスちゃん。万物の根源^{アルケー}について語りあうこの3人の輪の中に

「デカちゃん的には・・・全て疑わしい！
つまりあなた達は・・・」

デカルトちゃんが乱入した。

「あら、デカルトちゃん。今度は私と・・・勝負するつもり？」

タレスちゃんがけんか腰に言葉を投げつける。

「はわ？」

首をかしげるデカルトちゃん。その横にいたラッセルちゃんと、タレスちゃんの目が合った。

「!？」

瞬間、タレスちゃんは・・・両手で胸を抑える。あれ？ ブラジャ
ーつけてないよね？

「部長、タレスちゃんのブラ・・・取った？」

「あのさ、ピタ子。僕が見境無く人のブラ、取ったりするように見える？」

見える。

「タレスちゃん・・・普段から、ノーブラだったわけ？」

「だから僕、彼女のブラなんか取ってないし」

明らかに警戒心むき出しのタレスちゃんは、部長に声をかける。

「あんた・・・もう、十分でしょ？ さっさと行きなさいよ・・・」

「

タレスちゃん・・・部長が苦手みたい。過去、何かあったのだろうか？

「部長・・・タレスちゃんを襲ったんじゃないの？」

「まさか。僕がそんな事をするように・・・」

見える！

「まあ、あの豊満な生乳・・・揉んでみたいけどさ。
僕にだって理性があるよ」

人のブラはずしまくった前科数犯のエロオヤジに・・・理性なんてあるのか？

「いい？ デカちゃん的には」

デカルトちゃんは、3人を交互に指さし・・・

「絶対的な何かを探すには・・・
あなたたち、【萌え】が足りないわ!!」

ドヤ顔で言つてのける。

「あなたの言う【萌え】だって、水じゃないのー!？」

「いやいや・・・火だっぺお!」

「だから、原子アトムだっちゃ・・・」

彼女たちには通じない。

「我思つ、ゆえに我萌えゝ！ それだけが唯一の真実!!」

「あの・・・」

熱く語るデカルトちゃんに、背中から声をかける人物がいた。

「あの・・・絶対壊れない・・・アイデアの世界について語らない

「？」

まためんどくさいのが現れた。時間が気になる私はデカルトちゃんの腕を掴み、ディスカッションの輪から引きずり出す。

「プラトンちゃん、ごめんね。」

私達、ちよつと用事があるの」

ヒラヒラのスカートに三角形のアクセサリーをつけたプラトンちゃん。

「ほら、デカルトちゃん。行くわよ！」

プラトンちゃんに背を向け

「アイデア・・・」

「水・・・」

「火・・・」

「原子アトム・・・」

背後に、古代組の白熱ディスカッションを聞きながら・・・

「はわわ　萌えです」

後ろ髪引かれるデカルトちゃんの中を押し、私達は靴箱へと向かった。

「僕的にはさ」

ディスカッションを遠目に見守っていた部長が、口を開く。

「デモクリトリスちゃんは、なかなか・・・」

「デモクリトスちゃん!!」

油断するとベクトルが変態の方を向く部長。

「そうそう。デモクリトスちゃんね。

万物の根源が^{アルケー}原子^{アトム}・・・

なかなか確信ついてると思うな」

「・・・・・・」

以前はよく・・・私も、アルケーディスカッションに参加していた。

【万物の根源は、^{アルケー}数である!】

これが私の持論。だけど、私のファンクラブ【ピタゴラス教団】の人以外・・・ほとんどこの意見に耳を貸さないのよね。

「数って何ですか?」

「見えないし! 書かないと見えないし!」

「そんなものが、万物の根源^{アルケー}っちゃ?

ちゃんちゃらおかしいっちゃっちゃん！」

みな自分の主張こそが正しいと思ってる。まあ、そういう私もそう
なんだけど……。

「でもピタ子も、なかなかいいセンいつてるよ」

部長は私の意見を褒めてくれる。教団以外の子では、唯一の人物だ。

「聖メンデレーエフ学園の子達と合コンした時さ。

元素は番号がついてる。つまり数字と元素は対応してるのよ」

合コン？

「それに僕たちがいる場所だって、座標系で数値表現できる」

「はい！ 座標はデカちゃんが発明しました〜！」

「デカ子の発明は、直交座標。色んな座標系あるけど……

やっぱり最初の座標系を創始したのは偉いね、うん」

部長が言うには……例えば北緯何度、東経何度、高さ何mとかで
この地球上の【位置】は全て【数字】で表現できるという。さら
に、その位置にある物質も全て元素レベルで考える事ができ、そ
れら元素も数字が対応しているという。

「あとは質量なんかも、全て数値表現できるしね。

この世に存在する物は、数字で表現可能。例え見えなくても……

」

「見えなくても？」

「例えばブラックホール。」

光ものみこむわけだから、直接観測されたワケじゃない。

「X線など電波の観測数値を元に、位置を特定しているんだ。つまり数字だけが、見えないブラックホールの存在を主張しているのよ」

部長曰く・・・数字があれば、その物が存在している位置や材質、質量や大きさなど全て表現できる。例えば私達の目で見えなくても、つまり全ての物の存在は、数字に還元できる・・・

「僕は、【全て】とは言っていないよ」

これ以上は【存在論】という哲学の深いところまで発展する事になるので・・・その話はまたいつか。

「だからピタ子。万物の根源は数字アルケー・・・

正解とは断言できないけど、いいと思うよ。マジで」

「でも、数字の世界も疑う余地はあるでしょ」

デカルトちゃんの哲学は全てを疑う事から始まる。

「待ってよ、デカルトちゃん。例えば座標系も疑えるって事？」

「もちろんです」

「そんな事言ったら、デカ子。

君が開発したデカルト座標も、正しくないって事になるよ?」

「だからデカちゃん、言ってるじゃない?。」

萌えの私だけが、唯一正しいの!

その私が考えた座標系は正しい・・・はわ?

でもさっき、疑う余地があるって言うちゃったし・・・」

「ほら、パラドックスに陥った」

嬉しそうに部長が言い放つ。

そう・・・

私達は毎日・・・こんな話し合いをしている。

ある者は、物質とは何かについて研究し・・・

ある者は、生きる意義は何かと考える・・・

ある者は、正義とは何かを語り・・・

そしてある者は、知識とは何かを追求する・・・

何も知らないという事さえ、【知】だという人もいる。

「【ムチの血】ってヤツでしょ!

興奮するね〜 ラッセル〜 ラッセル〜」

「違います。【無知の知】です！」

「……………」

「おろ？ いつも真っ先にツッコミ入れるのはピタ子なのに……
放置プレイ？」

「いや……私も1つ、【知】を得たわ」

「何です？」

「【ベタなエロオヤジギャグは、殺意を芽生えさせる】」

「あゝ。僕もそれ、わかる！！ すっごい、よくわかる！」

こいつはわかってない。

「……………」

部長の邪魔が入っちゃった。話を戻そう。

私達【人】はどこから来て、どこへ向かっているのか……

その存在意義とは何か？

何故、私達は感情があるのか？ 愛とは何か？ 生きるとは？

それらについて考える事は全て【哲学】の対象だ。

そして多くの哲学者は・・・それら思考の先にある、大きなテーマにぶちあたる事になる。

それは・・・【神の存在】。

【現代組】では【大統一理論】や【ビッグバン】、【インフレーション理論】や【超ひも理論】など、最新の科学や数学を学んでいるらしいが・・・

実のところ、それらの根本は不確実なのである。

結局行きつく先は、それら全ての源。みなもとおそらく【絶対的な何か】・・・多くの人はそれを【神】と表現する。そしてその存在を認めなければならぬのかという議論になる。

【神】の定義とは何か？ 【神】の存在をどう証明するのか？ そもそもこの世の起源は【神】でしか語れないのか？

現代組の天才児と言われるニーチェちゃんは

【神。お前はもう、死んでいる】

という言葉で、一躍時いちやくの人になった。これは【神は存在していたが、すでに死んだ】という意味ではない。彼女の言う【神】とは、絶対的な象徴・・・例えば【神】もそうだが、【真理】や【善】などもそれにあたる。それらはもはや無価値である・・・という彼女の主張を表したのが、上の言葉だ。

しかし彼女とて・・・

神が存在しない事を証明したわけではない。

この先、万人が納得する【答】が見つかるのかどうか・・・今のところ、誰にもわからない。

「・・・」

今の私はそれよりも・・・

「さ。ようやく学園の外に出たわ。
ポール公園に向かうわよ」

^{ライバル}
恋敵が誰なのか・・・それにしか興味が無い。そして無価値かもしれない【愛】のため・・・

その子の前に立ちはだかつてやる。

「公園、見えてきたです」

「青空教室つてのも、アリだね。
部長として週一ぐらい、公園で部活つてのも考えようかな」

「・・・」

もうすぐ目的地に到着する私達。

・・・。

ちょうどその頃。

理事長室では、私達の想像を超えた【物】が運ばれていた。

「じゃ、ここにサインお願いします」

「・・・・・・」

サンジェルマン理事長は、無言で宅配業者の差し出した用紙にサインする。

「では、失礼します」

業者が部屋を出ると・・・目の前にある、段ボールを見つめた。
1辺約1・5mの、大きな立方体の段ボールだ。

「これが・・・」

その段ボールを、右手でさすりながら

「これが・・・」

【神】の贈り物か・・・」

理事長はそう呟いた。

（第8話へ続く）

第7話 万物の根源（アルケー）（後書き）

次回予告

公園内のトイレに隠れ、私達は犯人が現れるであろうベンチを監視していた。

そしてとうとうその子は現れた！

急いで私は犯人の正体を確認しようとするが・・・？

次回 「 第8話 謎のメッセージ 」

第8話 謎のメッセージ（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、何者かのラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に向かった私達は・・・

## ~~~~~ 第8話 謎のメッセージ ~~~~~

## 第8話 謎のメッセージ

ブラパラごっこに巻き込まれたり、ソーカルちゃんとぶつかったり、アルケーデイスカッションに（デカルトちゃんが）プチ参加したり・

結局、ポール公園についたのは午後5時5分。

手紙の主は5時12分までに、トイレ近くのベンチに座っているはず。この公園にトイレは1つ。そしてその前にあるベンチも1つしかない。

「ベンチには、誰も座っていないです」

「トイレとベンチは、完全に1対1対応。  
つまりあのベンチに・・・」

手紙の主は、今から現れるはず。  
名探偵ラッセル〜 ラッセル〜

部長が張り切っている。

「デカちゃん達、どこにいておきますか？」

「・・・」

しばらく考えた私。

「あそこしかないわね」

私達はトイレの中・・・一番奥の個室に3人で潜り込んだ。

「わお。個室に3P!? ラッセル、ラッセル」

「こらこら！」

「これは18禁小説じゃないの！  
そういう発言は禁止!!」

「【P】は【philosopher】（哲学者）の【P】だよ！  
ピタ子、何エロい事考えてんの？」

嬉しそうな部長。

「う・・・」

そして言葉に詰まる私。

「でも、みんなでトイレに入るなんて、  
デカちゃんも、ちよつとドキドキです」

「デカルトちゃんまで・・・」

他の個室には窓がない。だけどこの奥の個室だけは、小さな曇りガラスの窓がある。その窓をちよつと開けると、あのベンチが見えるのだ。

私達3人は狭い個室で身を寄せ合いながら、その時を待つ。

午後5時10分。

「僕、おしっこしていい？」

「ダメ！」

「僕、緊張するとおしっこしたくなるんだけど・・・」

知らないって。

「デ、デカちゃんも・・・その・・・ おしっこしたいです」

「ええ!？」

溜息をつく私。

「じゃあ別の個室行って、用を足してきてよ・・・」

「ほい」

「はい」

2人が個室を出て行ったその時・・・

「は!？」

あのベンチに・・・

「誰!？」

何者かが歩み寄っていくのが見えた。背は私と同じぐらい。ブカブカの帽子を深くかぶり、大きすぎる黒いコートを着けている。

「あれじゃ・・・」

その子はトイレに背を向ける角度で歩いてきて、ベンチにちょこんと座った。

「誰かわからない」

迷ってる暇はない。私はすぐに個室を出ると、トイレの外に出た。

「・・・」

ベンチの方を見ると、その子が走り去っている姿が見える。

「く・・・」

私はすぐに彼女を追いかけようとした。どうしても・・・

「あの子は・・・？」

その子の正体を知りたい。だけど・・・

「!？」

ベンチの前を通り過ぎようとしたとき

【ピタゴラスに告ぐ】

そう書かれた手紙が、ベンチの上に置かれているのが目に入った。

「・・・・・・・・」

走り去るあの子と、その手紙・・・交互に目をやる私。追いかけたけれど、手紙も気になる。

結局手紙から目を離せない私は、必然的に歩<sup>ほ</sup>が止まった。それを手に取り、裏返す。

【from U】

そう書かれていた。

「フロム・・・ユー・・・？」

顔を上げると・・・すでにあの人物の姿はない。

「・・・・・・・・」

「ピタ子〜!」

「いつの間に、ベンチに行っただんですか〜？」

2人が仲良く、トイレから出てくる。

「ピタ子、誰かきたの？」

「う、うん・・・」



「誰だっ たんですか〜？ 気になります〜」

私は首を横に振った。

「私がここに来たら、すぐ逃げていった。  
帽子を深くかぶって、コート姿で・・・」

いったい誰なのか・・・」

「え〜？ じゃ、ピタ子・・・  
結局、わからないまま？」

「うん・・・」

「はわ？」

デカルトちゃんが、私の手に握られた手紙に気づく。

「それ、何です〜？」

「これは・・・」

2人の前に、私は【f r o m U】の手紙を見せた。

「はわわ？ フロム・・・ユー？」

「表は？」

手紙をひっくり返す私。

【ピタゴラスに告ぐ】

「ピタ子に告ぐ？ 何、コレ？」

「さあ？」

「デカちゃんは、中を見てみたいです」

「まあ、まあ。まずはピタ子から見なよ」

「う、うん・・・」

私は封を切って、中を取り出した。便せんが1枚あるだけだ。

「・・・」

たった1行だけ、そこには書かれてあった。

「どう？ ピタ子？」

「何、書かれているんです？」

「うん・・・」

見せても問題ないと判断した私は、便せんを広げて2人に見せた。

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ！】

「おゝ。いいね。ライバル心、伝わる！」

有界閉集合でいて挑戦的・・・僕、こついうの好きよ」

「はわわゝ ルブラン君をめぐって、恋の三角関係勃発ですゝ」

「ちよつと2人とも・・・ 大事な事忘れてるわよ！」

そう。この手紙は・・・

「大丈夫、言わなくてもわかつてるよ。

この手紙のパラドックスをね」

明らかな矛盾を含んでいる。

「ええ？ デカちゃん、何が矛盾なのかわかんないですゝ」

「コレ書いた人の立場になれば、すぐわかるよ」

さすがは部長。

「このピタ子に宛てた手紙は・・・

ピタ子がルブラン君に関わろうとしていた事を知っている。

しかも、今、ここにピタ子が現れる事も知っていた」

それだけじゃない。この【U】はルブラン君がここに来ない事も知っていた？

「はわわゝ やっぱデカちゃん、わかんないですゝ」

「【ピタ子がここに現れるのをどこで知ったの？】って事さ。だって、この公園に来ようってなったのは・・・」

「ついさっきでしょ？」

「あゝ！！ わかったですゝ！

デカちゃん達がここに来るのを決めたのはゝ ついさっきなのに

ゝ

この手紙書いた人はゝ ここに来るのを知っていたゝ  
おかしいですゝ」

「はい、デカ子！ 繰り返しの説明、ありがとさん」

「おかしいわ。ありえるの？

コレを書いた人・・・まるで未来を知ってたみたい」

「まあ焦らず。最初から整理しよう。

まずは・・・この公園に来ようと言ったデカ子が疑われるわね」

「はわ？ デカちゃんが！？」

私がトイレの個室からベンチを見ていた時・・・デカルトちゃんも部長も、私の側にはいなかった。

「でも僕は、デカ子がおしっこする【音】を聞いていた。

その間に、何者かがこの手紙をベンチに置いているから・・・

デカ子はアリバイある。シロね！」

「・・・」

「きゃー！ デカちゃんのおしっこ・・・聞いてたですかー!?」

「ラッセル!」

らっせる？ 皮肉にも部長のセクハラ行為が・・・デカルトちゃんの無実を証明した。

「そのデカ子と一緒にトイレから出てきた僕も・・・当然シロ」

そう言つと部長は私をじつと見る。

「え？ まさか私・・・疑われてる?」

「可能性の問題。否定はできないってヤツね」

「ちょ、ちょっと待つてよ。」

デカルトちゃんが公園に行こうと言つてから・・・

私達、ずっと一緒だったじゃない。こんな手紙を書く時間なんてないわよ」

「ちっちっち!」

部長は人差し指を左右にふつた。

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ!】

「ほら、この手紙の内容。別に公園を示唆してるわけでもないし・・・

・  
あらかじめピタ子が用意しておいて、今、そのベンチに置いた。

その可能性もあるって事よ」

「はわわゝ 自作自演ですゝ」

「えゝ！ じゃあ私、嘘言っただって事じゃん！」

「ブラサイズを【C】って言ったのも嘘だったじゃん」

「そ、それとこれとは．．．」

「まあ、あくまでも可能性って事よ。

真実を追究したければ、あらゆる可能性を考えなきゃね。

それが僕達、哲学者の務めなんだからさ」

「．．．．．」

なんていうか．．．。部長にはいつも、うまく言いくるめられているような気がする。

「大丈夫。今んとこ、僕はピタ子が【U】だと思って無いから。じゃあ次は、ここにいない人物の可能性を考えましょう。

ピタ子が見た子って？ どんな感じだった？」

「誰なんだろう？ あつという間に逃げていったけど．．．」

「もっと情報無いの？ 身長とか、おっぱいの大きさとか？」

「身長は・・・私と同じぐらいだったかな？」

コート着けてたから、おっぱいはわからないけど。

それと・・・」

私は見た。あの子が立ち去る時、コートの裾すそから

「何か、角張ったものが見えた。コレみたいなの・・・」

髪の毛につけた三角定木のアクセサリーを2人に見せる。

「・・・」

部長がじつと定木を見つめた。なんだか私が【U】っていう可能性を増やしたような気もするけど・・・

「プラトンちゃんかな？ 数学倶楽部だし・・・  
それに彼女。そういうアクセ、持ってるわよ」

「プラトンちゃん・・・」

私と同じ【古代組】の子。いつも隣のソクラテスちゃんのために、必死にノートを取っている。ソクラテスちゃんは、ノートを一切取らない子で有名。なんでもプラトンちゃんは、ソクラテスちゃんをかなりリスペクトしているとか？

「でも、プラトンちゃんは、デカちゃん達が学校出る時、  
ずっと校内にいた感じだったです」

そうだ。

「確かに。私、同じクラスだけど・・・」

放課後はいつも、ソクラテスちゃんの後ろをついていたり・・・

アイデアアと言って、校内で誰かとディスカッションしてる。  
今日みたいだね。外に出るのは登下校の時だけ・・・」

「プラトンちゃんはシロです」

「うん。数学倶楽部で、ピタ子とプラトンちゃん以外で・・・  
角張った小物持った子、他にいたかな？」

「ここは・・・テッ学の生徒全員を、捜査対象にするべきかもです」  
「」

「私と同じぐらいの背で、角張ったアクセを持った子・・・」

「デカちゃん的には、Pちゃんが見たのは、  
Pちゃん自身、って感じですよ」

「話を総合するとそんな感じするよね」。  
とつとつピタ子も・・・

僕みたいに、パラドキシカルな子になっちゃった？」

「はわわ、デカちゃんもパラドキシカルなのに・・・  
Pちゃんも仲間入りですか？」

いや・・・何、言ってるの？



「おお！ パラドキシカル！

3人ともパラドキシカルで3P！！」

ケラケラと笑う2人を横目に、今一度私はその便せんを見つめた。

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ！】

手紙の主が私？

「冗談。こんな手紙なんか、書いた事ないし！」

何よりも・・・この手紙書いた人物は、私の性格を全くわかってない。

「【邪魔するな】なんて言われたら、邪魔したくなるのが私よ！」

「うわ・・・ピタ子、なんかイメージ悪！」

「でもデカちゃんは、Pちゃんの事、好きです」

「いや・・・そんなフォローしたら・・・

ホントに私、性格悪いみたいじゃん」

愛しのルブラン君に関わらないで？ それは私にとって、関わりなさいって言ってる事と同値だ。

「はい！ デカちゃん、1つ気づきました！

この【from U】！

「【U】から始まる子を探せばいいと思います！」

「【U】か・・・僕の記憶では、【U】から始まる生徒・・・  
テツ学には、1人もいないわ」

「あ、ホラ。

部長と同じクラスに【ワイトゲンシュタイン】ちゃんがいたでしょ？

あの子、イニシャル【U】じゃない？」

「ううん。彼女は【U】でなくって、【W】から始まるよ」

「デカちゃんの記憶にも、【U】から始まる子って・・・  
あの学校にはいないです」

「【U】から始まる子はいない。なら、この【U】はいたい・・・  
？」

言いながら、部長が【U】を睨み付ける。

「・・・」

しばらく考えていた部長が、口を開いた。

「ユニオンかも・・・」

「ユニオン？」

「うん。集合で【 】はインターセクションだったでしょ？」

「【U】はユニオンを表したじゃん」

「昨日、部長から習ったヤツだ。」

「集合論は、現代の論理学とも密接に繋がっている。」

「僕たち哲学者が真なる何かを見つけようとしたら・・・」

「それを証明する道具が必要でしょ？ 集合論もその道具の1つってわけ」

「という部長の信念の元、私達は集合論を学んでいるけど」

「ユニオンか？ うん・・・」

「果たしてこの【U】は、ユニオンなのか？」

「最初ピタ子が見つけた【from U】。」

「そして今回は【from U】。」

「2つの手紙の主は、同一人物とみて間違いなさそうね」

「私も同一犯という意見に賛成だ。」

「最初が【インターセクション】。次が【ユニオン】を表しているなら・・・」

「表しているなら？」

「手紙の主は集合論を知っている人物。」

「そして集合論は【現代組】しか習わない。」

つまりこの手紙の主は・・・

僕と同じ【現代組】の子の可能性が高いわね」

「・・・・・・・・」

エロセクハラオヤジではあるけれど・・・【現代組】ゆえの豊富な知識、それに説明のうまさ、何より洞察力の深さ。やっぱり【数学倶楽部】の部長として適任だなと思わされる。

部長の言う通り。【】と【U】が集合論の記号を表しているのだとすれば・・・

「【犯人】は【現代組】の子・・・」

この時の私は、意外な犯人の正体に気づくはずもなかった。

（第9話へ続く）

## 第8話 謎のメッセージ（後書き）

次回予告

部室へ戻った私達は、再びソーカルちゃんと遭遇する。これまでの状況を整理して犯人を探ろうとする。

倶楽部終了後、私は・・・

ルブラン君の家に向かった。

次回 「 第9話 ドッペルゲンガー？ 」

## 第9話　ドッペルゲンガー？（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

~~~~~  
デカルトちゃんの提案で、ポール公園に向かった私達。怪しい人物を見かけたが逃げられてしまう。そしてその人物は、これ以上ルブラン君に関わらないでというメッセージを残していた。

## ~~~~~ 第9話　ドッペルゲンガー？ ~~~~~

## 第9話　ドッペルゲンガー？

午後6時前。

私達は学校に戻ってきた。部室の前で、再びソーカルちゃんと遭遇する。

「ライデン瓶の中に、冬虫夏草を入れておくとね・・・  
カーボンによるサイクロンが発生し、コリオリの力で・・・」

相変わらず意味不明な事を・・・

「はいはい・・・  
僕たち、数学倶楽部のミーティングあるからさ」

先ほど同様、部長がソーカルちゃんの背中を押し・・・

「マヤ预言の真相は、リーマン予想によるコペンハーゲン解釈的で・・・」

「明日、話を聞くからさ。じゃあね、ソーカルちゃん」

物理倶楽部の部室へ押し込む。

「私！！　あなたのドッペルゲンガーを見たわ！！」  
デジャビュ？　ソーカルちゃんは、私に指さしてそのセリフを言った。

「ばいばい」

部長は物理倶楽部の扉を閉めると、隣の数学倶楽部へ入っていった。私とデカルトちゃんが後に続く。

「結局手紙の主はわからなかったな」。

でも今日は・・・僕たちに出来る事はここまでだね」

「そうね・・・」

「ただ、いくつか情報は得た。

ピタ子と同じぐらいの背で、角張ったアクセを持っている。

そして・・・」

「【】と【U】です」

「手がかりはいくつか得られたけど・・・謎が多いわ・・・」

「まあそれは各自持ちかえって、考えるって事で。

明日また、わかった事を報告しあおう。

ほら、下校のチャイムもなったし。今日の数学倶楽部はお開き！」

「デカちゃんも、謎に挑戦してくるです」

「あの・・・」

私は気になる事を、2人に聞いてみた。



「ドッペルゲンガーって・・・何？」

「え!？」

「はわ!？」

2人は同時に驚いた表情を浮かべる。え？ 何で？

「ピタ子、知らないの？」

「はわわ」 Pちゃんはドッペルゲンガーの事、知らないんですか？」

何よ・・・ 2人して・・・

「普通、知ってるものなの？ その・・・  
ドッペルゲンガーってヤツ・・・」

「有名なパラドックスの1つだよ。もう一人の自分の存在ってヤツ。  
同じ世界に・・・

見た目だけでなく、心も体も全く完全な同一人物がいるっていう」

「この世界に・・・ 全く同じ人がいる？」

「そうです」 自分と完全に同じ人物が」 その人のドッペルゲンガーです」

よくわからない。

「じゃあさ。その全く同じ人物とやらが、顔を合わせたらどうなるの？」

「おつとゝ・・・ ホントにピタ子、知らないんだね」

「だから、聞いているんじゃない・・・」

「はい！デカちゃんが教えてあげますゝ！！

自分のドッペルゲンガーを見た人はゝ・・・」

見た人は？

「ズバリ、死ぬと言われてますゝ！！」

「死ぬ！？」

「まあ、都市伝説の1つよ。

1人の人間は、この世に1つの命としてしか存在出来ない。

だから全く同一の人物が相対あいたいしたら・・・

どちらか、あるいは両方死んじやうってわけ」

「・・・」

未だによくわからないけど・・・

「自分のドッペルゲンガー・・・ 見ちゃいけないって事？」

「そうです」

「例えば僕のドッペルゲンガーがいたとして・・・  
僕はそいつをチラリと見て、『僕のドッペルゲンガー?』と思う  
けど・・・」

あちらも僕を見て、『僕のドッペルゲンガー?』・・・  
なんて思ってるかもね」

「うん・・・ そんな事、あるのかしら?」

「あくまでも都市伝説だからさ。  
量子力学では平行世界を考える場合もあって、そのブレーンを超  
えたら・・・」

まあいいや。今日はもう帰ろう。僕、お腹空いちゃった」

「デカちゃんも、お腹ぺっこぺこです」

ドッペルゲンガーはちょっと気になるけど・・・まあ、あくまでも  
都市伝説だしね。

「うん。じゃあ明日・・・」

こうしてこの日の数学倶楽部は・・・部長の集合論講義に始まり、  
手紙の主捜<sup>ぬし</sup>しで終わった。結局、犯人は見つけられなかったけどね。

学校を出た私は・・・

自宅とは違う方向へ足を運ぶ。

「・・・」

私はこう考えていた。

犯人は今朝早く学校に登校し、ルブラン君の靴箱にラブレターを入れた。そして今日の5時13分に、公園に来るようにと指示している。

ところが・・・そのラブレターは私が奪った。もちろんルブラン君が公園に現れる事はない。犯人の立場ならどう思うだろうか？

【ルブラン君にフラれちゃった】

これはマイナス思考。

【きっと何かの都合で、来られなかったのよ】

これがプラス思考。この世の思考も、プラスとマイナスがあるのは数学と同じ。

ただ・・・犯人は【私がラブレターを盗んだこと】を知って動いている。つまり【何かの都合】というのは、【私の邪魔】というわけだ。でなければ、あんな挑戦的なメッセージを私に残すはずがない。

1番最初の手紙から察するに・・・私同様、その子はルブラン君にベタ惚れのはず。ならば簡単に【諦める】という選択肢は存在しない。

い。

つまり・・・

「・・・」

午後6時30分。

私は・・・

ルブラン君の家の前にいた。予想が正しければ

「犯人は、ここに現れる・・・」

ピーポー　ピーポー　ピーポー　・・・

閑散とした住宅街の中、救急車の音が鳴り響く・・・

私は電柱の影に身を寄せ、その人物を待っていた。

（第10話へ続く）

## 第9話    ドッペルゲンガー？（後書き）

次回予告

ルブラン君の家の前で張り込みする私。何とそこで、サンジェルマン理事長と遭遇してしまう。

そして理事長は・・・私にある手紙を渡した。

次回 「    第10話    理事長と手紙と私 」

## 第10話 理事長と手紙と私（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に向かった私達。怪しい人物を追いかけたけど、逃げられてしまう。そしてその人物は、これ以上ルブラン君に関わらないでというメッセージを残していた。

私はメッセージを無視。ルブラン君の家に向かった。

~~~~~  
第10話 理事長と手紙と私  
~~~~~

第10話 理事長と手紙と私

ストーカーでも何でも、好きによぶがいい。私は惚れた相手に一直線。生年月日や血液型、住所だつて調べ上げる。

「さすがピタゴラス教団の教祖様」

誰！？

「・・・」

気のせいかな。

住所はすでに調べていた私。でも、実際彼の家の前まで来たのは今日が初めて。

「すごい・・・ お屋敷・・・」

お金持ちの子と聞いてはいたけど・・・私の目の前には、3階建ての大きな洋館が建っている。数学的に言うと、50m×50m×15mの直方体がスッポリ入るといった感じかしら。

屋敷に入るためには、大きな正門を通らなければいけない。門には誰も立っていないけど、何かしらのセキュリティはあると思う。

目的はあのラブレターの主を見つける事だけ・・・

「ルブラン君・・・ 姿、見せないかな？」

いつしか私の視線は、犯人ではなく愛しの人を探そうとしていた。

・・・。。。

待つこと30分。7時ちょうど。

「ピタゴラス君！」

電柱の影に隠れていた私に、透き通るようなテノール声がかけられた。

「ロ・・・サンジェルマン理事長!？」

思わずロリコンと言おうとしたのは秘密。

「こんなところで・・・君は何を？」

視線は鋭いが、声は優しい。

「あ、えーっと・・・その・・・」

理事長はチラリとお屋敷の方に視線を合わせた。そして再び私を見る。

「ルブランに・・・会いに来たのか？」

「え!？ あ、いえ・・・」

いきなりど真ん中にストライクを投げ込まれた私。しどろもどろに

応える。

「・・・・・・・・」

理事長は無言で、スーツの胸ポケットに手をつっ込んだ。そして・

「ついさっき、ある女の子に会ってね。

これをピタゴラス君に渡してくれと・・・」

「え？」

私に手紙を差し出す。

【ピタゴラスに告ぐ】

「!？」

ゴクリと唾を飲み込んだ。

「ま、まさか・・・」

「・・・・・・・・」

理事長が私の表情を伺っているけど、気づかない。震える手で、私はその手紙を受け取った。

「だ、誰が!？」

封を切る前、思わず理事長に大声で聞いてしまう。

「ブカブカの帽子に、黒いコートの子だったが・・・顔を隠すようにしていたし、誰なのかはわからなかった」

公園で見たあの子だ！

「私が近くを通りかかったら、突然現れてね。

【これを、あの家の前の電柱にいるピタゴラスちゃんへ渡して下さい】

そう言って手紙を渡すと、すぐに走り去ったよ」

「・・・」

起こりえない事が起きている。

デカルトちゃんと部長と別れた後・・・私は自分の意志でここに来た。その私を先回りした！？

「ありえない・・・」

「手紙を・・・見ないのか？」

理事長が手紙を見るように促す。

「・・・」

理事長に背を向けた私は、すぐに中に入っていた1枚の便せんを取り出した。

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！ ルブラン君、死んじやうわよ！】

またしても1行。だけど・・・

「・・・・・・・・」

背中に事長の視線が突き刺さる。

「な・・・何が・・・」

何が起こってるの！？ 私の頭は混乱の極みだ。

もし・・・

もし、この手紙の内容が真実なら？ 出所は未だに不明だが、この手紙の主は私の行動を知っている。そして今度はルブラン君が死ぬとまで言ってきた。

出任せ？ それとも、まさか・・・ホントにルブラン君は、死んじやいそうなの？

心拍数が上がっているのが自分でもわかる。

「り、理事長。さよなら！ また明日、学校で！！」

とっても嫌な予感がした私は、大通りに出てタクシーを止めた。

「市立病院まで！！」

運転手にそう告げると、祈るように窓の外を見上げる。

「この手紙が、デタラメであることを証明しなければ・・・」

安心できない。私の視界の隅・・・サンジェルマン理事長が、ルブラン君のお屋敷に入っていく姿が映る。

「・・・」

でも、ルブラン君の安否を気にしていた私は・・・それに気づくことはなかった。

（第11話へ続く）

第10話 理事長と手紙と私（後書き）

次回予告

あまりにも突然の出来事だった。

ルブラン君は・・・

交通事故に遭って・・・

次回 「第11話 ルブラン君の死」

第11話 ルブラン君の死（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

犯人の現れる可能性が強いポール公園に向かった私達。怪しい人物を見かけたけど、逃げられてしまう。そしてその人物は、これ以上ルブラン君に関わらないでというメッセージを残していた。

メッセージを無視した私は、ルブラン君の家に向かう。そこで理事長と出会い、手紙を渡された。その手紙には・・・

~~~~~  
第11話 ルブラン君の死
~~~~~

## 第11話      ルブラン君の死

私が謎の手紙を受け取った翌日。

3月15日。

聖フィロソフィー学園の全校生徒が体育館に集められた。

そしてサンジェルマン理事長の口から・・・

【近代組】に所属するルブラン君・・・彼の【死】が報告された。

自宅近くでの交通事故。ほぼ即死状態だったという。

体育館の至る所から、すすり鳴く声が聞こえてくる。

「・・・・・・・・」

涙を流すことはない私。昨夜、病院で彼の死に顔を見た時・・・涙  
枯れるまで泣きはらしたからだ。

「・・・・・・・・」

ルブラン君の死に直面してから、今に至るまで

「・・・・・・・・」

私の記憶はない。何がどうなってるか、その判断能力もない。



好きな人を失った・・・それが事実なのだろうけど、その意味すらわからない。哀しみだとか愛だとか、生きるだとか死ぬだとか・・・

今の私は何も解らない。

「・・・」

真つ赤な目を理事長に向け・・・

私は抜け殻のように、呆然と立っていた。

・・・。

放課後、数学倶楽部。

「私のせいよ!!」

私はデカルトちゃんと、部長を前に・・・自分を責めていた。

「ホントは・・・ホントは私・・・

ルブラン君の靴箱から、あのラブレターを盗んだの!!」

正直に話す。

「私が盗まなければ・・・

ルブラン君は公園に行っていた。交通事故にも遭わなかった!!」

テーブルに突っ伏し、大声でわめいた。

「・・・ はわわ・・・」

デカルトちゃんは、どんな言葉をかけたらいいかわからない様子で・

「・・・」

部長は、無表情で私を見ている。

やがて部長は・・・わめく私をよそに、眉間にしわをよせた。

「・・・」

何かが腑<sup>ふ</sup>に落ちないといった様子だ。数分後、ようやく部長が口を開く。

「ねえ、ピタ子さあ。昨日、病院行つたんだって？  
ルブラン君が運ばれた病院に・・・？」

「それが何よ！！」

逆ギレ気味で返事する。

「どうしてピタ子・・・ルブラン君が病院に運ばれた事、知ってたの？」

僕たちは誰一人、彼が事故に遭った事を知らなかった。

今朝の全校集会までね」

「・・・」

沈黙を保つ私。

「・・・」

しばらくして私は、ポケットからあの手紙を取り出した。理事長から譲り受けたその手紙を、テーブルの上に広げて置く。

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！ ルブラン君、死んじゃうわよ！】

「これ・・・」

「え！？ また、手紙もらったの？ 誰から！？」

「はわわ・・・」

「みんなと別れた後、理事長と偶然会って・・・  
この手紙を渡された・・・」

「理事長から！？」

まさかコレ、理事長が書いたわけじゃないでしょ！？」

そりゃそうだ。直接会ってるんだから、手紙経由で会話するわけがない。

「誰からの手紙！？」

「ブカブカ帽子で黒コートの子から・・・  
私に渡すように手紙を預かったって。」

多分、公園で私が見たのと同じ子だと思う・・・。」

「はわわゝ　それでPちゃん、病院にいたんですね。」

「どこで！？　どこでそれ、もらったの！？　学校？」

私は首を横に振る。

「ルブラン君の・・・家の前。あの手紙の主を捜したくて・・・。」

ここまで来たら、とことん正直に話すわ。

「そこで理事長と会った？」

「うん・・・。」

「・・・。」

ちよつと悩んだ表情を浮かべた部長は

「なるほど。偶然にしては出来すぎな気もするけど・・・。」

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！　ルブラン君、死んじゃうわよ！】

「・・・。」

じつとその文面を凝視する。

「あのさ……」

「？」

不意に部長は私の手を握ってきた。

「……」

ゆっくりと顔をあげる私。デカルトちゃんも、部長に視線を合わせる。

「僕、思っただけど……」

部長は、衝撃的な事を口にした。

「ルブラン君…… 殺されたんじゃないかな？」

「え！？」

「ええ！？」

（第12話へ続く）

## 第11話 ルブラン君の死（後書き）

~~~~~

次回予告

部長は昨日の出来事を紙に書き始めた。

そして理事長から貰った手紙の裏に書かれた【from】を見て・・・

手紙の主を特定する。その人物は、1日前に私達が遭遇した人物の中に・・・

次回 「第12話 部長の予言」
~~~~~

## 第12話 部長の予言（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

## 第12話 部長の予言

## 第12話 部長の予言

「はわわわ・・・」

「ル、ルブラン君が・・・殺された!？」

部長の言葉で、一気に現実に戻った。

「ちょっと・・・声、おさえてよ・・・」

「はわわわ・・・」

「どうして!？ 何でそう思うの!？ 誰かが車でひき殺したっての!？」

矢継ぎ早に質問する私。

「まあまあ。落ち着いて。順を追って説明するから」

冷静な部長は、テーブルの上に紙と鉛筆を用意した。

「情報をまとめる。そこから導き出される可能性を全て考慮し・・・

論理的な推論の元で・・・」

言いながら、紙の上に何かを書き出していく。

3月14日

AM 7:00 ピタ子。



靴箱からラブレターを盗む。カントちゃんとニアミス。

P M 3 : 1 0 頃 ピタ子、僕、デカ子。

部室で【集合論講義】。ルブラン君宛のラブレターを見せられ、差出人を捜す事に。

P M 3 : 3 0 頃

デカ子の発案で、公園に行くことを決定。

P M 3 : 4 0 頃

ソーカルちゃんと遭遇。

・・・

「昨日の事・・・まとめてるのよね？」

「そう」

P M 5 : 1 1

デカ子がおしっこ。証人、僕。

「はわわ・・・」

デカちゃんがおしっこしてた時の事も、書き込むんですか？」

「もちろん。デカ子がシロだっという根拠になるし」

P M 7 : 0 0 頃

ピタ子、理事長から手紙を渡される。

【ピタゴラスに告ぐ】

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！ ルブラン君、死んじゃうわよ！】

P M 7 : 4 0 頃

ピタ子、病院でルブラン君が死んだ事を知る。

「よし。完成！」

私達は、部長が書いたそれに目を通す。

「まずコレよね」

P M 5 : 1 2

ピタ子がコート姿の子を見た。しかし逃げられる。  
ブカブカ帽子、黒コート。三角形のアクセ。

P M 5 : 1 4 頃

ベンチの上にあつた手紙を確認。

【ピタゴラスに告ぐ】 【f r o m U】

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ！】

「内容から察するに、手紙の主はピタ子が手紙を盗んだことを知っていた」

「まあ、そう考えるのが妥当よね。

でもどこで・・・ 私がラブレター盗んだのを知ったのかしら？」

「僕とデカ子が、ルブラン君に宛てられたラブレターを見たのは・  
」

P M 3 : 1 0 頃 ピタ子、僕、デカ子。

部室で【集合論講義】。ルブラン君宛のラブレターを見せられ、差出人を捜す事に。

「3時過ぎ。

この時から【from U】の手紙に遭遇するまで・・・

僕たち3人、ずっと一緒に行動していた。

つまり僕とデカ子は、この手紙を書くだけの時間はなかった」

「最初から・・・部長とデカルトちゃんは、疑ってないわよ」

「デカちゃん的には、やっぱりカントちゃんじゃないですか？」  
朝一で、Pちゃんとニアミスしてるし」

「あの角度では・・・絶対私、見られてないと思う」

「カントちゃんの事は頭に入れておく。大事なのはこの先・・・コレよ」

P M 6 : 4 0 頃

ピタ子、ルブラン君の家の前に現れる。

PM7:00頃

ピタ子、理事長から手紙を渡される。

【ピタゴラスに告ぐ】

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！ ルブラン君、死んじゃうわよ！】

「病院へ行けと警告した人物なだけどさ。逆算すると・・・

ルブラン君が車にひかれた直後、この手紙を書いている事になるわ」

「はわわ・・・ ルブラン君が車にひかれたのに、  
こんな手紙を書くって・・・

そんな神経の持ち主、いるんですか？」

「ヘタしたら・・・

ルブラン君が車にひかれる前に、手紙を書いた可能性もある」

「え！？ そ、そんな事・・・あり得るの！？」

「まあ、可能性としてはあるっただけで。

やっぱルブラン君が事故に遭った直後に、書いたと思う方が自然かな。

どちらにせよ・・・」

どちらにせよ？

「この手紙の主がルブラン君を殺したと思えば・・・スジが通るんじゃない？」

「ええ！？」

「はわわ・・・」

「僕の仮説はこう。

ストーカー並にルブラン君を愛するがあまり・・・

抱きついたか、何かの拍子で彼を道路に押し出した。  
そして彼は車にひかれてしまった」

「・・・」

「突発的な事故ですか？」

「うん。その子は自分のラブレターが、ピタ子に盗まれた事を知っている。

いわばルブラン君をめぐって、恋敵と思ってるわけだから・・・

死ぬかも知れないルブラン君に・・・  
最後、ピタ子を会わせてやろうとした」

「だから・・・ あんな手紙を書いた？」

「そんなところね」

かなり無理のある話のように思える。

「苦しい仮説なのはわかってる。ただ1つ。どうみても、この手紙の主は・・・」

ルブラン君の【死】に関わっている。それだけは間違いないと思う」

ルブラン君が車にひかれた直後に手紙を書いているのだから・・・

「デカちゃんも」 部長の話聞いてたら、そんな感じがします」

「うん。私も・・・」

確かにそんな気がしてきた。でも・・・

「いったい誰が？ ルブラン君の死に関わってる人物なんて」

「はわわ、誰なんでしょう？」

「そう言えば・・・」

部長が何かを思い出す。

「ほら、理事長からもらった手紙」

「ん？ 何？」

「【from】【とか】【from U】とか、書いてなかった？」

「ああ・・・」

昨日は混乱してたから、手紙の裏を確認するのを忘れてた。

「書いてる。ほら、コレ・・・」

「僕の予想じゃ、集合論の記号とみた。  
補集合を表す【C】か、あるいは・・・」

【f r o m】

「あれ？」

部長の予想はハズれた。

「これは、シートです」

図形の角度を表すのに、よく使われる記号だ。

「あれ？ 絶対集合論がらみだと思ったのに。  
インターセクション、ユニオンときて、次がシート？」

「部長が思ってるほど、この記号・・・  
意味なんて、ないんじゃない？」

私は素直に思った。

【】【C】【】

「そうね。こりゃ、意味なんてなさそ・・・」

突然部長の眉がつり上がる。

「・・・・・・」

【】【】【】

じつと3つの記号を見つめながら・・・

「まさか・・・」

首を横に振った。

「部長？」

「どうしました？」

「・・・・・・」

部長の視線は、3つの記号を見つめたままだ。

「部長？ 何かわかったの？」

「い、いや。まさか・・・ね・・・」

「はわわゝ 何か解ったら、デカちゃん達にも教えて欲しいです」

「そうよ。部長・・・」



「・・・」

眉をつり上げたままの部長。

「ピタ子。最初の手紙、持ってるわよね？」

【from】のヤツ

「うん」

「見せて」

私はポケットに入れっぱなしだったその手紙を、部長に渡す。

「・・・」

部長は便せんを取り出し、それを凝視した。

「5・・・13・・・」

「？」

「もしも・・・」

部長は手紙を見つめながら

「もしも次、こんな手紙が来てさ。それが・・・」

「それが？」

「アルファからの手紙だったら・・・」

「（アルファ）？」

【（アルファ）】・・・【】に次いで、角度を表すのによく用いられる記号だ。

「アルファだったら、どうなるんですか？」

「手紙の主が確定する。確率的にも、ほぼ間違いなく・・・」

「だ、誰よ、それ!？」

私は、その手紙の主・・・犯人の正体を問い詰める。

「今は言えない。だって・・・」

いつもの部長とは違う。魂が抜けかけたような感じだ。

「だって、ありがたい事だから・・・」

「はわわゝ 教えて欲しいです」

部長は首を横に振った。

「これは冗談抜きで、パラドックス・・・」

この部長の反応。

「・・・」

もしかして・・・

「私達が知ってる人？」

ピンと来た私。

「うん」

部長はそれを認める。

「誰！？」

「言えない。それを口にすることは・・・  
哲学者にとって、大きな覚悟がある・・・」

「はわわゝ　こんな真剣な部長、初めて見ますゝ」

「・・・」

知りたい。でも部長にも部長の哲学がある。簡単に人の哲学を否定してはいけない。いけないけど・・・

「じゃ、じゃあ・・・」

昨日1日、私達が会った人物の中にその人はいる？

それだけでいいから、教えて！」

「・・・」

逡巡の後、部長は・・・

「いる・・・」

私と目を合わせず、そう言った。

部長の予言したアルファからの手紙。

今から3分後・・・

その手紙を手にするなんて、夢にも思わない私達だった。

(第13話へ続く)

## 第12話 部長の予言（後書き）

次回予告

部室を出た私は、ソーカルちゃんとぶつかった。

いつもとは、何かが違うソーカルちゃん。そんな彼女から・・・

私は【from】の手紙を受け取った。

次回 「第13話 違和感」

### 第13話 違和感（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

ラッセルちゃんはルブラン君が誰かに殺されたという。そしてもし【】からの手紙が来たら、犯人は私達の知っている誰かだと言いつ切った。

### 第13話 違和感

### 第13話 違和感

キーン コーン カーン・・・

校内放送だ。

「【古代組】のピタゴラス君。至急、理事長室へお越し下さい。  
繰り返します。【古代組】のピタゴラス君。至急、理事長室へ・・・」

「はわ？ Pちゃんの呼び出しです」

「な、何だろう？」

私はイスから立ち上がった。

「僕も行く」

部長も続いて立ち上がる。

「え？ 呼び出されたの、私だけよ？」

部長は首を横に振った。

「わかってる。でも僕も行く。いや、行った方がいい」

エロセクハラキャラなのに・・・今はそんなそぶりが微塵もない。

「じゃあ、デカちゃんも行きます」

この展開を読んでいた私は

「お好きなように」

と告げ、真っ先に部室を出た。

ボタン！！

「あ．．．」

部室を出た私は、出会い頭に誰かとぶつかる。

あれ？ つい最近もこんな事があったような？

その場で倒れてしまった私。

「いてて．．．」

お尻をさすりながら前を向くと、色々な数式や化学記号がプリントされている洋服が目に入る。

「ソーカルちゃん！」

昨日と全く同じシチュエーション。違うといえば、ぶつかった子の名前を私が知っている事ぐらいだ。

「．．．．．」

私と視線を合わせたソーカルちゃんは



「今ね。今・・・」

LHCで、光より速いニュートリノの観測に成功したって！

わかる？　どんなにすごい事が起こったか？」

顔を近づけ、嬉しそうに語ってきた。

「アインシュタインちゃんの相対性理論が崩れるのよ！  
タイムマシンが作れるの！！」

「はいはい。わかった、わかった・・・」

昨日同様、私の次に部室を出てきた部長が

「天動説が地動説に変わった時と同じぐらい・・・  
哲学に大きな波が押し寄せるわ！！」

やはり昨日と同じように、ソーカルちゃんの中を押していく。

「ほら。【物理倶楽部】は、隣だから・・・」

「あと1つ！　あと1つ、数式を解ければ・・・  
タイムマシンが・・・」

「そうね。光より速い物質があれば・・・  
タイムマシン、作れるわよね」

そして隣の【物理倶楽部】へ押し込み、扉を閉めた。

「さ、行こ。理事長室」

邪魔者を力タした部長が、笑顔を見せる。

「うん。でも・・・」

逆にモヤッとした表情を浮かべる私。

「どした？」

部長が私の顔を覗き込む。

「うん。なんかあの子・・・今日、変じゃない？」

「どこがです？」 昨日もあんな感じでしたよ？」

部室から出てきたデカルトちゃん。

「いや、ほら。」

昨日は意味不明な事、しっちゃんかめっちゃんか言ってたのに・・・

今日は、話のスジが通っていたような・・・？」

そう。少なくとも私には・・・昨日のソーカルちゃんと、別人に思えた。

「まあ、あの日ってヤツじゃない？ さ、行こ」

「うん・・・」

ボタン！！

「ちょっと待って！！」

物理倶楽部の扉が勢いよく開いたかと思うと、ソーカルちゃんが再び出てきた。

「・・・」

違和感を感じる私。再び顔を出す事なんて、昨日はなかったのに。彼女は私に詰め寄ってくる。

「な、何か？」

「コレ！ あなたにつて！！」

そして一枚の手紙を差し出した。

「10分前に、預かったの！」

ソーカルちゃんが差し出した手紙には

【ピタゴラスに告ぐ】

そう書かれている。

「！？」

「・・・」

「はわわ・・・」

震える手で、私は手紙を受け取った。

「だ、誰？ 誰からこの手紙を！？」

すぐにソーカルちゃんに詰め寄る。

「さあ？」

いつものマシンガントークはどこへやら。彼女はニヤニヤしながら・・・そのまま物理倶楽部の部室に戻り、自ら扉を閉めた。

「ちょ・・・ 待つて！ いったい誰がこれを！？」

物理倶楽部の扉を開けようとした私の肩に、部長がポンと手を置く。

「ピタ子。裏、見てみなよ」

「・・・」

言われた通り私は、手紙の裏側を上に向けた。

「はわわ・・・」

そこには・・・

【 from 】

部長が予言した【 】が書かれていた。

「な・・・」

呆然とする私と

「はわわ・・・」

デカルトちゃん。そして・・・

「・・・」

部長は

「でも、これで・・・手紙の主は確定した・・・」

私の横で寂しそうに呟いた。

（第14話へ続く）

第13話 違和感（後書き）

次回予告

私はとうとう・・・

部長の口から、手紙の主の名前を知る事になる。

次回 「 第14話 犯人の正体 」

## 第14話 犯人の正体（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

ラッセルちゃんはルブラン君が誰かに殺されたという。そしてもし【】からの手紙が来たら、犯人は私達の知っている人物だと言います。

私はソーカルちゃんから、【from】の手紙を受け取った。

## 第14話 犯人の正体

## 第14話 犯人の正体

「誰！？ 誰なのよ！？」

私は部長に詰め寄る。

「その前に・・・ 手紙の中は？」

「何で！？ 手紙の主が確定したんでしょ！？ すぐ教えてよ！！」

「僕自身、その子が手紙の主とは思えないんだ。  
だからまず・・・ 手紙の中を見たい」

「だ・・・」

言葉をのみ込む私。

「・・・」

ここで言い争っても仕方がない。深呼吸をした私は手紙の封を開け、中を取り出す。毎度のように便せんが1枚入っていた。

【3人で理事長室へ】

「・・・」

「はわわ」



「パラドックスのオンパレードね・・・」

ソーカルちゃんの証言では、この手紙が渡されたのは10分前。しかし私が理事長室へ呼び出されてから、まだ5分と経っていない。

「ど、どういう事？ 何で？ まるで、未来から送られた手紙みたい・・・」

「デカちゃんわかりました〜！  
理事長があらかじめこれを書いて〜」

ソーカルちゃんに渡したと思います〜」

さすがデカルトちゃん。1番納得いく答えだわ。でも・・・

「そんな手の込んだ事・・・あの理事長がやるかしら？」

その時の私はそう思っていた。

「デカ子、ピタ子。理事長室、行くわよ。そこに答えがある・・・」

部長は犯人の名を明かさず、私達の先頭に立って理事長室へ向かう。

「・・・・・・」

その後ろを私、最後尾をデカルトちゃんが続いた。

・・・。

理事長室の前まで来た私達。スーツ姿の見慣れぬ2人の男が

「それでは、また明日」

そう言って、理事長室から出てくるのを見た。一礼した男達は、向こう側へ歩き出す。

「もし、RDNDの話が本当なら・・・  
医療の現場に革命が起こせるな・・・」

RDND？

「ああ。特許を取れば、間違いなく・・・  
数兆円の利益を得られるというのに・・・」

す、数兆円！？

怪しげな会話をしながら、男達は視界から消えていく。何だろう？  
理事長お得意の【錬金術】がらみかしら？

「・・・」

理事長室の前に立った私は

トントン。

「失礼します」

ノックをした後、理事長室へ入っていく。

「失礼しますです」

「失礼しまつす」

デカルトちゃんと部長も私に続いた。

理事長室に入るのは初めて。20畳ぐらいだろうか。広い部屋の周りをぐるりと囲むように、ガラスケースがある。そのガラスケースの中には・・・地図とか人形とか、色んなオブジェのような物が見えた。

「ああ。ちよつと待ってくれ」

サンジェルマン理事長は何枚かの書類を抱えて、奥のデスクに向かっていた。

「・・・」

その書類の文字が目に入る。

【RDND】？ 【仮死】？ 【硫化水素】？

何だろう？ さっき出て行った人たちが言ってたヤツかな？

「3人できたか・・・」

書類をデスクの引き出しにしまいながら、理事長が呟いた。

「あ、あの・・・ 呼び出されたので・・・」

「わかっている。後ろの2人も入りなさい。そのソファに座りたまえ」

部屋の中央にある、大きな大理石のテーブル。その前にある横長のソファに私達は座った。

「ふつかふかです」

嬉しそうなデカルトちゃんとは対照的に、私と部長は緊張気味。

「さて・・・」

理事長は、向かいのソファに座ると・・・

「呼び出した理由はこれだ・・・」

【ピタゴラスに告ぐ】

1枚の手紙を、表にして差し出した。

「・・・・・・」

驚いたのは一瞬。さすがにもう慣れてしまった。それに・・・

「なるほど・・・」

横で頷いている部長は、手紙の主を知っている。

「君達に聞こう。この裏に、何が書かれているかな？」

「・・・」

これが呼び出した理由なの？

「・・・」

私とデカルトちゃんは、同時に部長の方を見る。部長は、理事長に視線を合わせて

「フロムガンマ」

と言った。ふろむがんま？

「ふふ。さすがは本校数学倶楽部の部長・・・」

嬉しそうな表情を浮かべた理事長は、手紙を裏返す。そして私達の目の前に・・・

【from】

手紙の裏に書かれた、それが映った。いつけん英語の【<sup>アール</sup>r】に見えるが、これはギリシア語の【（ガンマ）】だ。

「はわわ・・・」

「・・・」

私の脳裏にデカルトちゃんの言った事が浮かぶ。手紙の主はやっぱり

り・・・理事長では？

そういえば昨晚、ルブラン君の家の前にも理事長はいた。何故あの時間、あの場所に理事長がいたのか？

それに私達が公園に行く前にも、理事長に会っている。そして今日・

理事長は私達を校内放送で呼び出す前、あの手紙をソーカルちゃんに渡した。デカルトちゃんの仮説を認めれば、全てつじつまが合う。

でも、理事長がこんな手の込んだ事を？

「・・・」

とはいえ【理事長が犯人】である事以外、この事態をうまく説明する事が出来ない。

「あの・・・その手紙、いったいどういっつもりで？」

あなたが書いたんですか？

「ピタゴラス君。この手紙が、誰によって書かれたのか・・・？君はまだ、わかってないようだ」

わかってるけど・・・手紙の主があなたよ！だなんて、目上の人には言いづらい。

「はい！」

重い空気が流れる直前、デカルトちゃんが手を挙げた。

「デカちゃんの推理によれば、この手紙の主は」

立ち上がったデカルトちゃんは、目の前の理事長に指さすと・・・

「サンジェルマン理事長！ズバリ、あなたですー！！」

ドヤ顔で言つてのけた。えらい！よくぞ言ってくれた！天然キ  
ヤラのみが許される無礼講だ。

「・・・」

「・・・」

しばし静寂の時間が流れる。

「ブー！デカ子、大ハズレ！」

静寂をうち破つたのは部長だけど・・・え？違うの？

「デカ子が・・・」

1番最初に、犯人を言い当てていたんだけどな、残念！」

え？

「では、ラッセル君。この手紙の主は・・・誰かな？」

そうだ・・・

何故、部長は【 】からの手紙だと知っていた？ 謎はまだ残っている・・・

「ええ、僕にはわかりません。この手紙の主は・・・」

部長は私をじっと見つめた。

「？」

キョトンとする私を指さした部長は・・・

「ピタ子です」

こともあるうちに、私を犯人だと言った。

（第15話へ続く）



## 第14話 犯人の正体（後書き）

次回予告

部長は私が犯人である事を証明すると言い出した。

【】【u】【】【】【】【】

この5つの文字・・・

そして私が犯人である決定的な証拠を・・・

次回 「第15話 証明」

## 第15話 証 明（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

校内放送で呼ばれた私は、ラッセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は・・・手紙の主は私だと言った。

## 第15話 証 明

## 第15話 証明

「ちょ．．．」

「根拠は？」

私の反論より先に、理事長は部長へ質問する。

「まず最初にピタ子が手にした手紙に【f r o m】とありました。

・ 僕は最初、【】をインターセクションだと思っていましたが・

後に、これはギリシア語の【（パイ）】を表していると確信しました。

英語で言つと【P】」

「ふむ．．．」

「次にピタ子が手にした手紙。ポール公園で見つけた【f r o m U】。

こちらは英語の【U<sup>ユ</sup>】か、集合論のユニオンかと思いましたが・

ギリシア語の小文字【U<sup>ウ</sup>】です。英語で言つと【y】」

「ちょっと待ってくれ」

理事長がストップをかけた。

「お二方にもわかるよう・・・」

お二方？ どうやら、私とデカルトちゃんらしい。

「これに書くといい」

そういつと理事長は、自分のデスクから紙と鉛筆を取り出し、部長の前に置いた。

【】 【U】  
【P】 【y】

部長はギリシア語と英語の両方を書いて見せる。

「3枚目はルブラン君の家の前で、ピタ子が理事長から渡された手紙。」

【 f r o m 】。 【】 (シート) 【の英語での対応は【t h】「

発音記号でお馴染みの記号だ。

【】 【U】 【】  
【P】 【y】 【t h】

ん？ なんか見覚えが・・・

「4枚目はここへ来る前、ソーカルちゃんからもらった【f r o m】。」

【 (アルファ) 】はもちろん・・・」

英語の【a】。

【 P 【 y 【 t h 【 a  
【 U 【 【 【 【

え？ え？ まさかこれって・・・

「そして今、目の前にある【f r o m 【。

【 (ガンマ) 【は英語で、【g 【にあたります」

【 P 【 y 【 t h 【 a 【 g  
【 U 【 【 【 【

「はわわ・・・」

「もし、次の手紙があるなら・・・」

「待つて・・・」

私は部長の手を止め・・・

「 【 (オミクロン) 【、 【 (ロー) 【、 【 (アルファ) 【、  
【 (ゼータ) 【・・・」

次に来るであろう、ギリシア文字を書いて見せた。

「い名答・・・」

部長の寂しい返事が返ってくる。英語対応は【o】【r】【a】【s】だ。

【】【U】【】【】【】【y】【th】【a】【g】【o】【r】【a】【s】【s】

その場にいた4人全てが・・・

私の名前【Pythagoras】ピタゴラスを凝視している。

「な、何でギリシア語？」

「ピタ子、ギリシア出身じゃん。サモス島から来たんでしょ？」

そうだ・・・けど・・・

聖フィロソフィー学園は世界各国から生徒を募っている、いわば多国籍軍。学園内の公用語は日本語と英語。

「母国語なんて、久しぶりに見た・・・」

でも、待つて。

「私、こんな手紙、書いた事ないわよ？」

「いや。ピタ子を書いたんだ、間違いない」

「だからこんな手紙、書いてないってば・・・  
本人がそう言ってるんだから・・・」

「証明して見せようか？」

部長は自信満々で私の顔を覗き込む。

「是非とも証明して貰おうかしら」

私も自信満々で言い返す。犯人は勝手に人様の名前を使って、私を陥れようとしているに違いない。

「じゃあ、もしさ・・・」

「？」

「もし、僕が正しかったらさー ピタ子のブラ、ちょうだい」

「こらこら。理事長の前で、なんつー・・・」

「いいわよー!」

でもまあ、私が犯人のワケないし。その賭けにのることにした。

「じゃあ、部長が間違ってた場合は？ 部長は私に何かしてくれるの？」

「ピタ子のブラ、2度とハズさない」

んー・・・ なんか私に得があるように思えない気もするけど・・・

「のった!」

私は部長に右手を差しだし

「It's a deal!」 （決まりね!）

お互い、しっかりと握手した。

これから先、ブラパラごっこに巻き込まれる事は無い。前向きにこの交渉をとらえよう。

「で？ どうやって私が手紙の主だと?」

余裕の私に、部長はニヤリと笑った。

「ピタ子のリュック、持ってきて」

「え？ 私のリュック?」

「そ

「何で?」

「証拠がそこに入ってるから」

「・・・・・・」

全く部長の意図が見えない。見えないけど・・・

「わかった。その証拠とやら、私も納得できるんでしょうね?」

それで白黒つくのなら・・・



「もちのロンよ！」

「・・・・・・・・」

しばらく部長の顔を見た後、理事長の方に視線を移す。

「ラッセル君の言う通りに」

どうやら理事長も、それを望んでいるらしい。

「では・・・・・・・・」

私はソファから立ち上がると・・・

「失礼します」

一礼して、理事長室を出て行った。そして自分のクラス【古代組】へ向かう。ロッカーからリュックを取り出し、それを背負うと再び理事長室へ向かった。

・・・・・・・・。

「これがかの有名なピリレイスの地図だ。  
1513年に描かれたと言われている」

「はわわ　あの時代に、こんな地図を描けるなんて」

「理事長、この金色のロケットは？　僕、こういうカッコいいの欲

しい」

「それはコロンビアで発見された、黄金のシャトルだ。年代測定の結果、今から1000年以上前のものだそうだ」

「1000年!？」

「1000年も前に、こんなスペースシャトルみたいなものが?」

「ああ。不思議だろ? 飛行機なんてもちろん無い時代の代物。こちらに来てごらん。メキシコで発見された恐竜土偶がある。

これは、人類と恐竜が共存していたことを示唆する……」

カチャリ

「失礼します。戻りました……」

私が理事長室に戻ると……デカルトちゃんと部長は目を輝かせて、室内にあるガラスケースの中身を覗いていた。

「ああ、ピタゴラス君。戻ってきたね。では……」

再び私達は、大理石のテーブルを取り囲んだソファに座る。

「ほら、部長。リュック、持ってきたわよ」

テーブルの上にリュックを置くと……

「ちょっと失礼……」

部長がリュックを手にした。

「・・・・・・・・」

黙って様子を見守っていると・・・

「だいたいピタ子。大事なのは、この奥のポケットに入れるんだよね」

「こないだは、そこに替えのパンティ入れてたし」

「ちょ・・・・・・・・」

理事長の前で何を・・・ いや、それ以前に勝手に私のリュックを・・・

あれ？ そういや先週、替えのパンティ入れた時・・・ 無くなってたけどまさか・・・・・・・・？

「ちよつと部長！ まさか私のパン・・・」

「あつた!!」

問い詰める前に、部長が声をあげた。その手には手紙が握られている。

「・・・・・・・・」

表に【ルブラン君へ】と書かれていた。これは・・・

「はわわ」。これは、Pちゃんが最初にデカちゃん達に見せた手紙

です」

部長はそれを裏返す。

「はわ？ 【from】が無いです」

これは私がルブラン君のために書いたラブレターで、最初からルブラン君の靴箱に入っていたものではない。裏に何も書かれていない事が、それを証明している。

「ちょ、ちょっと。それはダメ・・・」

すぐに部長の手から手紙を奪い取った。

「それが証拠だよ、ピタ子」

え？ これが証拠？

じつとその手紙をしてみる。

「裏には【from】とか、書かれてないのに？」

一連の手紙には、必ず【from】と書かれてあった。

「中、見れば一発だから」

「中？」

そう言えば私、どんな事書いたんだっけ？

「はわわ　早く中、見せて欲しいです」

デカルトちゃんにせかされ、私は中身を取り出した。便せんが1枚だけが入っている。その内容は・・・

~~~~~  
愛しのルブラン君へ

毎日学園の窓から、あなたを見つめています。
もつとあなたの・・・近傍きんぽうに入りたい。

私の心はあなたに収束中・・・
限りなく近付いていきます。

メールアドレスを教えてください・・・
毎日メーラー展開します

今日の放課後、校庭裏のポール公園にいます。
トイレ近くのベンチまで、来て下さい。

時間は5時13分でどうでしょう？
私、1分前にはいておきますから。

それじゃ、放課後・・・
お会いできる事を信じて、お待ちしております。

P.S.
あなたにとって、私が十分である必要はないけれど・・・
あなたにとって必要になれば、私は十分です。

信じられない表情を浮かべる私がいたのは、言うまでもない。

(第16話へ続く)

第15話 証明（後書き）

次回予告

パニックになる私。

そんな私達に、理事長は数学の問題を出してきた。

それを解く事が出来れば・・・全ての謎が明らかになるといつ。

次回 「第16話 合同数」

第16話 合同数（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

校内放送で呼ばれた私は、ラッセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は・・・手紙の主は私である事を証明した。

第16話 合同数

第16話 合同数

「は・・・はわわ」

「な、何コレ？ あの手紙と、一緒じゃない・・・」

「ね？」

部長が勝ち誇ったような笑顔を浮かべている。

私はポケットに入れていた【from】のラブレターを取り出す。中の便せんを取り出し、今一度それを見ると・・・全く同じ事が書かれていた。

「な・・・何で!？」

「はわわ　同じ手紙が2通です」

「どちらもピタ子を書いた手紙って事さ」

嘘よ！　ありえない！！

「・・・」

2通の手紙を見比べる同じ。いつけん同じに見えるが、唯一違う点がある。

「う、裏に・・・【from】ってないわよ？」

「でも一字一句違わず、手紙の内容は同じ・・・でしょ？」

確かにそうだ。驚くべき事に、筆跡も全く同じ。

私のラブレターと【 】からのラブレター・・・ 違うはずなのに
中身が一緒って？

頭の中がさらに混乱する。

「嘘よ！ 絶対、嘘！ 何か・・・ 亡霊の陰謀よ！..」

「はわわ・・・」

デカルトちゃんのセリフをとってしまった私。それほどパニックの
極みだ。

「今思うと、ピタ子らしい手紙だわ」

「嘘・・・ 何で？」

「ピタ子の好きな数字が書かれてあるの・・・ わかる？」

「数字？」

「この手紙の中に出てくる数字が3つあるけど・・・ 言うてみて。

漢数字以外ね」

「えっと・・・」

手紙を見渡すと・・・

「5と13と・・・1?」

「いんや。13分の1分前だから、12だね。
5と12と13。何か浮かばない?」

これは・・・

「5の2乗プラス、12の2乗イコール・・・13の2乗。
ピタゴラス数?」

「ね? ピタ子らしい手紙ってワケ」

そう言う部長はエロそうにニヤリと笑った。

「じゃ、ピタ子のブラ、貰うから〜
これでパンティとセットでゲット〜

あ、後でいいからさ。ブラもらうの」

まだパニック中の私・・・え? パンティも取った? あれ?
どさくさに紛れて部長・・・

手紙のことは全く理解出来ないけど、部長が正真正銘の変態だとい
う事だけは理解した。

「で、でも・・・何がいたい・・・?」

「はわわ・・・こ、これはやっぱり・・・亡霊の仕業です〜」

「さて・・・」

混乱する私とデカルトちゃんをよそに、サンジェルマン理事長が声を出した。

「君達の謎は・・・ もう1つ、これを解く事で全て明らかになる」

そついうと理事長は、私達の目の前に1枚の紙切れを出した。そこには・・・

「直角・・・ 三角形？」

> i 3 7 1 0 7 — 2 4 3 0 <

直角三角形が描かれており、その三角形の中には【157】という数字がある。斜辺、すなわち1番長い辺のところには【x】と書かれていた。

「合同数というのをご存じかな？」

理事長は私の目を見て尋ねる。

「・・・ はい・・・」

知ってる。

3辺の長さが全て有理数の時、面積が自然数nとなるならば・・・
その自然数nを合同数という。定義自体は簡単だし、何よりも私

の嫌いな無理数が出てこない。

例えば、ピタゴラス数として知られる $(3, 4, 5)$ 。これらを3辺とする直角三角形は、斜辺が5、他の2辺は3と4。

$$> i37109 - 2430 <$$

面積は底辺×高さ× $(1/2)$ の公式で

$$3 \times 4 \times (1/2) = 6$$

と出る。だから自然数6は合同数だ。あと、ちょっと難しいけど5も合同数として知られている。 $3/2, 20/3, 41/6$ も

$$(3/2) \text{の} 2 \text{乗} + (20/3) \text{の} 2 \text{乗} = (41/6) \text{の} 2 \text{乗}$$

私の、いわゆるピタゴラスの定理を満たすので、直角三角形の3辺になる事が出来る。面積は

$$(3/2) \times (20/3) \times (1/2) = 5$$

となるので、自然数5も合同数というわけだ。

「5と6は合同数だけど・・・」

1, 2, 3, 4は合同数でない事も知られているのよね」

部長が言った。

「では、この157は合同数かな？」

「ちょっと、すぐには・・・」

「はわわ・・・」

私とデカルトちゃんには応えられなかったが・・・

「157は合同数です」

部長は言い切った。

「どんな数が合同数になるかってのは、数学の中では未解決問題の1つ。

だけど奇素数の場合、8で割った余りが5なら・・・

その奇素数は合同数って知られているの。いわゆる十分条件の1つね」

むむ？ 合同数の問題って、未解決問題なんだ？ そんな事も知らない私。

「157は素数で・・・8で割ると余りが5。

だから、157が合同数だって事だけは確かよ」

エロトーク無しで私達に説明してくれる。頼りになる数学倶楽部の部長だが、相変わらず私の頭は整理がつかない。

「157は合同数が・・・」

理事長はニヤリと笑い、部長に質問した。

「では、xは？」

「・・・そ、それは・・・」

言葉に詰まる部長。

「合同数とわかっていながら・・・
有理数である3辺の長さを出す事は容易ではない。

スーパーコンピュータを用いてもだ」

理事長が神妙な面持ちで語り出す。

「3辺が有理数で、なおかつ157を面積とする直角三角形は・・・
無限個ある事もわかっている。

なのに、その辺の長さはわからない。
不思議なもんだな。数字と言うのは・・・」

「・・・・・・」

私達3人は、直角三角形を凝視する。

> i 3 7 1 0 7 — 2 4 3 0 <

「【生】とは何か？ 【正義】とは何か？ 【愛】とは何か？
【宇宙の起源】は？ 【神】は存在する？」

この世界、答があるはずの疑問は数多い。
それこそ真実は無限にあるはずなのに・・・」

「・・・」

「ところが、それらの答え1つ見いだすことすら容易ではない。
ふふ。この【x】・・・」

そんな現実を皮肉っているようだ」

何が言いたいんだろう？

「あの・・・ 理事長。私を呼び出したのは、いったい・・・？」

「その理由は明確だ」

理事長は私をじっと見つめた。

「君に、この【x】を求めて貰いたい」

「え？」

私に？ 何故？

「あの・・・」

私に変わって、部長が理事長に質問した。

「合同数を求めるのは、高度な数学理論を要します。

何故【現代組】の生徒ではなく、【古代組】のピタ子に・・・？」

おっしゃる通り。

「この【 x 】が有理数だからだ」

理事長は即答する。

「え？」

「合同数の世界は、有理数だけで構成される。

【現代組】の生徒は実数ありきで計算し、【 x 】にたどり着けないだろう。

むしろ有理数しか知らない・・・

ましてや直角三角形のスペシャリストと言われる・・・」

「・・・・・・・・」

理事長の視線が、私に突き刺さる。

「ピタゴラス君。君がこの【 x 】を求めるのにふさわしいと思ったんだ」

「・・・・・・・・」

わ、私が？

「ピタゴラス君。底辺と高さが1の直角三角形の斜辺を求めるより・・・」

この【x】を求める方が、君には適した仕事だ。

そうは思わないか？」

思わないけど・・・

「あの・・・理事長・・・」

私は今の心境を正直に伝える事にした。

「正直私・・・その・・・あの手紙にあるように私は・・・
ルブラン君の事が好きでした。」

今はまだ、ルブラン君の死をまだ受け入れられなくて・・・

【x】を求めるような心境に・・・なれません・・・」

「ふふ・・・」

理事長が不敵な笑みを浮かべる。

「？」

「全ては・・・この【x】にある」

「はい？」

何？ どういう意味？

「来たまえ。3人ともだ」

理事長は立ち上がると・・・ 私達3人を、部屋の奥へと呼び寄せた。奥にはカーテンがかかっているところがあり、理事長はそれを開ける。

「・・・ 何？」

カーテンの向こうには、大きな段ボールがあつた。

「中を見せてあげよう」

そう言った理事長は、手際よく段ボールを止めていたガムテープをひきちぎる。そして・・・

大きな球体が私達の目の前に現れた。直径が1・5mぐらいだろうか？ その球体は銀色の美しい表面で覆われ、下側には何か機械じみたものが見える。パツと見では・・・ 何かの乗り物みたいなの？

「はわわ・・・」

「何ですか、これは・・・？」

「・・・」

部長は無表情でそれを見つめている。まるで、この球体が何かを知っているみたいだ。

「これこそ・・・ 神の贈り物だ・・・」

「え！？」

(第17話へ続く)

第16話 合同数（後書き）

次回予告

私は何が何だかわからないまま、【x】を求めるように言われる。

そしてこの【x】がわかれば・・・

なんとルブラン君が・・・？

次回 「第17話 神の贈り物」

第17話 神の贈り物（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

校内放送で呼ばれた私は、ラッセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は、手紙の主が私である事を証明した。

混乱する私をよそに、理事長は・・・数学の問題を私に出す。これを解けば、全ての謎を解けると言うが・・・？

第17話 神の贈り物

第17話 神の贈り物

聖フィロソフィー学園・・・サンジェルマン理事長【神】を口にした。

「はわわ・・・」

「・・・」

「神の存在を・・・理事長は認めるという事ですか？」
私達を代表して、部長が質問する。

「言つたろ？ 全ては【x】にある・・・見る」

理事長は球体の真上を指さした。そこには直角三角形が描かれており、その三角形の中に【157】と書かれている。

> i 3 7 1 0 7 — 2 4 3 0 <

「こ、これ・・・さっき理事長が紙に書いたのと同じだ・・・」

斜辺に【x】と書かれているところも全く同じ。そして・・・

「テンキー？」

電卓のような数字配列のキーが、三角形の横にはあった。

【7】 【8】 【9】
【4】 【5】 【6】
【1】 【2】 【3】
【0】 【】 【】
【+】 【-】 【x】
【/】 【Enter】

【0】から【9】までの10個のキーと、2つの矢印キー。そして
【+】 【-】 【x】 【/】の四則演算キーと、【Enter】・・・
あとは、よくわからない【】キーが1つ。計18個。

「この球体は、先月・・・アララト山の、とある場所で発見され
た。

複数の付着物を、カーボン14という年代測定法で調べたが・・・

年代はバラバラ。

最古のものは、紀元前2370年プラスマイナス80年」

「そ・・・ そんな昔!？」

思わず声をあげた私。紀元前2000年もの昔に、こんな綺麗な球
体があるなんて・・・ 絶対ありえない。

「最近のものだと、今から20数年前という奇妙な結果が出ている」

「はわわ・・・ 不思議な物体です」

「オーパーツ・・・」

部長が呟いた。

「な、何？ オーパーツって？」

「【Out of place artifacts】。
場違いな出土品って事。つまり・・・」

部長は理事長室にあるガラスケースを指さす。

「その年代のテクノロジーでは作り得ない、存在し得ない物の事」
「そう言えば・・・ 理事長は世界中の珍しい物を集めるのが趣味と聞いた事がある。このガラスケースの中にある物って・・・」

「オーパーツ？」

「私はある研究機関の依頼を受け、この球体の材質を調べた。
ところが、この合金・・・」

地球上にあるどんな技術をもってしても、生成し得ないものだった」

「はわわ・・・」

「げ、現代でも・・・ 作り得ない？」

「正真正銘の・・・ オーパーツ・・・」

「私への調査依頼はリミットがあつてね。ちょうど3日。

これを譲り受けて、すでに1日が経過している。

明後日の夜には、これを送り返さねばならない」

理事長はその球体を右手でさすっている。

「ピタゴラス君！」

「は、はひー！」

突然理事長に呼ばれた私は、声が裏返った。

「できれば明日までに・・・この【x】を求めて欲しい」

何故、【x】に執着するの？

「あの・・・その【x】を求めると、何が起るんですか？」

「実に不思議な金属で、x線による内部の様子もわかっている。

球体の中には、シンプルな構造の電子機器が内蔵されているようだ。

おそらくこのテンキーで、正しい【x】を入力すれば・・・

この機械が起動すると思われる」

球体の外側で何かを操作出来るとしたら、そのテンキーしかない。理事長の言う事が、正しいような気がしてきた。

「・・・」

「パソコンで、調べられないんですか？」

部長が理事長に聞いた。

「調べたさ・・・」

小さな溜息をついた理事長は、私達に問う。

「1澗かんという単位を？」

「1澗？」

何それ？ 単位？

「デカちゃん知ってます。1兆の1兆倍の、さらに1兆倍です」

「一、十、百、千、万、億、兆、京、垓、
杼、穰、溝、澗・・・」

部長は、単位を数え上げてくれた。

「分母分子、ともに1澗×1澗の組合せを・・・
スーパーコンピュータに試させてみた。

ところが全て不正解。

この【×】は、さらに上の単位で答を持っている事が判明した」

「な・・・」

日本のほこるスーパーコンピューター【京】（けい）。1秒間に1京以上もの計算をこなしたと認定されている。1秒間に1京もの計算が可能だとして、1潤もの計算をさせるには・・・1京の1京倍の1万倍の秒数かかる事になる。

それを時間に換算すれば・・・

「3兆年かかるです」

デカルトちゃんは、暗算が得意だ。

「3兆年って・・・」

呆然とする私。

「宇宙年齢は、約137億年と言われてるけどね」

部長が追い打ちをかける。

「無理！！無理でしょ！？スパコンでも3兆年かかる計算を・・・

私が24時間で！？絶対無理！！」

それに・・・

「仮にこの【x】を求めたとして・・・この機械が動いたとして・・・

その先に、何があるっていうんです！？」

思わず逆ギレ気味に、理事長につめよった。

「これで3度目だ。その先には・・・全てがある」

「意味、わからないです」

「僕の仮説が正しければ・・・」

「？」

不意に部長が急に語り出す。

「この機械が動けば、ルブラン君が・・・」

え？　なんで、ここでルブラン君が出てくるの？

「ルブラン君が生き返る・・・」

「ええええええ！！！！？？」

（第18話へ続く）

第17話 神の贈り物（後書き）

次回予告

部室に戻ってきた私達。ルブラン君の事を部長に聞くけど、はぐらかされてしまう。

【from】の手紙には、謎の数字【1729】が書かれていた。

それが何と、【x】を求めるための・・・

次回 「第18話 インドの魔術師」

第18話 インドの魔術師（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

校内放送で呼ばれた私は、ラッセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は、手紙の主が私である事を証明した。

混乱する私をよそに、理事長は数学の問題を私に出す。これを解けばルブラン君が生き返る・・・部長はそう言った。

第18話 インドの魔術師

第18話 インドの魔術師

「ねえ、部長。ルブラン君が生き返るって、どういつ事？」

部室に戻ってきた私達。

「さあ？ カマかけて言ってみただけだから・・・」

サンジェルマン理事長は・・・ 部長の言葉を肯定も否定もしなかった。

「・・・」

実はルブラン君は脳死状態で、体はまだ生きているとか？ でも今朝、全校生徒の前でルブラン君の死を報告してるし・・・

あるいはあの機械の中に、死者をよみがえらせる薬がある？ まさかね。

「それにしても・・・」

謎が多すぎる。

「この手紙・・・」

【 from 】

理事長から受け取った【ピタゴラスに告ぐ】の手紙。この中には、

毎度のごとく便せんが1枚。その便せんの中には・・・

【1729】

とだけ書かれていた。

「何、コレ？ 意味わかんない」

「【x】じゃない事だけは確かです」

もう、ワケわかんない事だらけ。

> i 3 7 1 0 7 — 2 4 3 0 <

この【x】が求められたら・・・

「ホントにルブラン君・・・ 生き返るのかもよ」

部長はそう言うけど・・・

「死んだ人が生き返るなんて、ありえない」

私は死んだルブラン君を病院で見ている。

「ありえないです」

全てを疑うデカルトちゃんでも・・・ 死んだ人が生き返るなんて、思っていない。

「まあ、理事長曰く『全てはこの【x】にある』らしいからさ。

ピタ子、早く求めてよ」

そんな事言われても・・・

「暗算得意よね？ デカルトちゃん」

「デカちゃんでも」 さすがにこんな大きな数、無理です」

だよ。スパコンでも計算出来ないんだから・・・

「僕、思っただけだよ。」

まず攻めてみるのは、この【1729】だと思うよ」

部長はテーブルの上に広げられていた便せんを指さした。

「はい、デカ子！ 素因数分解！」

「1729は 7 かける13 かける19 です」

「うわ・・・ 絶対素数だと思ったのに。」

僕のカンにもぶつたな。うん・・・」

【現代組】の生徒達は、まず素数を疑う・・・ 有名な話だ。

ガラガラ・・・

不意に部室の扉が開いた。そして1人の生徒が入ってくる。

「ラ、ラマヌジャンちゃん!!」

部長が驚いたような声をあげた。

「こんにちは、ラッセルちゃん」

ブラパラ事件で唯一、ブラジャーをはぎ取られなかった子。美しい黒髪に、これまた美しい黒目の女の子。

「ピタゴラスちゃんにデカルトちゃんも・・・ お久しぶり」

「え？ あ・・・ お久しぶり？」

「はわ？」

昨日と何か雰囲気が違う。何か今日は・・・ 友好的なオーラ、出てない？

「な、何しに来たの！？」

やや焦り気味で喋る部長。どうもラマヌジャンちゃんは、苦手らしい。

「うん・・・ 私、最近体の調子が悪くて・・・
明日、田舎に戻るの。」

だから自分の物、取りに来たの」

そう言つと彼女は・・・

【ナマギーリ女神の、おかげです】

という、習字作品をはぎ取った。そして部屋を出て行くとする。

「はわ！？ それを取りにきただけですか？」

デカルトちゃんが声をかけると

「うん。昨日で、本は持ち帰ったから・・・今日はこれだけ」

元気なさそうに応えたラマヌジャンちゃん。

「？」

ふと机の上にある物を見て、彼女はよってくる。

「せんななひやく・・・にじゅうく・・・」

【1729】

例の手紙を見て呟いた。

「あ？ これ？ 素数でもないし、つまらない数なんだけどさ・・・」

「

部長が言つと・・・

「そんな事ない・・・とっても神秘的な数だわ」

え？

「どこが？」

「1の3乗たす12の3乗は1729だし・・・
9の3乗たす10の3乗も1729」

「確かにそうですけど」

暗算の得意なデカルトちゃんだけが頷いている。

「この数字は、2組の異なる2つの立方数の和で表す事ができる・・・
最小の数ですわ」

え？ そうなの？ 1729がその・・・ なんとらの最小数？

「はわわゝ デカちゃんでもわかんないです」

「・・・」

「【現代組】ではこの子、【インドの魔術師】の異名を持ってるからね。

僕の知る限り、数字の感覚は世界一よ」

「インドの魔術師？」

部長が世界一というぐらいだから・・・ ホントにすごい子なんだ。

「でもね、この子・・・

数々のすごい公式発見してくれるのはすごいな〜って思うんだけど・・・

証明はしてくれないのが、玉にキズなのよね」

「・・・」

ラマヌジャンちゃんは、無言で手にもっていた物を広げて見せた。

【ナマギーリ女神の、おかげです】

そして弱々しく、ニコツと笑う。

「・・・」

なんだか、独特の空気を持ってる子だ。

その時！！

私の中に何かがひらめいた。

「じゃあ、みなさん。ごきげんよう・・・」

「ちょっと待って！！」

出て行こうとするラマヌジャンちゃんを引き留める。

「ひょっとしてあなた・・・この【x】、わかったりしない？」

私はラマヌジャンちゃんに、理事長からもらった直角三角形の図を見せた。

「どう？ 合同数の問題なんだけど」

「合同数……」

ラマヌジャンはじつとそれを見つめたあと……

「……」

私を見つめ、こう言った。

「216垓、6655京、5693兆、
7147億、6130万、9610分の……」

4113垓、4051京、9227兆、
7161億、4938万、3203」

「え？ え？ ちょ……」

「はわわ……」

「嘘……でしょ？」

まさか、【x】をいい当てた？

「ちょっと待ったあ！！」

部長が大きな声をあげる。

「理事長が言うには、この【x】……」

1週間、すなわち1兆の1兆倍の1兆倍の数字を超えてるのよ。

1垓^{がい}は、1兆の1億倍。今は【x】じゃないわ!」

確かにそうだ。でもラマヌジャンちゃんは、弱々しく笑って言い返す。

「私が言ったのは、【x】じゃなくて、この数・・・」

そう言うと彼女は・・・直角三角形の斜辺じゃなく、底辺の方を指さした。

「な・・・何で? 何でわかるの!」

「・・・」

ラマヌジャンちゃんは、無言でそれを広げて見せる。

【ナマギーリ女神の、おかげです】

「いや・・・」

それ?

「ま、まあ・・・この子は、不思議ちゃんだから・・・」

苦笑いする部長。私はラマヌジャンに視線を合わせ

「でも、そこがわかるなら・・・【x】もわかるって事でしょ?」

そう尋ねる。

「もちろん。でもそれは・・・あなたが考えるべきですわ」

「ど、どうして!？　ここまで来たら・・・
ズバリ教えてもいいじゃない!？」

ラマヌジャンちゃんは、やっぱり弱々しく笑った後・・・

【ナマギーリ女神の、おかげです】

を広げて見せた。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

部長もデカルトちゃんも一斉に固まる。意味わかんないけど、説得力を感じるのは何故だろう？

「それじゃ私は、さよならですわ・・・」

「あ・・・　ちょ・・・」

ラマヌジャンちゃんは、そのまま部室を出て行った。

「ま、待って・・・」

追いかけてよとした私の肩を、部長が捕まえる。

「ピタ子。大丈夫。」

1辺の長さがわかれば・・・面積からもう1辺の長さも出る。

でしょ？」

「う、うん・・・」

「あとはあなたの専売特許で、【×】出せるじゃん」

その通りだ。面積がわかってる直角三角形はどこか1辺でもわかれば、残り全てを計算できる。そう・・・

【ピタゴラスの定理】で！！

「そ、そうよね。じゃあ、早速計算するわー！！」

意気揚々と紙と鉛筆を用意し・・・

「・・・」

そのまま固まる。

「どした？ ピタ子？」

「・・・ 何だっけ？」

「何が？」

「さつき、ラマヌジャンちゃんが言った数字・・・」

「あ・・・」

あんな長い数、1度聞いて覚えられないわけがない。

「や、やっぱりもう1度ラマヌジャンちゃんを呼び出し・・・」

その時

「216垓、6655京、5693兆、
7147億、6130万、9610分の・・・」

4113垓、4051京、9227兆、
7161億、4938万、3203です」

「え？」

「で、デカ子？」

「はい。デカちゃん、ちゃんとメモってました。ほら」

そう言うと、ものすごい長い数字の分数が書かれている用紙を見せた。

何とデカルトちゃん。たった1回しか言わなかった、ラマヌジャンちゃんの言った数字を・・・全てメモっていたのだ。

「デカした、デカ子！！！」

「きゃゝ、デカちゃん、褒められると伸びる子です」

この子は抜けているようだけど・・・ 要所を締めるタイプだ。

「よし！ ご褒美に僕が・・・ おっぱいを大きくしてあげよう！」

大きなヤマを超えたからだろう・・・

「きゃゝ！！！」

目の前の2人は、いつもの2人に戻っていた。

ラマヌジャンちゃんが嘘をついていたか、あるいはデカルトちゃんのメモが間違っていない限り・・・

【x】を求める事は出来る。

先にバラしちゃうけど、ラマヌジャンちゃんもデカルトちゃんもミスはなかった。つまりあの数字は正しいものだ。

そうとなれば・・・

さっと【x】求めて、すぐにも理事長の元へ行こう。

そう思っていたんだけど・・・

（第19話へ続く）

第18話 インドの魔術師（後書き）

次回予告

ついに【X】を求めた私。理事長室にあった、あの球体にその数字を入力する。

すると・・・

次回 「 第19話 【X】、そして球体の正体 」

第19話 【x】、そして球体の正体（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

気になっていたあのラブレター。何とびつくり！ 書いたのは私である事を部長が証明した。身に覚えのない私に、理事長は数学の問題を出す。

私はラマヌジャンちゃんのヒントを足がかりに・・・

第19話 【x】、そして球体の正体

第19話 【x】、そして球体の正体

サンジェルマン理事長から、【x】を求めるように言われて24時間後。

3月26日。金曜日だ。

私、以下2名は理事長室にいた。

「【x】を求めた？」

理事長が聞き

「はい」

私が応える。

「・・・」

意外と手間がかかった。1辺の長さがわかれば、面積からもう1辺の長さはすぐにわかる。でも、2辺の平方和をとる作業は・・・かなりの重労働だった。

最初、コンピュータにやらせようと思ったんだけど・・・あれだけの桁数、しかも分数計算となると、コンピュータもオーバーフローを起こしてしまう。結局、手計算で頑張ったんだけど・・・

2つの巨大な分数を平方して、通分して、和をとって、足して、約

分して、ルートをとる作業・・・

徹夜してなおかつ、ついさっきまで計算して、ようやく【x】を求める事ができた。暇な読者がいれば、あの【x】を是非とも求めて欲しい。PCをもつてしても、簡単に出せる代物ではないわよ。

「では・・・」

理事長と私達は、あの球体の元へと歩み寄った。理事長はテンキーの前に手をかざすと

「その数字、まずは分子から言いたまえ」

「桁を言つとわかりづらくなるので・・・ 数字をそのまま言います」

「わかった」

「2 2 4 4 0 3 5 1 7 7 0 4 3 3 6 9 6 9 9 2 4 5 5 7 5 1 3 0 9
0 6 6 7 4 8 6 3 1 6 0 9 4 8 4 7 2 0 4 1」

自分で言つてて、どんな単位かもわからない。後で部長から聞いたから【極】って単位なんだって。そんな単位、聞いた事無いんだけど？

理事長はその数字を打ち込み、【/】（スラッシュ）キーを押した。

「では、分母を」

「8 9 1 2 3 3 2 2 6 8 9 2 8 8 5 9 5 8 8 0 2 5 5 3 5 1 7 8 9
6 7 1 6 3 5 7 0 0 1 6 4 8 0 8 3 0 です・・・」

それにしても、この【x】・・・ 無限にあるらしい。最も簡単な解でも、これだけの恐ろしい有理数が出てくる。ならば、他にある無限個の解は・・・

考えるの、ヤメておこう。

「・・・」

理事長は慎重に数字を打ち込んでいく。そして・・・

【Enter】キーを最後に押した。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

緊張の時間が流れる。そしてその時はきた。

音も立てず、その球体のテンキーの下側・・・

大きな円の穴が開いたのだ。

「・・・」

その場にいた全員、息をのむ。

正面から見ると球体の横側・・・ といっても球だから、どこが横
つては言えないんだけど・・・

テンキーの下側が半径1mぐらいの円となり、穴が開いている。誰
が見ても入り口だ。そこから球体の中を覗くと・・・ 小さなパネ
ルみたいなのが見えるだけで、イスもなければ柱なんかも見あた
らない。

「や・・・ やった!!!」

ようやく声をあげたのは私。

「す、すごいです〜 はわわ〜」

「・・・」

「・・・」

部長と理事長は沈黙していたけど・・・ 難しい数学の問題を1つ
解いたというのは、私にとって素直に嬉しい。

ひとしきり喜んだ後は・・・ あの言葉が気になった。

【この機械が動けば、ルブラン君が生き返る】

部長は確かにそう言った。もうすぐ、その言葉の真相がわかるはず
だ。

「で？ 理事長、この後は？」

私は理事長に声をかける。

「・・・・・・・・」

球体を呆然と見つめている。

「理事長？」

「え！？ あ、ああ・・・ この後だな・・・」

放心状態だった理事長が、ようやく私の声に応じた。

「・・・・・・・・」

左手の拳を丸め、それを鼻っ柱にあてる。

「・・・・・・・・」

そして、何かを悩んでいるようだ。迷っているような表情を見せた後・・・

私に視線を合わせ、こう言った。

「我が子を・・・ 救って欲しい・・・」

な・・・

「何ですって!？」

「何ですって!？」

「はわわ」

デカルトちゃんだけは、ハモれなかった。

「我が子、ルブランを・・・君達なら救えるはず・・・」

ちよ・・・まさかの衝撃の事実。ルブラン君は、サンジェルマン
理事長の子供!？」

「ル、ルブラン君の・・・お父さん？」

呆然とする私は、理事長に聞いてみる。

「そうだ。ルブランは、私の子だ」

「・・・」

それを理解するのに、私達3人はしばしの時間を要した。

「ルブラン君を・・・救ってくれ？」

何とか親子関係を受け入れた私は、次の質問をする。

「ああ」

「ちよ、ちよと待ってください、理事長。
すでに死んだルブラン君を救えっていわれても・・・」

混乱の極みにいる私の言葉を遮さへぎって、部長が声をかけてきた。

「ピタ子、まだわかんないの？」

「な、何が？」

「デカちゃんも、何が何だか」

部長だけは・・・【何か】がわかってるようだ。

「コレに乗ってさ・・・2日前に戻るのよ」

そして、あたかもそれが当たり前のように言っただけだ。

「ですよ？ 理事長？」

部長が理事長に言葉をかけると・・・

「・・・」

理事長は無言で頷いた。

「え？ え？ 何？ 2日前に戻るって？」

って事はまさか・・・この球体って・・・

「タイムマシン！？」

「タイムマシン！？」

最初で最後・・・

私とデカルトちゃんは、綺麗にハモった。

(第20話へ続く)

第19話 【x】、そして球体の正体（後書き）

次回予告

あの球体がタイムマシン！？ そんな事、信じられるわけがない。

まずは乗ってみようと、部長が言った。過去へ行けなければそれで
おしまいとい諭され、私達はその球体の中へと入って行く。

そして・・・

次回 「 第20話 時空を超えて」

第20話 時空を超えて（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

気になっていたあのラブレター。何とびつくり！書いたのは私である事を部長が証明した。身に覚えがないのに、なんで！？

そして私達は・・・理事長室で、ある球体の前に立つ。

何とそれは・・・

~~~~~




第20話 時空を超えて

私とデカルトちゃんは・・・

その球体がタイムマシンという事を、受け入れる事がなかなか出来ない。

ただ、タイムマシンの存在を認めてしまえば・・・

これまでの不可解な事は、説明がつくような気がする。

「つまりこのタイムマシンで、過去に戻り・・・

交通事故に遭うはずのルブラン君を・・・助けると?」

まだ半信半疑の私。いつからか敬語を忘れている。

「その通りだ」

理事長は言いきった。

「はわわゝ デカちゃん、思っんですけど」

タイムマシンを受け入れられないもう1人・・・デカルトちゃんが声をかけてくる。

「ルブラン君のお父さんが理事長なら」

理事長自身が、子供を助けに行くべきでは

ないでしょうか？」

冷静に考えれば、もっともな意見だ。だが理事長はクビを横に振る。

「出来る事ならそうしたい。だが私は・・・

2日前、君達を見た。ルブランが車にひかれる日の朝・・・

君達3人が、学校の屋上で楽しそうに話しているのを・・・」

そういえば理事長・・・
おととい一昨日部室の前で会った時、そんな事言
ってた。

「しかしその日の午後、君達に会った時・・・
朝に3人でいた事実はないという」

実際、その朝はみんなバラバラに登校している。

「デカちゃんは、お昼過ぎに登校しました」

「朝には、いるはずのない君達を見て・・・ 昼にはそれが届いた・
・・・」

理事長の視線の先には、あの球体・・・ タイムマシン？ がある。

「そしてその日の夕方には・・・

私は手紙を渡すピタゴラス君にも出会っている」

えっと・・・

「【from】の手紙だ。下手な変装をした君が渡した」

あゝ・・・ あれか。

「あの時、私はこう思った。

きつと君達3人は・・・

我が子を救うため、未来から来たのだと・・・」

「なるほど・・・」

部長だけが頷いている。私とデカルトちゃんは、今なお理事長の話を飲み込めない。飲み込めないけど・・・

「えっと・・・ 2日前、未来から来たであろう私達を見たから・・・
・
今からコレに乗って、過去へ戻れと・・・

おっしやってる・・・ んですね？」

この乗り物がタイムマシンという前提で、私は理事長に聞いた。

「・・・」

理事長は無言で頷く。

「で、でも・・・」

「あのさ～」

私の言葉を、部長が遮る。^{さえぎ}

「ピタ子、言ってたじゃん」

「え？」

「ほら、ラブレターの件で・・・」

【私が盗まなければ・・・

ルブラン君は公園に行っていた。交通事故にも遭わなかった！！
！】

「ってさ」

た、確かにそうは言ったけど・・・

「チャンスじゃない？ 自分の過ちを正す。

愛しのルブラン君をこの世に戻す・・・ ね？」

「う、うん・・・ それは、そうなんだけど・・・」

私の視線は【タイムマシン】とやらを捉える。

「まずは乗ってみようよ。

デカ子もピタ子も、タイムマシンに懐疑的なんですよ？」

「う・・・」

理事長のいる前で【うん】とは言いつらい。

「まあ、表情見てりゃわかるって。
だからまず、コレに乗ってみてさ・・・」

過去へ行けなければ、僕らにできる事はない。
その時点で、この話は終わりって事でいいじゃん」

「・・・・・・・・・・」

部長の言う事、一理ある。

「デカちゃん、難しい事嫌いです。だから部長に賛成します。！
まずは、この乗り物に乗ってみるです」

「そ、そうね。過去に行くなんて、考えられないけど・・・
まずは乗って、ダメならそこまで・・・よね・・・」

「じゃ、ピタ子からどうぞ」

え？ わ、私？

「ルブラン君のラブレターを盗んだの、ピタ子でしょ？」

「う・・・」

で、でもさ・・・ 自分で自分のラブレターを盗ったって事になる
のよね？

それがルブラン君の死に繋がったって・・・ 何か変じゃない？

「・・・・・・・・・・」

考えれば考えるほど、余計わからなくなる。

「わ、わかったわよ・・・」

もし過去に行くことが出来れば、全ての謎が明らかになるのかもしれない。

「行けばいいんですよ」

まずは行動してみよう。思考はその後。

「ほら、リュックも忘れずに」

部長がリュックを手渡した。

「・・・」

それを背負った私は、理事長と視線を合わせる。

「これを持って行くといい」

理事長が1本の鍵を渡してくれた。

「本校のマスターキーだ。校内なら、どの部屋も開ける事が出来る」

「・・・」

鍵を受け取った私は・・・球体の横に開いた円から中に入る。

「・・・」

直立だと頭がぶつかっちゃうけど・・・ ちょっとかがむ程度で、
立ったまま中に入る事が出来た。

「わ・・・」

外からは銀色の表面だったけど、中から見ると・・・

「外が見える・・・」

何て言うか、全面ガラス張りみたいな感じ。

「お!? マジックミラー号みたい! いいね〜
興奮するね〜 らっせる らっせる〜!」

セクハラオヤジが2番目に乗り込む。

「はわわ〜 中からは外が丸見えです〜 不思議です〜」

そして3人目はデカルトちゃん。直径1.5mぐらいの球の内部・
・ 狭いけど、3人ぐらいなら入れる。無理すれば、あと2人ぐら
いは入れそうだ。

「どれどれ・・・」

球体の中にある物といえば・・・ 中央にある小さなディスプレイ
と、その下にあるキー群。キーの横や球体上部には、いくつかパネ
ルのようなボタンのような物もある。

【7】 【8】 【9】
 【4】 【5】 【6】
 【1】 【2】 【3】
 【0】 【】 【】
 【+】 【-】 【×】
 【/】 【】 【Enter】

球の外にあったのと同じヤツだ。興味津々の部長が、まっさきにパ
 ネルに触れる。

「なるほどね。シンプルでいいわ・・・」

【】 【】 【】 【】 【】 【】 【】 【】 【】 【】

小さなディスプレイの1番上には、こんな表示がある。

「・・・・・・」

それらを見つめる部長。

「こういうのはね、説明書なんかなくても操作出来るってのが基本
 なのよ・・・」

「根拠は？」

「ない。けど、難しい機械ほど、それがあるべき姿。
 数学だってさ・・・」

難しい記号に見えて、実は一番シンプルな記号を使ってるもんね。

デカ子、扉閉めて」

「は、はい……」

デカルトちゃんは、開いた扉を閉めようとするが……

「スイッチがないです」

「……」

私は天井にある小さなボタンを見つけたので

「こ、これかな……？」

押してみた。すると音も立てずに、扉が閉まった。

「はわわ　Pちゃん、正解です」

なるほど。直感に従えば……それが正しいのか。

「さて。今日は3月16日だから、2日前だと……」

パネルを操作した部長は

【　　】 【 3 】 【 1 4 】 ： ：

今年の西暦と、月日を入力する。

「時間、どうする？」

部長は自信満々だが・・・そんな入力でいいのだろうか？　まあ、2日前に行けるなんて、未だに半信半疑だけど。

仮に行けたとして

「・・・」

ルブラン君を助けるには・・・

「何をすれば正解なんだろう？」

「僕もわからない。その場の状況で判断するしかないね、今のトコは。」

ピタ子。2日前、何時に登校した？」

「えっと・・・朝の6時45分ぐらい」

「はわわ　デカちゃん、爆睡中の時間です　そんな時間に登校なんて」

【　　】 【 3】 【14】 【 6：30：00】

そう入力した部長は

「多分コレで・・・」

【Enter】キーを押した。

「ちょ・・・心の準備が・・・」

【Are you OK? (Yes / Cancel)】

ディスプレイにそう表示され、【Cancel】の方が暗転している。PCなんかでよく見る画面だ。

「そ、そうよね・・・ 確認画面出るのが普通よね。
ねえ、部長。少し深呼吸してから・・・」

私のセリフの途中で部長は・・・

【】【Enter】と、押した。

「ちょ・・・」

「迷いは禁物！！ 過去へGo!!!!」

「・・・」

「・・・」

何も感じない。

「あれ？ 慣性の法則的なもの、感じないわね？」

部長がポツリという横で・・・

「はわわゝ 失敗です」

「何にも動いてない・・・」

この乗り物の中からは、外が丸見えだけど・・・ 外の様子も全く
変わり映えしない。

「失敗ね」

そう言った私は、天井のボタンを押した。音も立てずに扉が開く。

「うゝん。おかしいな。」

グラヴィトンだけは、ブレーンを飛び越えるから・・・

絶対【G】が、かかるはずなんだけど・・・」

ソーカルちゃんみたいな事を言う部長を置き去りにして・・・ 私
とデカルトちゃんは、球体の外に出た。

【やっぱりダメでした、理事長】 そう言おうと思ったのに・・・

「あれ？ 理事長は？」

「はわわ？ どっか行っちゃいましたです」

理事長室の出入り口に目をやると、ドアが閉まっている。いや・・・

「鍵、かかってる・・・？」

「はわ？ 何か変です」

チュンチュン・・・

「そう言えば・・・電気が点いてない・・・」

窓から差し込む強い日差しのおかげで気づかなかったけど・・・
いつの間にか室内の電気が消えていた。

「スズメの声が聞こえるです」

何かがおかしい。私は窓際へ歩み寄ると、カーテンを開け・・・
外を見る。

「太陽が・・・」

低い位置にある。まるで今は・・・

「朝？」

「なんだ。ちゃんと2日前の朝に来てるじゃん」
「ラッセル　ラッセル」

いつの間にか後ろに立っていた部長が、嬉しそうに笑っていた。

「嘘・・・」

今が2日前の朝？　嘘よ・・・でも、どう見ても外は朝・・・

「ど、どうやって・・・2日前の朝だと証明するの？」

思わず数学者のセリフを言った私。

「そんなの簡単よ。ピタ子、携帯持ってるでしょ？」

「う、うん・・・」

背負っていたリュックから、携帯を取り出した。

「表示、見てみなよ」

「・・・」

【3月14日(Wed) 06:31】

「な・・・」

思わず声をあげた。

「はわわ〜！ デカちゃんの携帯も、一昨日の表示になってます〜
しかも、午前6時31分です〜」

「な・・・」

何てこと・・・？

「じゃ、じゃあ・・・ 私達は今・・・
過去の世界にいるって事!？」

「はわわ〜」

「ラッセル ラッセル〜」

(第21話へ続く)

第20話 時空を超えて（後書き）

次回予告

ルブラン君が死んだ日にタイムスリップした私達。

部長は相対性理論の創始者、アインシュタインちゃんと仲が良く・

・
タイムトラベルに関しても、色々議論しているという。

私達はそんな部長のアドバイスを聞いて、行動する事にした。

次回 「第21話 バタフライエフェクト」

第21話 バタフライエフェクト（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

気になっていたあのラブレター。何とびっくり！書いたのは私である事を部長が証明した。身に覚えがないのに、なんで！？

理事長室に呼ばれた私、目の前には何とタイムマシンが！

私、以下2名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップした。

~~~~~

第21話 バタフライエフェクト



第21話 バタフライエフェクト

「えつと・・・」

「昨日と昨日と今日・・・ いや、今が14日なら今日と明日と明日になるのか？」

「14、15、16日の着信履歴やメール内容が、全て携帯から消えている。」

「つて事は完全に・・・」

「過去に・・・ 来た？」

「まだ信じられないけど・・・」

「ルブラン君が死んだ日の・・・」

朝？

「はい、みんな。集合〜！」

部長が私とデカルトちゃんに声をかけた。例のタイムマシンの前に集まる私達。部長は表にある方のディスプレイを指さす。

【23：57：43】 【23：57：42】 【23：57：41】
・
・
・
・

何？ カウントダウンしてる？

「はい！ この意味は？」

「・・・」

しばらく考える私。

「ひょっとして・・・ 過去にいられる時間かしら？ 24時間？」

「ピタ子、ピンポン！ 多分だけどね。

つまり、僕たちがこの世界にいられるのは・・・ 約24時間」

「はわわ・・・」

「僕、中も確認したけどさ。

中のディスプレイも、同じカウントダウンしてた」

「そ、そうよね。いつまでも過去にいるってワケには・・・
いかないって事よね」

「ただね、それ以前に元の世界に帰ろうと思ったら、帰れそうだよ。

なんか、元の世界に戻りましょうみたいなボタンあったし。

だからこの世界にいられるのは、【最高で24時間】って事だと思っ

「なるほど。最悪、明日の午前6時半までには・・・

タイムマシンには戻ってないと・・・ って事ね？」

「はわわゝ リミット付きのタイムトラベルですゝ」

ちよつと緊張気味の私とデカルトちゃんだけど、部長はけっこう明るい。

「まあ、ジャックバ ワーも24時間あれば、国を救えるんだし。大丈夫っしょ！」

「あの、部長・・・ そういう固有名詞は、あまり出さない方が・・・」

「え？ 何で？」

大人の事情です。

「質問ですゝ もしそのリミットまでに戻らないとデカちゃん達、どうなるんですかゝ」

「さゝ？ 死ぬかも・・・」

部長はあっさり言った。

「は、はわわ・・・ し、死んじゃうんですかゝ？」

「ハッキリはわからない。

今いる過去の世界に、取り残されるかもしれないし・・・

時空の摂理を乱したという事で、存在自体消えるかもしれない」

「・・・」

「タイムトラベルは、いろんなパラドックスを含んでるからさ。
とにかく、事は慎重に運ぶべきね。」

僕たちがこの世界にいること自体が、すでにありえない事だし」

う、うゝむ。過去や未来へ行き来するって・・・ 映画やアニメみたい
に、単純なものじゃないのね。

「はわ!？」

窓の外を見たデカルトちゃんが声を上げた。

「どした？ デカ子？」

「ぴ・・・ Pちゃんです」

窓の外を指さすデカルトちゃん。部長と私はすぐにその方向へ視線
を移した。

「わ、私・・・？」

1階にある理事長室の奥の窓からは、広いグラウンドが見える。そ
して視線の先には・・・ リュックを背負った私が、無表情で校舎
に向かう姿が見えた。

「・・・」

「おゝ ラブレター渡す為に、超早起きしたんだねゝ ピタ子、偉い！」

腕組みした部長は、窓の向こうの私を見ながら頷く。

変な感覚だった。私はここにいるのに・・・

視線の先にいるのも、明らかに私。とても現実世界とは思えない。

あ。

過去だから現実ではないのか？ もう、よくわかんない。

「そ、それで？ 私達、どうすればいいの？」

まさか過去に来ると思つて無かったから、何をどうしたらいいのかわからない。頼れるのは部長だけだ。

「そうね。まずは確認しておくべき事を。
ルール1。なるべく過去の事象を乱さない」

「はわ？」

「どういう事？」

「バタフライエフェクト・・・ 知ってる？」

知ってる。

「デカちゃん、知ってますゝ」。

蝶の羽ばたきが、台風起こす　みたいなヤツです」

「デカ子、ピンポン！」

小さな出来事が、未来の事を大きくかえてしまうつてヤツね」

例えば何気に目の前に飛んできた蚊を、パチンと叩いて殺してしまつたとして・・・殺した蚊がメスだつた場合を考えてみよう。蚊は1回の産卵で300個ぐらいの卵を産み落とす（蚊の種類によつても違うけどね）。

と、いう事は・・・このメス蚊を1匹殺したことで、近い未来産まれる予定だつた300匹の蚊も全て殺した事になるわけだ。それだけではない。

産まれる予定だつた300匹のうち、メス蚊も多く含まれるわけで・・・それらたくさんのメス蚊が産む予定だつた、2世代先の（300匹）×（産まれる予定のメス蚊の数）だけの蚊も全て・・・

さらに3世代先の蚊、4世代先の蚊・・・

蚊の寿命は3〜4週間程度だから、数世代先といつても遠い未来じゃない。1匹のメス蚊を殺した事で、未来に産まれる予定だつた天文学的数値の蚊を殺した事になる。

これは現実的な例ではない事を注意しておくね。蚊やそれを取りまく世界はそんな単純ではないし、上のような計算が簡単に成り立つわけじゃない。あくまでもバタフライエフェクトを説明するため
の極端な例だつて事。

1つの小さな事が未来には大きな影響となつて現れる・・・それ

がバタフライエフェクトだ。

「僕たちの目的は、ルブラン君の事故を防ぐこと。でしょ？」

「うん」

「だからそれ以外の事で、過去を乱さない。

ちよつとの事が、のちのち収集がつかなくなる可能性もあるからさ」

「はわわゝ 具体的にはゝ どうすればいいんでしょうゝ」

「ルブラン君の事以外では・・・」

この世界の住人と、なるべく接触を持たない。とりあえずね」

何せ過去に來た経験なんて・・・ 当たり前だけど、ない私達。

意外かも知れないが【タイムトラベル】も、立派な哲学の対象だと部長は言う。これまで哲学者だけでなく、物理学者や数学者なんかの間でも多くの議論がなされてきたし、今もなおそれは続いている。

「どんなルールが存在し、僕たちの行動1つがどれだけ未来・・・僕たちにとって現在だけど、それにどれだけ影響を与えるかわからない。

だから極力・・・

僕たちはこの世界で、周りとの接触を最小限にするべきだと思つ」

「うん・・・」

「わかりましたです」

「でも部長・・・ タイムトラベル、くわしいのね？」

「そりゃそうよ。だって僕、アインシュタインちゃんと超友達だもん！」

【現代組】所属、物理の天才アインシュタインちゃんは・・・
部長とすつごく仲がいいらしい。アインシュタインちゃんといえば、
【相対性理論】や【光量子仮説】で有名な超天才児。【光速度普遍
の原理】から、【ブラックホール】【タイムトラベル】の事まで・
・

とにかくそんな部長がいるのは、とっても心強いって事。

【ルール1：過去の世界で、周りとの関わりを極力避ける】

「そしてもちろん・・・」

【ルール2：過去の状況を、なるべく変えない】

「ルブラン君を救うこと以外でね」

「うん」

「わかったです」

「で？ これからどうすれば？」

過去の私は、教室にリュック置いた後・・・

ルブラン君の靴箱に向かうわよ。あと10分ぐらいで」

もともとルブラン君が、交通事故に遭うきっかけは・・・

「私が、ルブラン君の靴箱に入っていたラブレターを盗^とって・・・あれ？」

待つてよ？　そういえば・・・

「ルブラン君の靴箱に・・・私より先に、あの手紙入れたのって・・・誰？」

「・・・」

部長が黙っている。

「多分・・・」

多分？

「ピタ子、あなたよ。今の・・・この世界からしたら、未来のピタ子が・・・

過去のルブラン君の靴箱に、手紙を入れたんだよ」

え？　おかしくない？

「だってルブラン君の靴箱に、あのラブレターが入ってなければ・・・

」・

過去の私は、普通に自分のラブレターを入れるだけ。

「先にラブレターが入ってたから、思わず盗^とつて逃げて・・・
靴箱は空っぽになった」

結果、ルブラン君は手紙で指示したポール公園には現れず、自宅近くで交通事故に遭った。

「だったら、未来から来た私が・・・過去の自分を邪魔したって事？」

それって、パラドックスじゃない？」

「デカちゃんもそう思います」

「・・・」

部長は眉をひそめた。

「かといって・・・このまま何もせず、現在に戻っても・・・
ルブラン君が生き返っているハズがない・・・」

この謎には・・・

「何かの答えがある。

僕達は、その答えを探さなければいけない・・・

そんな気がする」

「・・・」

エロセクハラキャラは微塵も見せない部長。

少なくとも今の私達は、その答えが何なのかはわからない。それ以前に、本当に答えとやらがあるのか・・・それさえわからない。

「早速、タイムトラベルパドックスに直面か・・・」

部長は悩んだ表情を見せたが

「でも、過去の状況なるべく変えてはいけない・・・ルールに従おう。」

ピタ子・・・手紙をルブラン君の靴箱に入れるべきよ」

そう言った。

「でも・・・」

「でなきゃ、僕たちがここにいる理由がない。おそらく僕たちは、色々試される。」

場面場面で、どこまで適切な判断が出来るか。
ある意味、哲学者として試されている気もする・・・」

ホントに？

「とにかく、まずは手紙を靴箱へ！急いで、ピタ子!!」

「う・・・わ、わかった・・・」

真剣な部長の迫力におされた私。リュックから【from】の手紙を取り出した。

「そっちじゃない。1番最初に、ピタ子を書いた方の手紙よ」

「え？　どして？」

「今ここで、1番最初の手紙の裏に【from】を書くのでなければ、2番目の手紙・・・」

【from】の存在自体がおかしくなる」

「はわわ〜？」

つまりこういう事だ。今、私の手元には2通のラブレターがある。

1つは最初に私が書いた大元のラブレターで、裏には何も書かれてない。もう1つはルブラン君の靴箱で見つけて、思わず盗^とっていた・・・裏に【from】の書かれているラブレター。

中身は全く一緒だけど・・・

そのまま2番目の【from】を出しちゃうと、誰が【from】を書いたのかという話になる。いわば誰もそれを書いておらず、パラドックスが生じるわけだ。

だから、裏に何も書かれてない方の手紙に・・・

「い、これでいいのよね？」

今、【from】を書いた。

そうすればつじつまが合う、というのが部長の主張だ。正直私、部長にそう説明されても混乱してる。

「うん、それでOK。さっきも言った通り僕らは・・・
時空の狭間で、色々試されていると思って行動しなきゃいけない。

1つ1つ正しい道を考えていかないと・・・
取り返しがつかなくなるかもしれないからさ」

「はわわ・・・」

「・・・」

深く考えず過去に來たけど・・・ そんな単純なもんじゃないんだ。

「そうよ。何故、このタイムマシンが・・・

僕たちの目の前にあるか、もっと深く考えるべきね」

「え？」

この時の部長の言葉。本当はとても意味深な言葉なんだけど・・・

「説明はあと。もうすぐ過去ピタが靴箱に着く。

その前にその【from】を、ルブラン君の靴箱に入れるわ

よ
「

過去ピタ？ まあ、意味はわかるけど・・・

「うん・・・」

急いで私達は、靴箱へと向かおうとした。

「あ・・・」

部長が声をあげる。

「どうしたの？」

「このタイムマシン・・・隠しとかなきゃ」

タイムマシンの位置は、過去に来る前と変わっていない。私達はそれのある場所・・・理事長室の奥のカーテンを閉めた。

「こ、これでいいのかな？ でも過去の理事長がこれ見たら、どうなるの？」

とりあえずこのカーテンを開けない限り、タイムマシンが見られる事は無い。

「今は靴箱が先決。行くわよ！」

「う、うん・・・」

(第22話へ続く)

第21話 バタフライエフェクト（後書き）

次回予告

私はルブラン君の靴箱に、自ら書いた【from】の手紙を入れる。

ところが・・・デカルトちゃんが、とんでもない大失態を！

次回 「第22話 ノールールか！」

第22話 ノールールか！（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

気になっていたあのラブレター。何とびつくり！書いたのは私である事を部長が証明した。身に覚えがないのに、なんで！？

理事長室に呼ばれた私、衝撃の事実を2つ知る。1つはルブラン君が、サンジェルマン理事長の子供だった事。もう1つは、目の前にタイムマシンがあるって事！

私、以下2名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップした。

第22話 ノールールか！



第22話 ノールールか！

「・・・」

ルブラン君の靴箱、その前に立っている私。向こう側の柱の影に、部長とデカルトちゃんがいる。

「・・・」

この【from】のラブレターを入れなければ、うまく行くよ
うな気がするんだけど。

しばらく迷った私。ここはタイムトラベルにくわしい部長の指示に
従おう。

私はドキドキしながら靴箱の扉を開けた。

「・・・」

上履き以外、何も入っていない。

「よかった・・・」

もしまた別の手紙入っていたら、どうしようかと思っちゃった。

「・・・」

私は【from】の手紙をそっと置く。そしてすぐに、部長達

のいる反対側の柱の影へと走っていった。

しばらく影で靴箱を見守っていると・・・ 反対側から、過去の私が現れた。

「・・・・・・・・」

「過去ピタ、登場」

「はわわ　Pちゃんが2人　やっぱり変です」

視線の先にいる過去の私・・・ 靴箱の前で、乙女のためらいの表情を浮かべている。

「・・・・・・・・」

客観的に見ると・・・

「キモいな、私」

「そんな事ないって。

いいね　いい表情してるよ　過去ピタ。

そのまま脱いじゃおうって感じ　ラッセル　ラッセル」

AV監督か！！

やがて過去の私は、靴箱の扉を開き・・・ 驚きの表情を見せる。

「あれ？ デカルトちゃん？」

いつの間にかデカルトちゃん・・・過去の私のすぐ近くで、その様子を観察していた。

「はわわゝ ドッキドキですゝ」

その目は野次馬根性丸出しだ。見てるこっちが恥ずかしい。

リン・・・ ゴーン・・・ カーン・・・ ゴーン・・・

7時ちょうどチャイムが鳴り響く。

ガチャリ。

「!？」

学生用入り口が開く音だ。そして・・・

「カントちゃん・・・」

そうだ・・・ 思い出した!

【近代組】の彼女は必ず同じ時間、午前7時に登校してくる。この日もそうだった!

靴箱の方に視線を移すと、過去の私も焦った表情を見せている。いや、それよりも・・・

「デ、デカルトちゃん!？」

彼女の背後に、カントちゃんが近付いている。なのに気づいてない・

・

「あらゝ こんな朝早く、珍しいわねゝ . . . デカちゃん」

カントちゃんは、デカルトちゃんに声をかけた。

「はわ？ カントちゃんゝ おはようですゝ」

デカルトちゃんは、ステキな笑顔でカントちゃんに挨拶した。

「あのバカ . . .」

部長がそれを見て悪態をつく。それもそのはず。過去の人物との接触は、極力避けると言われたばかりなのに。

すぐに部長はカントちゃんに姿を見られないよう、デカルトちゃんの所へ走っていく。同時に私の視界には . . . あの手紙を握りしめた過去の私が、階段を駆け上っていく姿が見えた。

部長はすぐに靴箱の影から、手だけを伸ばしてデカルトちゃんの首を捕まえる。

「はわ？」

そして思いっきり首根っこを引っ張り上げ . . . カントちゃんに背を向け、逃げるように走っていった。

「ピタ子、他の子も登校してきた！ 行くわよ！」

デカルトちゃんを引っ張りつつ、私に声をかける部長。

「う、うん・・・でもどこへ!？」

「屋上!!」

確かに学校の外へ出るのはマズイ。

「わかった!」

こうして・・・

首根っこを捕まえられたデカルトちゃんと、私、部長の3人は屋上へと走っていった。

・・・。。。

屋上へ来た私達。

「この・・・バカデカ子! ノールールか!!」

珍しく部長が怒鳴り散らす。

「あんだけ注意したのに・・・

何、カントちゃんに笑顔振りまいてんのよ!!」

「はわわゝ ごめんなさいですゝ ちょっと不注意でしたゝ」

「過去をいじくり回しすぎると・・・

私達3人の存在だって、危ういんだからね!!」

「はわわゝ 考えが甘かったですゝ 以後、気をつけますゝ」

いきり立つ部長の肩に、ポンと手を置いた私。

「まあ、デカルトちゃんも反省してるみたいだし。
もついいんじゃない？」

「ルール無用の甘党に・・・ 正義のパンチラぶちかます!!
ほら・・・ 伊達直 にパンツを見せろゝ」

そう言う部長は・・・ デカルトちゃんのスカートをめくり始めた。

あれ？ さつき、あんなにマジ怒りしてたのに？

「虎柄か!？ タイガーパンツかゝ？ ラッセル ラッセルゝ」

ストレスでエロオヤジキャラが出た？

「それにしても・・・」

昭和世代にもわかりづらいボケをかましてるな・・・ このエロオヤジ。

「あの・・・ 部長・・・」

伊達直 とか、わかりやすい固有名詞はヤメようよ・・・」

さつきも言っただけど、大人の事情。なんつーか、普通にマズいっしょ？

「ほ〜れ〜 パンツじゃ〜 虎柄じゃ〜」

人の話、聞いてないし。

「きゃ〜」

何故か2人とも楽しそうだ。

「ちよつと部長・・・」

とはいえ、今は生徒が登校中。校内を歩くわけにもいかないの・・・

しばらく私は、2人のセクハラごっこを眺めていた。

そんな屋上の私達に・・・

唯一気づいていたのが、校庭裏の駐車場に車を止めたサンジェルマン理事長だった。

「・・・」

私達は理事長に、全然気づかなかったけど・・・理事長はこちらを、じーっと見つめている。

「・・・」

・・・。

現時点で、2日前とは何ら変わりはない。このままじゃルブラン君、交通事故に遭ってしまふ。それを防ぐため、どう行動すればいいのか・・・ 私は考えた。

過去の私はこの後、ポール公園に行くわけでしょ？

ルブラン君は公園に行くわけないし・・・

「じゃあ今の私が、過去のルブラン君をポール公園に向かわせる？」

そうした場合、ルブラン君が来ないと思ってる過去の私と遭遇し・・・

・ ややこしい事になりそうだ。

「だったら・・・」

過去の私は完全無視。今の私がルブラン君を別の場所に呼び出し・・・

・ ラブラブになる？

「よし！」

私はもう1枚残っている【from】の手紙を取り出した。中の便せんを取り出し、【ポール公園】の部分を消す。

「・・・」

ポール公園とは反対側にある

「だえんのしょうてん 檜野商店に来てもらおうかな」

その商店にルブラン君を呼び出すことにした。

「呼び出した後は・・・」

ここは思い切って、映画に誘ってみよう。

【シネマ・かかんかん 花冠館の前で、お待ちしています】

そうね、恋愛映画よりホラー映画よね。今上映中の「リング 環」なんか、いいかも。

きゃーって言いながら、ルブラン君にしがみついたりして・・・
・ きゃはー。

「ピタ子。その手紙、どうするつもり？」

わ！ びっくりした！

「ぶ、部長、いつの間に・・・」

背後に？

「だからさ。その手紙、どうすんの？」

「そりゃ、放課後までにルブラン君の靴箱に入れて・・・」

「はい、なっせる」

なっせる？

「とにかく初めてのタイムトラベルだからね・・・

その手紙は、僕たちにとっての現在に持ちかえるべきだね」

「ど、どうしてよ？」

「うん・・・」

部長の説明はこうだ。

私達が今いる過去の世界には、ルブラン君宛のラブレターが3通存在する。

1通は過去の世界の私が書いたラブレターで、過去の私のリュックにそれは入っている。残り2通は、いわゆる現在の私が持ってきたもの。うち1通は、過去の私がさっき持っていた。

そして今、手元に残っている【from】だ。これを過去に世界に残してしまうと、パラドックスになる・・・と、部長は言う。

「過去、現在、未来・・・

ピタ子を書いた手紙は、それぞれの世界に1通ずつあるべき」

らしい。だんだんめんどくさくなってきたけど・・・ここは従っておいた方が安全かな。

「わかった。部長の言う通りにする」

2日前に続き、今回の新ラブレター作戦は頓挫した。

「じゃあまた、作戦を練り直さないと・・・」

手紙に頼らず、どうやってルブラン君を救うべきか・・・

「・・・」

「まあ、あと23時間もあるんだし。

滅多に出来ないタイムトラベルも堪能しながら・・・

ピタ子の未来の恋人、救う方法を考えましょう」

慎重だけど、楽天的な部長。未来の恋人ってのは、ちょっと嬉しい響き。

「・・・」

私は屋上から校庭を見渡していた。四方は全て金網で囲まれている。その金網を両手で握りしめ・・・

「ルブラン君・・・早く登校してこないかな？」

乙女ちつくな事を呟いた。

「あ、ピタ子。その右側の金網、気をつけてね」

「え？　として？」

「確か3日前の夜・・・だから、この世界では昨夜になるのか。

何たら流星群の隕石が、この屋上に落ちてさ。

その金網ぶち抜いたのよ。ほら・・・

手前のコンクリ、盛り上がってるでしょ？　そこに落ちたの」

部長は右側の金網と、手前のコンクリートを交互に指さす。

「ホントだ・・・」

金網の一部に、大きな穴が空いていた。ヘタしたら人一人落ちてしまうほど、大きな穴だ。

「隕石自体は直径5cm程度だったんだけどね・・・」

たった5cmで、こんな大きな穴があくものなの？　コンクリも結構粉々になってるんだけど？

私は、穴の空いた金網から離れた場所へ移動する。がっちりした安全な方の金網を握りしめ、遠くを見つめた。

「ルブラン君・・・　早く登校してこないかな？」

・・・。

その頃。

サンジェルマン理事長は、理事長室の扉の前に立っていた。

「・・・」

扉の鍵が開いている。

（「鍵を閉め忘れた？　あり得ん・・・」）

警戒しながら理事長室に入り、中を見渡す。

「・・・」

いつもと変わらぬ整然とした部屋だが・・・違和感を感じる。

「・・・」

ふと奥にあるカーテンに視線を合わせた。カーテンの向こうには・・・私達が乗ってきたタイムマシンがある。

「・・・」

そのカーテンに向け、歩き始めた時・・・

リリリリン・・・

デスクの電話が鳴った。

「・・・」

歩を止め、踵かかとを返すと・・・デスクの受話器を取る。

「はい。ああ、国立数理科学研究所の・・・ええ、私がそうです。」

視線は、カーテンの方に向いたまま。

「ええ。アララト山で発見した【箱船】の件ですね。
いえ、あいにく10時から聖メンデレーエフ学園にて・・・

【錬金術、特別公開講座】がありまして・・・」

コンコン・・・

電話中、理事長室を何者かがノックする。

「失礼します」

スーツを着けた、メガネ姿の女性が入ってきた。理事長の秘書だ。

「わかりました。ではまた、後ほど」

ちょうど受話器を切った理事長。

「どうした？」

「はい。製薬会社の方がいらっしゃってます」

「ああ、【RDND】の論文関連だな。通してくれ」

ネクタイを緩めながら、ふっつと溜息をつく。

（「今日は、タフな日になりそうだ・・・」）

「わかりました。では、こちらへ」

秘書は、廊下に立っていた2人の男達を理事長室へ招き入れる。

「失礼します」

スーツ姿の男達が入ってきた。秘書は入れ替わるように部屋を出て行く。

「．．．．．」

理事長は、カーテンを一瞥いちべつした後．．．

「どうぞ、ソファへかけてください」

入ってきた男達に声をかけた。

．．．．．

午前8時過ぎ。

「はわわゝ 見てくださいゝ ラッセルちゃんですゝ！」

2日前のラッセルちゃんが登校してきましたゝ」

「ホントだ。過去の僕を見るつても．．． 変な感覚ね．．．」

「現在のラッセルちゃんがゝ 過去のラッセルちゃんと遭遇すると

）
どうなるんでしょうかゝ？」

「恐ろしい事、言わないでよ・・・ デカ子。
完全にパラドックスだし・・・」

過去の僕が、今の僕を認知したら・・・
どちらかの僕、あるいは両方消えちゃうかも」

「はわわ」

「ドッペルゲンガーの伝説って・・・
ひょっとしたら、タイムトラベラーのパラドックスなのかもね・・・」

「・・・」

デカルトちゃんと部長の会話をよそに・・・
ずっと、屋上から校庭を見ている私。

「おかしいな・・・ いつも8時前には登校するハズなのに・・・」

授業開始は8時半。まあ授業といっても、ほとんど自習なんだけどもね。

「どした？ ピタ子？ 愛しの君は、現れない？」

「うん・・・ もう登校している時間のハズなのに・・・」

「はわ？ Pちゃん、ルブラン君待ってるんですか？」

「うん・・・」

「デカちゃん、同じクラスだからわかるんですけど」

デカルトちゃんも、ルブラン君も【近代組】だ。

「デカちゃんの記憶では確か・・・」

ルブラン君、この日は学校お休みでしたよ」

「えーーーー！？」

（第23話へ続く）

第22話 ノールールか！（後書き）

次回予告

その日、ルブラン君は学校を休んでいた！？

衝撃の事実には、私は驚きを隠せない。

私達はルブラン君の自宅に向かおうとするが・・・屋上に別の生徒がやってきた。

次回 「第23話 タレスちゃんの危機」

第23話 タレスちゃんの危機（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。思わずそれを盗みとった。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

ただ、私が盗んだラブレターは・・・私が書いたと、数学倶楽部の部長・ラッセルちゃんと言う。身に覚えがないのに、なんで!?

理事長室に呼ばれた私、衝撃の事実を2つ知る。1つは、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。もう1つは、目の前にタイムマシンがあるって事!

私、部長、デカルトちゃんの3名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。そこでデカルトちゃんの口から、その日ルブラン君が学校を休んでいた事を聞いた。

~~~~~

第23話 タレスちゃんの危機



第23話 タレスちゃんの危機

ル、ルブラン君が・・・ お休み？

「じゃ、じゃあ・・・」

どのみち、靴箱の手紙なんか・・・ 元々知らなかった？」

だって、学校にすら来てないんだから。

「この・・・ バカデカ子！！　なんで、それ、早く言わないの！！」

「はわ？　別に、聞かれなかったし・・・」

「デカ子・・・　僕たちとずっと行動を共にしてて・・・
マジ、何もわかってないの！？」

「はわわ？　何かデカちゃん・・・　マズい事、しましたか？」
した。

「・・・」

絶句する部長。

ルブラン君を事故に遭わさまいと動いていたのに・・・　これじゃあ今までの行動、全く無意味じゃない。

「デカルトちゃん・・・　そういう大事な情報はもっと早く・・・」

「タイムマシンに乗って、【超】のつくドまぬけカマすなんて・・・」

部長がマジ怒りしてる。

「デカ子!! あんた、ドラ もんもの 太か!!!!」

だから、そういう固有名詞は・・・ たまにある部長の【例えツッコミ】は、大人の事情にひっかかる。

「はわわゝ とにかくごめんなさいですゝ」

部長がデカルトちゃんのお尻をペンペン・・・ いや、揉み始めた。

「きゃゝ ですゝ」

「の 太くん! ノールールなお前は、ドジでノロマなカメだ!!
おら、おらゝ」

基本、部長も・・・ ノールールだよね。

「さて・・・」

私は考える。

デカルトちゃんの情報によれば、この日ルブラン君は学校に來ていない。ならば私が、彼の靴箱からラブレターを盗った事実は・・・

彼の死の原因ではない。

って事でいいのよね？

確かにデカルトちゃんのヘマは痛いけど・・・私の心の負担はだいぶ減った。

「とはいえ・・・」

今日、彼は死ぬ。そしてそれを阻止するため、私達は過去の世界へやってきた。

「だとしたら、どうするべき？」

「そうねー 僕だったらー」

デカルトちゃんのお仕置き（セクハラ）を終えた部長が、いつの間にか背後に立っている。

「過去ピタと、ルブラン君をくつつける。

そしたら、現在に戻った時・・・今のピタ子の彼氏になってるかも」

え？ マジ！？ それは超嬉しい！！

「でも、どうすれば・・・」

「まず、ルブラン君の家に行こう。

病気で休んだのか、別の理由で休んだのかを知りたい」

「そ、そうね」

「彼は学校を休んでるのに、自宅前で交通事故に遭ってる。過去ピタとルブラン君をくつつけるには・・・」

まずはルブラン君の情報収拾から」

なるほど。エロがなければ、心から頼りになる部長だ。

「はい！ はい！ デカちゃんも行くです〜！」

勢いよく手を挙げるデカルトちゃん。

「・・・」

正直、足手まといにならないかしら・・・というのが本音だ。

「まあ、デカ子はルブラン君と同じクラスだし。学校で貰ったプリントを渡すとか・・・」

口実をつけて、ルブラン君の家に侵入させる作戦もアリかな。何かしら役には立つかもね」

「デカちゃんは、名誉挽回のため、頑張りますです〜！」

「そうとなれば、すぐに」

「ピタ子。あわてない、あわてない」

両手の人差し指で頭に円を描く部長・・・

休さんのつもりか？

「ほら」

その人差し指を、校庭に向けた。

「あ・・・」

たくさんの登校する生徒達が見える。

「今は・・・動けない・・・」

過去の世界の住人と、なるべく接触を持たないようにするってのも・・・

なかなか大変だ。

・・・。。

午前9時半まで屋上で待機した私達。遅刻者も含め、この時間なら登校してくる生徒は、ほとんどいない。

「部長。そろそろいいんじゃない？」

「うん。じゃ、非常口から行こうか・・・
くれぐれも、人との接触は避けるようにね。

特に自分自身とは！」

「うん」

「デカちゃんは、自分自身と会う事はないです」
「何故なら、過去のデカちゃんは、まだ自宅で睡眠中です」

いや、そこで胸をはられても。

ボタン！！

突然、屋上出入り口の扉が開いた。

「・・・」

「・・・」

「はわわ・・・」

とつさに、大きな給水タンクの影に身を隠した私達。チラリと音のした方に目をやると・・・

「タレスちゃん！？」

私と同じ【古代組】のタレスちゃんが、上を向いて金網のほうへ歩いていた。

「さうで。

この時間でも、乙女座流星の運行なら調べられるわね・・・」

何やらボソボソつぶやいている。なんていうか、薄手でスケスケの

ネグリジェみたいなの・・・胸元のVゾーンが大胆な衣装を着けている。

「昨夜も隕石が落ちたようだし・・・この軌道なら・・・」

ノートと鉛筆を持ち、上を向きながら何かをメモってるようだ。

「ちょっとピタ子。あの子、あんたのクラスメイト・タレスちゃんって子でしょ？」

「何やってんの？」

「た、多分・・・星の動きとか、いろいろ調べてるんだと思う。彼女、天体とか観察するのが趣味で・・・」

日食とかも、いつ起こるのかわかるんだって・・・」

「ふん。でも、これじゃ僕達が出られないわ。早く出て行ってくれな・・・!？」

急に部長の目が大きく見開いた。

「・・・」

かと思うと、部長はタレスちゃんの所へ向かって走っていく。

「ちょ・・・部長!？」

「はわわ　タレスちゃんが・・・」

タレスちゃんは上を向いて歩き続け、そのまま・・・あの、破れ

た金網の所へ一直線。

「た、タレスちゃん！……！」

思わず私は声をかける。

「え？」

タレスちゃんが反応して、こちらを向いたと同時に……彼女はあの粉々になったコンクリにけつまづき、何と破れた金網の所へ転ぼうとした。

「え！？」

私が声をかけたから？

「おら！！」

そのタレスちゃんの腰巻きを、部長が掴むと……思い切りこちら側へ引き寄せた。

「あゝ　れ」

タレスちゃんは悪代官に帯を解かれる遊女のような仕草で……

ドスン。

「あいた！」

平らなコンクリに尻餅をつき、事なきを得た。

「ふいゝ．．． ちよつとタレスちゃんとやら．．．
あんた、もうちよつとで投身自殺よ！」

危機を救った部長は、タレスちゃんに声をかける。

「な．．． 何？」

お尻をさすりながら、タレスちゃんは立ち上がる。まだ状況が飲み込めてないようだ。

「つたく．．． あんたさ!!」

遠い星の事はわかって、足下の事は全然わかんないのね！」

部長がタレスちゃんの危機を救ったのは間違いない。

ただ．．． 過去の人間と関わった事も間違いない。まあ、人の命がかかってたんだから、仕方ないわよね。

「ピタゴラスちゃん？」

思わず身を乗り出した私と、タレスちゃんの視線がバチツと合う。

「やば．．．」

すぐに給水タンクの影に身を隠す。

「ピタ子．．． もういいよ。出てきな．．．」

完全に顔見られたし．．．

私はタレスちゃんの前に出てきた。デカルトちゃんも私に続く。

「やっぱりピタゴラスちゃんだ。でも、ついさっき・・・
教室いなかった？」

「い、いたけど・・・ほら、何て言うの？ 走って屋上に・・・」

しどろもどろで応える私。

「あんた、星に夢中になりすぎてさ・・・
屋上に来たピタ子に、気づかなかったってわけ」

「あら。そう・・・」

ナイスフォロー。

「じゃ、僕たちは校舎に戻るから。
頑張つて星に願いを叶えてもらってね。

さ、行こ。デカ子、ピタ子！」

「う、うん・・・」

「はいです」

「ちょっと待って！」

タレスちゃんが、部長の腕を掴んだ。

「あなた、還元水に興味ない？」

「は？」

ポカンと口を開ける部長。

「還元水・・・体に良いわよ？」

「興味ないから」

部長が手をふりほどいた。しかしタレスちゃんも詰め寄ってくる。

「あなた見た所・・・おっぱい無いわね？」

その言葉に反応した・・・

「・・・」

部長の眉間にしわがよる。

「無い？ 小さいとかじゃなくて、無い？」

「還元水は体にいいのよ。飲み続ければ、おっぱいだって・・・
今よりもっともって成長するわ」

「・・・」

タレスちゃんの胸は、推定Eカップ。

「あんたさ・・・ブラ、とつてよ」

出た。いらつきながら部長が、あの言葉を浴びせる。

「ほっっほっほ。私、ブラはつけない主義なの」

なんか、お高くとまつた笑い方をするタレスちゃん。スケスケの衣装とはいえ、胸の所はフリルがついておっぱいは直接見えない。そのチラリズムは、エロオヤジの部長にはたまらないだろう。

「だからお胸の無いあなた・・・還元水、買わない？
今なら安くしておくわよ」

そういえばタレスちゃんは【健康は金になる】と言って、クリーンな水を買って占め・・・それを商売にして、お金持ちになったって聞いた事ある。

ある意味、水商売で成功したというわけか？

「ふん。おっぱい大きくて、金持ちで、ブラをつけない・・・
哲学界の、叶恭 ってわけか・・・」

いや、だから・・・リアル名前は口にしないでつてば。

「はわわ」部長の目に炎が宿ってるです」

「ぶ、部長？」

部長は人差し指をタレスちゃんに向ける。そして・・・

「僕と勝負だ!!」

勝負を申し込んだ。え？ 何？ 勝負って？

「私と勝負？ あらあら・・・ 血気盛んなお嬢さんだ事。
私、争い事には興味ございま・・・」

「あんたが勝つたら、その還元水・・・ 1年分買っ！」

「なんですって!？」

お？ タレスちゃんがくいついた。

「その代わり僕が勝つたら・・・」

「あなたが勝つたら・・・？」

生おっぱい揉ませろ？

「生乳、揉む!!」

正解。

「面白いですわ！ その勝負、受け・・・」

ボタン!!

何とこのタイミングで、もう1人屋上に現れた。

「ラ、ラマヌジャンちゃん!!」

美しい黒髪に、綺麗な黒目．．． 思わず私は声をあげた。

「．．．．．」

ラマヌジャンちゃんは、私に視線を合わせると．．． 優しく笑った。

「どちら様で？ 記憶力には自信ありますが．．．
あなたとはお会いした事、ありませんわ」

口調も優しい。でも、そうだ！ 私が会ったのは．．． この日の
お昼、部室に本を取りに来た時。そして明日【ナマギーリ女神の、
おかげです】を取りに来るラマヌジャンちゃんに、会ったんだ。そ
れ以前は、会った事がない。

「あ、ほら。インドの魔術師って噂を聞いた事あって．．．
わ、私はあなたの事、よく知ってるわ．．．」

「．．．．．」

神秘的な黒目で私を見つめている。

「ラ、ラマヌジャンちゃんは、何故ここに？ お、屋上に用事でも
？」

「ええ。ちよつと体調が悪くて．．．
外の空気にあたろうかと．．．」

「そ、そう。お大事にね．．．」

ラマヌジャンは首をふった。

「嘘・・・」

え？

「今、私は嘘をつきましたわ。これでお互い様ね・・・」

え？ え？ 何かを見透かしたような黒目で・・・ それでいて優しい黒目で、じっと私を見つめる。

「な？ どういう事？」

部長からは不思議ちゃんと聞いていたけど・・・ 私もつかみ所が見つからない。

「本当は私・・・ ナマギリ女神によばれて、ここへ来たの」
へ？

「あ、そう。よ、よかったわね・・・」

「・・・」

ラマヌジャンちゃんは、私をじっと見つめている。

「た、体調はどう？ 最近、体調悪いって・・・」

沈黙に耐えられず、私は声をかけた。

「・・・」

彼女は黙ったままだ。

「あ・・・ 引越するんだよね？」

「・・・」

しばらく沈黙を保ち続けていたラマヌジャンちゃん、ようやく

「あなたは・・・ 神を信じるかしら？」

私に口を開いた。

「え？ あ、いや・・・ 別に・・・

いてもいいかな、とは思うけど・・・ 100%信じてるわけじゃ・・・」

「・・・」

またしても沈黙を保った後・・・

「あなたは・・・

【ナマギーリ女神】のおかげで、未来を歩む事になる・・・」

「は？」

何？ 魔術師って、占い師か何かなの？

「な、何で・・・

私の知らない神様のおかげで・・・ 未来を歩むわけ？」

だんだんと、あまのじやくな私が出てきたその時・・・

ボタン！！！！

何と何と・・・ このタイミングで、さらにもう1人屋上に現れた。

何でよ！？ みんな授業、サボリまくり？ まあ、授業はほとんど
自習なんだけどさ・・・

新しく屋上に現れたその子は・・・ ちよつとウェーブがかかった
銀色の髪。目をつり上げらせ、見た目は意地悪そうな女の子だけど・
・ 誰？

「はわわっ・・・ フェ、フェルマーちゃん！？」

え？ 【ピタゴラスの定理】と二分して有名な【フェルマーの最終
定理】の？

「おや？ ルネ・・・ 君も教室のスペースが狭すぎて、屋上に？」

デカルトちゃんのフルネームは【ルネ・デカルト】だ。

「はわわっ・・・」

デカルトちゃんは、私の背中に隠れた。そういえば、フェルマーち

やんを苦手にしていたっけ。

「おやおや・・・ また、余^よから逃げるのかえ？」

どうやらこのフェルマーちゃん、老婆みたいなしゃべり方をするようだ。

「ふおえっ ふおえっ ふおえっ」

笑い方は、老婆そのもの。

だんだん状況がややこしくなってきたので、今一度確認しよう。

今、この屋上にいるのは・・・

まず過去の世界の住人、タレスちゃん、ラマヌジャンちゃん、フェルマーちゃん。そして、タイムトラベルでこちらの世界に来た、部長、私、デカルトちゃん。合計6人だ。

「面白いですわー!!」

この状況でタレスちゃんが声をあげた。右手の人差し指を上にあげている。

「何やら因縁のありそうな、3組6人が集結したようで・・・」

「ナマギーリ女神のお導き・・・」

「ふおえっ ふおえっ ふおえっ」

「あまり過去とは接触持ちたくないけど・・・ おっぱいを・・・」

「えっと・・・ ルブラン君は？」

「はわわ・・・」

タレスちゃんの人差し指が、私達に向いた。

「決闘ですわ！！ 3 on 3・・・ 団体戦で決闘を申し込みますわ！！」

「ナマギーリ女神のお導きなら・・・」

「ふおえっ ふおえっ ふおえっ 余は構わぬぞ」

「喧嘩上等！ その生乳・・・ 絶対、揉みしだいてやる！！」

「え？ な、何？ 決闘って・・・」

「はわわ・・・」

こうして・・・

【タイムトラベラー代表3人】VS【過去組代表3人】
ファイエス

「意外と真面目な、哲学バトルが始まるのであった！
ラッセル ラッセル」

あの・・・

ルブラン君は？

（第24話へ続く）

第23話 タレスちゃんの危機（後書き）

次回予告

次回、突然2人の新キャラが初登場。

哲学者達のプライドをかけ、3VS3のバトルが開始される!?

次回 「 第24話 爆哲! オンエアバトル 」

第24話 爆哲！ オンエアバトル（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそのラブレターを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を2つ知る。1つは、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。もう1つは、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの3名は・・・  
ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

私のクラスメイト・タレスちゃんが屋上から落ちそうになり、部長はそれを救う。それがきっかけで・・・

~~~~~  
第24話 爆哲！ オンエアバトル

第24話 爆哲！ オンエアバトル

『さあ、今宵もやって参りました。【爆哲、オンエアバトル】season2！

実況はお馴染み・・・

何故（Naze）、人は（Hitoha）、考える？（Kang aeru）

NHKの茂木ちゃんです！ A～HA～ そして解説は・・・』

『この世に哲学者として生を受けたのならば・・・
歩き通せよ、哲学の道。こんにちは、実況の西田幾多郎です』

『さあ、西田先生。久しぶりにやってきました！ 哲学バトル。
今回は春の特番、スペシャル企画ということで・・・

団体戦でのバトルとなります！ まずはルール説明をお願いします
す』

『はい。今回は【タイムトラベル組の3人】と・・・』

『ちよ、ちよつと待ってください・・・ 西田先生。

我々は、彼女たちがタイムトラベルしてきたという事を・・・

知っているのでしょうか？』

『はい。脚本に書かれてあります。事前に読んでませんか？』

『A～H A～ 失礼しました。』

では、そのタイムトラベル組3人の視点に立った場合……

我々の存在は、どう捉え^{とら}えられるのでしょうか？』

『私達は、まあ、いわゆる……』

パラレルワールドにいて、彼女たちを見てるようなものです。

私達は彼女たちを見る事が出来ませんが、あちらからはこちらが見えない。

番組上、そういう設定です』

『A～H A～ よくわかりました。』

じゃあ、我々は勝手にこちらで実況＆解説するだけの存在ですね？』

『その通りです。あちら側とは一切、コンタクトは取れません』

『では、西田先生。改めてルール説明をお願いします』

『はい。今回はですね』

・
【タイムトラベル組】ピタゴラス、デカルト、ラッセルに対し……

【過去組】タレス、フェルマー、ラマヌジャンによるチーム戦となります』

『A～H A～ 決着はどのようにつくのでしょうか？』

『チーム戦では1対1の哲学バトルを、最大3試合行います。』

1 試合 1 試合に引き分けはありません。

先に 2 勝すれば、そのチームの勝ちというルールです』

『A ～ H A ～ と言う事は、西田先生。

1 戦目 2 戦目を連勝したチームは・・・

3 戦目を待たずに勝利！ という事でよろしいですね？』

『その通りです。個人個人の哲学力はもちろん大事ですが・・・
チーム内で、いかにプラスの哲学的連鎖を作っていけるか。

スポーツ同様、哲学にもいい流れ・悪い流れがありますからね。
哲学的総合力と哲学的流れ。この 2 つが、勝利を引き寄せる力ギ
です』

『A ～ H A ～ ではもう 1 つ。

1 つ 1 つの試合はどのように展開され・・・

どのように勝敗がつくのでしょうか？』

『ええ。まずは対戦相手のうち、1 人がサイコロを振ります』

『サイコロ・・・ ですか？ 西田先生？』

『ええ。各面には【真実】【愛】【存在】【神】【根源】【】・・・
・

この 6 つの文字が書かれています。

出た目をテーマに・・・ お互いの哲学を語り合うわけです』

『なるほど。』

西田先生、サイコロの目にある【】の説明をお願いします』

『【】はテーマフリー。既存の目をテーマにしてもいいですし・

例えば【知】とか【認識】とか・・・

サイコロの目にないテーマを選んで、バトルしても構いません』

『わかりました。決着方法は？』

『時間無制限、引き分け無し！』

相手が言葉を失うか、ギブアップで勝負あります』

『A～HA～ しかし、あのサイコロ・・・

どこかで見た事あるようなサイコロですね？』

『小堺 機の【ごきげん う】ですよ、茂木ちゃん先生』

『あの・・・ 西田先生。そういうストレートな固有名詞は・・・
NHKという事もありまして、今後控えてください』

『何が出るかな？ 何が出るかな？』

『・・・』

『お？ 茂木ちゃん先生。第1試合が始まりそうですよ！
第1戦は・・・ ラッセルちゃんVSタレスちゃんです』

『A・・・A～H A～では、気を取り直して。

西田先生、この第1戦。ズバリ、どこに注目ですか?』

『はい、茂木ちゃん先生。人類史上、最初の哲学者と言えば?』

『タレスちゃんです』

『その通り。彼女は7賢人の1人としても有名ですよね』

『あ、西田先生。残り6賢人について、お聞きしてよろしいでしょうか?』

『ウィキペディアで調べてください』

『いや、ウィキペディアって・・・』

西田先生も、ノールール系キャラのようです・・・』

『お!? じゃんけんで勝ったタレスちゃんがサイコロを振りましたよ!』

何がでるかな～ 何が出るかな～』

『・・・・・・』

『おお!? 何と・・・』

茂木ちゃん先生! なんて書いてます? 私、目が遠くて・・・』

『えっと・・・ 出た目は【根源】です!』

『はい。これは【アルケー】と読んでください。』

非常に面白い対決になりそうです!』

『ほ。西田先生、どの点が面白いのでしょうか?』

『人類史上、最初に物の根源とは何か・・・それを考えたと言われるのがタレスちゃん。』

一方、ラッセルちゃんは・・・』

『そう言えば西田先生は・・・』

ラッセルちゃんの所属する【現代組】、その担任ですよ?』

『はい。私、ラッセルちゃんの担任をしています。』

彼女はあのアインシュタインちゃんと仲が良く・・・

現代物理学の【素粒子論】にもくわしいんですよ。

まさに物の根源についての、最新知識があるんですね。』

『A～HA～ 万物の根源を最初に考えたタレスちゃんと・・・最新物理学における物の最小単位、素粒子にくわしいラッセルちゃん。』

この2人の対決というわけですね。非常に楽しみです!』

『ラッセルちゃんは、ご存じ数学倶楽部の部長もしています。』

哲学者ながら現代数学や現代物理学、それに文学等にも精通しています。』

『A～HA～ ラッセルちゃんはかなりの博識のようです。』

この勝負、ラッセルちゃん有利と見てよろしいでしょうか?』

『ええ。片や人類最古の哲学者。片や現代科学の最新知識を有する博識者。』

知識ではラッセルちゃんの方が上ですが・・・

タレスちゃんには、ファースト哲学者としてのプライドがあります。

いい試合を期待しましょう」

『はい、わかりました。』

では第1試合・・・ 西田先生、ゴングをお願いします」

『わかりました。では・・・』

カーン！！

『ゴングが鳴りました！ 第1試合開始です！！』

（第25話へ続く）

第24話 爆哲！ オンエアバトル（後書き）

次回予告

哲学バトル、第1試合は・・・ ラッセル部長 VS タレスちゃん

部長が勝てば、タレスちゃんの生乳を揉む権利を得て・・・ タレスちゃんが勝てば、部長は還元水1年分を買う事に。

お互いの哲学を賭け、熾烈なバトルが始まる！？

次回 「 第25話 ラッセル VS タレス 」

第25話 ラッセル VS タレス（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそのラブレターを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を2つ知る。1つは、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。もう1つは、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの3名は・・・
ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

私のクラスメイト・タレスちゃんが屋上から落ちそうになり、部長はそれを救う。それがきっかけとなり私達3人と、【過去組】タレスちゃん、フェルマーちゃん、ラヌジャンちゃんの3人で・・・

哲学バトルが始まった。

第25話 ラッセル VS タレス

第25話 ラッセル VS タレス

第1試合は、部長とタレスちゃんの対決。

「・・・」

「・・・」

お互いのにらみ合いが続く。最初に口を開いたのは部長だった。

「タレス（Thales）、ラマヌジャン（Ramanujan）、
フェルマー（Fermat）・・・

【TRF】か・・・小室フアリーには負けないわよ！」

いや、だからさ・・・小室 哉さんも微妙な時期だから、名前を出さないであげて。

「テーマは【^{アルケー}根源】。これはもう【水】ね！
反論あるかしら？ TPPさん？」

部長に続き、タレスちゃんが口を開く。

「何、その・・・TPPって？」

「ツル（Tsuru）・ペタ（Peta）・ピタンコ（Pitt
anko）・・・」

「ぬう！？」

あ、部長の気にしてる事を。いつもならブラを外せと反論するけど、タレスちゃんはノーブラだし・・・

『おっつと！ 出ました！ TRFに返す言葉が、タイムリーなTPP！』

西田先生、今の返しはポイント高いのでは？』

『茂木ちゃん先生。今のは何1つ、哲学的な事を捉えてません。もっと本質的な【根源】が出てきてからですよ、哲学バトルは』

『A～HA～ 失礼しました。では、今一度バトルに注目しましよっ』

「ふふ。万物の根源はズバリ【水】！ 何か反論はありまして？ TPPさん」

挑発的なタレスちゃんの攻撃・・・ 口撃だが、部長が負けるハズない。

「ふ・・・ 水はH₂O。水素と酸素で作られているのよ！そしてそれら原子や分子は・・・ 素粒子で構成されている。

僕にとって万物の根源は・・・ ズバリ【素粒子】よ！！」

『出ました、素粒子！ これはもう・・・
彼女の言う通り、ズバリど真ん中じゃないですか？ 西田先生？』

『いきなり確信で来ましたね、ラッセルちゃんは。

タレスちゃんの、少し後に出た【デモクリトス】ちゃんは・・・

原子の語源である【アトム】を万物のアルケーと言いました。
しかし素粒子は、その原子を構成する最小単位なんですよね』

『A～H A～ これはもう、ラッセルちゃんの勝利でしょう
やはりタレスちゃんでは、知識の差が・・・』

『いえいえ、茂木ちゃん先生。まだわかりませんよ。
さあ、今度はタレスちゃんの反撃です』

「ふふ、TPPさん。私達生きとし生けるものは・・・ 水があつての事。

水なくして生きてはいけない。

こうやって私達が、アルケーディスカッションしている事だって・

・

とどのつまり、水のおかげよ!」

「・・・?」

「つまり、人類が高度なディスカッションするにまで進化したのも・

・

水のおかげでなくって?

元を正せば、生き物の起源は水。それ、すなわち・・・

万物を認識する私達・・・その根源としていきつく先は、水よ
！！！」

『何と！ 錠破りの進化論発言ですよ、西田先生！』

『ええ。【古代組】のタレスちゃんから・・・』

【進化】という言葉聞けるのは意外でしたね』

『【古代組】は、その概念を習っていないはずですよね？』

『おそらくですが・・・』

【現代組】の子達とディスカッションをして、得た知識でしょうね。

そついう意味じゃ、ラッセルちゃん。

タレスちゃんは、簡単に勝てる相手ではないですよ』

「ふん・・・ そんなの詭弁きへんよ！ 僕には通じないわ！」

『西田先生。詭弁とは？』

『ええ。ま、簡単に言うतすね。

あたかも論理的な事を言うてるんだけど・・・』

実はそれらしい事を言うてるだけで・・・』

中身は根拠のないのへりくつ・・・ そついうものです』

『もう少し、視聴者にわかるようにお願いしてよろしいでしょうか？』

『では、具体例を。茂木ちゃん先生、人は卵を産みますか？』

『まさか！ 人類は【ほ乳類】ですよ。卵を産むわけがないです』

『ではもう1つ。茂木ちゃん先生は、カモノハシをご存じですか？』

『名前ぐらいは・・・』

『カモノハシはオーストラリアに生息する【ほ乳類】で・・・
卵を産むんです』

『え？ ほ乳類なのに・・・ 卵を産む？』

『ですから、同じほ乳類である我々人類も・・・
卵を産む体の機能は持つてるんです』

『え・・・ ええ？』

『茂木ちゃん先生。今、一瞬【そうかな？】って思いましたよね？』

『お、思いましたね・・・』

あの・・・ カモノハシのくだり、嘘ではないですよね？』

『ええ。カモノハシは卵を産むほ乳類、それは間違いありません。
ほ乳類の学術的な説明は長くなるので、割愛しますが・・・』

人が卵を産むことはありません。

これはちよつとした二セ論理を展開して、あなたにそう思わせたいんです』

『はゝ．．． まだ、よくわかりませんが．．．』

『【詭弁】を言う者は、今のように．．．
間違つてゐる論理を展開したり、相手の知識の曖昧さにつけ込みます。』

紀元前のギリシアでは、詭弁で人を惑わす．．．
まあ、今で言う詐欺師のような輩が^{やから}あふれていた時代があったんです』

『A～H A～』

『【知、ある者】と称する、いわゆる詭弁者。
後に【何も知らない】と称するソクラテス。』

ここからまた、哲学は発展していくのですが．．．
まあ、この話は次回。今は彼女たちのバトルを見守りましょう』

『くわしい解説、ありがとうございました、西田先生。
では、バトルはどうなっているでしょうか？』

『全ての生命の起源は水！ 水がなければ、人は地球に存在しなかった。』

万物の根源を考える人間の存在は．．． 水があつての事！

どうかしら？ ツルペタピタンコさん。おっと失礼、TPPさん？」

『西田先生。詭弁だとしても・・・なかなか正論に聞こえますね』

『ええ。相手を説き伏せる、説得力のある語り口も・・・哲学者のスキルの1つですから』

「み、水は・・・水素原子2個と酸素原子1個で・・・その原子も、中性子と電子と・・・」

「もう1度聞いわ、TPPちゃん。この地球に水がなかったら・・・

万物の根源どーのこーのと、議論する機会があったかしら？

アルケーを考えるには・・・水は絶対必要でしょ！？」

「ぐ・・・」

『おっとー 当初の予想に反し・・・ラッセルちゃん、追い込まれています。』

意外な展開ですね？ 西田先生！』

『ええ。しかし、タレスちゃんの論理には矛盾があります。』

その矛盾をつけば、形勢は逆転しますよ」

「ほゝ 矛盾がある？ そうは思えませんが？」

「一見するとスジが通っているように思える。
それこそが詭弁の大きな特徴なんです。」

まあ、ラッセルちゃんは・・・クラスの中でも、かなり優秀。
彼女も、その矛盾に気づいているはず」

「その矛盾とは何なのか？」

さあ、担任・西田先生の期待に添え、ラッセルちゃんの反撃なる
か？

バトルの方に注目しましょう」

「はわわゝ ラッセルちゃん・・・ 劣勢です」

「だ、大丈夫よ・・・ 部長は・・・ 私達の部長なんだから・・・

」

とはいえ、あのタレスちゃんのアルケーロジック。私なら、負けて
るかも・・・

「・・・」

追い詰められたかに見えた部長だったが・・・

「ふ・・・」

ニヤリと笑った。

「おや、ＴＰＰちゃん。

その笑顔は、負けを認めたという事でよろしくって？」

余裕の表情を浮かべるタレスちゃんに対し、部長は・・・

「ふふ。あなたの術中にはハマらないわよ」

意外な言葉を口にした。

「万物の根源は・・・ 太陽よ!!」

え？

「え!？ 何を言い出すかと思ったら・・・ 太陽？」

タレスちゃんは、面食らった感じだ。

「・・・」

しばらくして・・・

「おゝほっほっほ。素粒子から一転、万物の根源が太陽？
そんな事を言った哲学者・・・ 過去にいたかしら？」

素粒子の方が、まだ勝ち目があると思いますわ」

タレスちゃんは、勝ち誇った表情を浮かべた。

「太陽がなければ・・・ 僕たちは生きていられない。」

「ミミズだって、オケラだって・・・ アメンボだってね」

「ふふ。高度な議論から・・・」

急に小学生レベルになったように感じるのは、気のせいかしら？」

「太陽がなければ、僕たちは生きていけない。」

それすなわち、アルケーについてディスカッションできるのも・・・

太陽なくしてはありえない！ どう？ 僕に反論できる？」

「・・・・・・」

「僕たちが生きているのは太陽のおかげ。」

万物を認識する時、その根源としていきつく先は・・・ 太陽よ

！！！」

『おゝっと！ 先ほどタレスちゃんが言った事そのまま・・・』

水を太陽に置き換えて、ラッセルちゃんが言い放ちました！』

『さすが私のクラスの生徒。そう、タレスちゃんの詭弁の矛盾点は・・・』

【万物の根源は太陽である】といった場合でも、二セ論理が通る
こと。」

つまり水が根源である必要はなかった点なんですわね』

『AゝHAゝ 万物の根源を【酸素】とかにしてもいいわけですね？』

『その通り。』

ただあくまでもタレスちゃんの、詭弁的論理では・・・ という事です。

相手の詭弁を逆手にとる攻撃、実に見事ですな〜』

『AゝHAゝ 詭弁というものが、わかったような気がします!』

「く・・・」

「ふ。叶恭 さんは・・・」

妹の美 さんがいなければ、何も出来ないかしら?」

いや、何もそこまで言わなくても・・・ 部長はS体質ね。

「タレスちゃん!

あなたの主張ではアルケーが【水】でなくてもいい事を、僕は示した!

でもあなたは僕のアルケー・・・ 【素粒子】を否定できるかしら!？」

「う・・・」

「言い返せないのなら・・・ 勝負は僕の勝ちね!」

「くく・・・ な、何でも・・・ 還元水・・・」

『おっと。ラッセルちゃんの勝利宣言に対し、反論できないタレスちゃん。』

西田先生、これは・・・』

『ええ。哲学者にとって、己の哲学を表現するのは言葉のみ。言葉は哲学者にとっての命です。』

それが出てこないとなると・・・』

カン カン カン！！

『出ました！ 西田先生がゴングを3回鳴らしました！
それすなわち・・・』

「負けを・・・ 認めるわ。TPP、いや・・・ ラッセルちゃん」

ついさっきまで、上から目線だったタレスちゃんが・・・

「はわわゝ 負けを認めたですゝ！」

「や・・・ やった！ 部長！！！」

「ラッセル ラッセルゝ」

『いや、西田先生。第1戦、振り返っていかがでした？』

『ラッセルちゃんのカウンターパンチ炸裂。本当に見事だったと思います。』

ただ、少しばかり補足しておきます。根源に対する議論は・・・

哲学の学派や宗教によって、とらえ方が微妙に違う場合もあります。今回は物質の根源という視点で、バトルが繰り広げられました』

『なるほど』

『今回はルール上、試合自体は1対1のバトル。』

ラッセルちゃんはタレスちゃんに対し・・・

ディスカッションで打ち負かしたという事で勝利した』

『A～H A～』

『ラッセルちゃんの言う【素粒子】は、物理的な側面での解釈の1つ。』

そう思ってください。

必ずしもそれが・・・100%の答ではないという事です』

『A～H A～・・・色んな視点での解釈の仕方がある。』

哲学も奥が深いですね』

給水タンク側が私達のコーナー。そこに戻ってきたラッセルちゃんに、笑顔で迎える私達。

「よっし！ まずは1勝！ ラッセル ラッセル」

「はわわゝ デカちゃんはゝ ラッセルちゃんの事、尊敬しますゝ」

ハイタッチをかわす私達。

「ホントに・・・ 負けるかと思っちゃったわ・・・
あんな見事に逆転するなんて」

「あー・・・ まあ、最初からタレスちゃんの矛盾点は気づいてたからね」

「え？ ヤバそうに見えたのに？」

「僕は集合論研究してるもん。
集合と論理は密接につながってるって、言っただでしょ？」

だからタレスちゃんの論理の矛盾は・・・
実は速攻見抜いてたんだよねゝ ラッセル ラッセル」

ガッツポーズに満面の笑みを浮かべる部長。

「さ、最初から・・・ タレスちゃんの矛盾を知ってた？」

「いや、ほら。あーいう、上から目線の高ビーンヤツはさ・・・
勝てると思わせて、奈落の底に突き落とすのが・・・」

僕的には、最高に気持ちいいのよ！　ラッセル　ラッセル」

「……………」

Sじゃない。超ドSだ……

こうして私達は……　哲学バトル団体戦、初戦を

「僕の活躍により、1勝をあげたのであった」　ラッセル　ラッセル」

（第26話へ続く）

第25話 ラッセル VS タレス（後書き）

~~~~~

### 次回予告

哲学バトル、第2試合は・・・デカルトちゃん VS フェルマ  
ーちゃん

デカルトちゃんが勝てば、第3試合を待たず団体戦勝利が決まる。

デカルトちゃんといえば・・・哲学史に残る名言【我思う、ゆえ  
に我あり】。

この言葉をひっさげ、これまた数学史に名を残すフェルマーちゃん  
に挑む！

次回 「 第26話      デカルト VS フェルマー 」

~~~~~


第26話 デカルト VS フェルマー（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を2つ知る。1つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。もう1つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの3名は・・・  
ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

屋上にいた私達。クラスメイト・タレスちゃんが屋上から落ちそうになり、部長はそれを救う。それがきっかけとなり私達3人と、【過去組】タレスちゃん、フェルマーちゃん、ラマヌジャンちゃんの3人で・・・

哲学バトルが始まった。第1戦はラッセルちゃんが、タレスちゃんに勝利！

~~~~~

第26話 デカルト VS フェルマー



第26話 デカルト VS フェルマー

「ほら・・・ デカ子、次はあんた」

部長はデカルトちゃんの背中を押した。

「はわわゝ 心の準備がまだです」

「相手は・・・」

「ふおえっ ふおえっ ふおえっ。ルネが出るなら・・・
余^よが、相手をしてしんぜよう」

銀髪のフェルマーちゃんだ。

「さあ、西田先生。もうすぐ第2試合が始まります。
どうやらデカルトちゃんと、フェルマーちゃんの対決のようですね」

「同世代対決です。これもまた、見物ですよ。
因縁の対決と言っていいでしょう」

「因縁？ この2人は何か・・・？」

「そうなんですよ、茂木ちゃん先生。
まず2人の担任である、パスカルちゃんについて少し・・・」

『【人間は考える葦である】・・・で、有名な？』

『そうです。パスカルちゃんは2人の担任なんですけど・・・デカルトちゃんと【神】に関して対立しています』

『【神】ですか。これまた、重いテーマですね』

『まあちよつと長くなるので、この対立のいきさつは割愛します。パスカルちゃんとデカルトちゃんは、溝がある事を覚えておいて下さい。』

そしてフェルマーちゃんは、パスカルちゃんのお気に入りです』

『ほう・・・もう少し、くわしくお願いします。西田先生』

『フェルマーちゃんは、性格的に一癖ある生徒なんです。
なんていうか・・・数学の問題を、他の生徒にだしまくって・・・』

それを解けないと、バカにするみたいなの

『・・・ぶっちゃけ、クラスに絶対1人はいる【ヤ】な生徒ですね』

『ただ、フェルマーちゃん。仕事は出来る子。
そしてパスカルちゃんは、先生のくせにギャンブル好き。』

何とフェルマーちゃんと共に、確率論を研究しています。
ええ、ギャンブルに勝つためにです』

『担任は担任で・・・教師なのにギャンブル好きですか。しかも生徒を巻き込んで、ギャンブルに勝つ研究をしている?』

『さらにフェルマーちゃんとデカルトちゃんも、すごい仲が悪いのです』

『今回は登場してないパスカルちゃん先生ですが・・・とにかくパスカルちゃんとフェルマーちゃんは仲が良く・・・』

2人は、デカルトちゃんと対立関係にある・・・
と、いう事ですね? 西田先生』

『はい。わかりやすくいうと・・・』

『あ、なんか【ヤ】な予感がしますね・・・』

『【小公女セ ラ】です。ミンチ 先生と生徒のラビ アが・・・セ ラをいじめる関係だと思ってください。』

いわば今回は、ラビ AVSセ ラですね。
まあ、デカルトちゃんもお人形さんでなく、亡霊さんに話しかけ・・・
『・・・』

『さあ!! 第2試合! 西田先生、ゴングをお願いします!!』

『え? まだ、サイコロ振ってませんよ?』

『じゃ、私が・・・』

カーン!!!!

『茂木ちゃん先生・・・ それ、私の仕事・・・』

「さあ、デカ子。勝てば、ここで僕たちの勝利が決まるわよ！」

「は、はいです〜 でも・・・ フェルマーちゃん、苦手です〜」

「デカ子、いつも言ってるじゃん。」

【あの、いまいましいフレンチマドモアゼルめ】って！

「こら。聞こえてるぞ、そなた達・・・」

すでに屋上の中央・・・ バトルが行われる地点で、フェルマーちゃん
は待機している。

「それはウオリスちゃんの言葉です〜。デカちゃんが言ったのは〜

【フェルマーちゃんは、大ボラふき！】です〜」

「こらこら。余にも聞こえてるって・・・」

向こうで、ボソツとフェルマーちゃんが呟ささやいているけど・・・

「あれ？ そうだった？ 僕の記憶じゃ・・・

【お前のおでこ、広いんだよ。ホントはハゲだろ？】じゃなかった？」

「違います〜。【担任とつるんで、ギャンブルしてんじゃないよ】です〜」

「おい・・・ だからそなたたち・・・」

「あれね？ 確か【死ねばいいのに】だったような？」

「違います。 【宇宙一の嫌われ者】です」

「こらー！ー！ー！」

『おっと・・・ バトル前に、激しい舌戦。』

でも、これは哲学内容を含んでいないので・・・

バトルの勝敗には関係ありません。 ですよ？ 西田先生』

『はい。 ただ、デカルトちゃんはフェルマーちゃんをかなり嫌っている。』

それは伝わりますね。 この勝負、どうなるか私にもわかりません』

『おっと！ 業を煮やしたフェルマーちゃんが、サイコロを振りました。』

出た目は・・・ 【存在】！ 【存在】です！！

デカルトちゃんは【我思うゆえに我あり】で一躍名を残しましたよね？

このテーマは、デカルトちゃんに有利に思えますが・・・ 西田先生？』

『いえ。 必ずしも・・・ 彼女に有利とは言えません』

『と、言いますと?』

『確かにデカルトちゃんも・・・』

【存在】について、自分なりの論理を持っています。

ただ、その論理も完全ではないんですよ。

まあここは・・・ バトルを見守りましょう』

『わかりました。では【存在】をテーマに・・・ 第2試合開始です!』

「ふおえつ ふおえつ ふおえつ。余も、ルネも・・・ 存在しておる。」

トリビアルではないかね?」

『西田先生、トリビアルとは?』

『この場合は【自明】【あきらか】という意味。
数学用語の1つです』

「デカちゃん達が存在している? それはどうかしら!?
実は誰かの夢の中で、実際には存在してないかもしれないじゃない?」

「ふおえ? 公理的だと思うのだが・・・ ルネは賛同しかねる?」

『【公理】というのも、説明お願いしていいでしょうか？ 西田先生』

『これも数学用語です。

証明や論証の必要がない、明らかで根本的な命題の事ですね。

簡単に言えば・・・ 【私達が存在している事を、疑う余地ある？】

と、フェルマーちゃんは言ってます』

『なるほど。まあ、我々がいる・・・

存在するのは当たり前のような気がします？』

『ところがですよ、茂木ちゃん先生。

デカルトちゃんは、ここからなんですよ・・・』

『ここから？』

『これで、どうじゃ？』

フェルマーちゃんが突然・・・

バチン！！

デカルトちゃんの頬を平手打ちした。しかも結構、思い切り。

「ほれ？ 痛かったじゃろ？ それこそルネが・・・
存在している証^{あかし}じゃ」

「・・・」

頬を赤くはらし、涙目のデカルトちゃんだが・・・

「まだわからないもん！ デカちゃんがイタイと思ってるだけで・・・」

本当は、痛みなんてのも【まやかし】かもしれないもん！」

相手に対し、屈しない。

「・・・痛いんじやろ？」

「痛いけど・・・それは・・・」

亡霊さんがそう思わせてるかもしれないもん！」

「・・・」

しばらくデカルトちゃんを見つめていたフェルマーちゃん。溜息をついた。

「ふおえつ ふおえつ。ルネよ・・・では、お前はこつ言つか？

この世に存在しているものなど・・・何も無いと？」

「違うもん！ 存在する事はトリビアルなんかじゃない！ 証明が必要だって・・・そう言ってるもん！！」

「ほう・・・ 存在する事を証明とな？ では聞くが・・・ どうやって？」

『存在を証明ですか・・・難しいと思うのですが？ 西田先生？』

『ええ、彼女は独自の理論で、例えば【神】の存在を示しています
が・・・』

パスカルちゃんから【幾何学的精神】と批判を受け・・・

対立するきっかけの1つになってます』

『ふゝむ。今回は何の存在を・・・？』

『おそらく【自分】、もしくは【相手】の存在でしょうね』

「デカちゃん的には・・・ 疑う事は萌え」

突然のデカルトちゃんの【萌え】発言に・・・

「
？」

フェルマーちゃんは首をかしげる。

「デカちゃんは、今・・・ 全てを疑ってます！
でも、1つだけ疑えないものがあります！」

「ふおえ？ それは、何ぞよ？」

「【疑っているデカちゃん】です！」

「ふおえ？　よくわからんの」

「デカちゃんは・・・　全てを疑いました！！
自分の存在すらも・・・」

でも・・・　でも・・・

【疑ってるデカちゃん】だけは・・・　疑えない！！」

「ふおえ？」

「【疑ってるデカちゃん】の存在を・・・
疑おうとした瞬間、またデカちゃんは疑ってるわけで」

「どうやっても疑えない【疑っているデカちゃん】はいるんです」
「！」

「えっと・・・　西田先生、解説お願いしていいでしょうか？」

「いやです」

「え？　え？　まさかの解説拒否ですか？」

「ま、ぶつちゃけますけど。私、西田もですね・・・
あまりデカルトちゃん、好きじゃないんですよ」

「おっつと！！　何とデカルトちゃん・・・
純粹無垢の天然系ボケキャラなのに・・・　何故か嫌われ者ですか！？」

『まあ、西田哲学の中には【デカルト批判】があるんです。実はこのバトル。冒頭からフェルマーちゃんの話はしましたが・

デカルトちゃんの話は、極力最小限に抑えてたんです』

『言われてみれば・・・』

『【デカルト批判】をする哲学者、結構多いですよ。てなわけで、デカルト理論の解説は・・・

主役のピタゴラスちゃんに任せましょう』

『まさかの仕事放棄！

同時に、【デカルト批判】は広範囲に渡っていると・・・

意外な事実を知る事になりました！』

『1つだけフォローしておきましょう。

たいした理論でなければ、批判自体が出てくる事はありません。

無視されるだけですからね』

『まあ、そうですね』

『つまりデカルトちゃんの理論は・・・

周りに影響を与えるだけのものだった。

それは私も認めていますので。

はい！ これ以上、彼女には触れません！』

『なるほど』 果たしてデカルトちゃんの哲学はどう展開されるのか？

その解説は、ピタゴラスちゃんに譲りましょう』

「我思う・・・ ゆえに我ありよ！！

この事実だけは、どんな亡霊さんも太刀打ち出来ないわっ！！」

デカルトちゃんなりに色々考えた結果、【疑っている自分の存在だけは疑えない事を導いた。彼女の言う【我思う】っていうのは、【我疑う】という意味で捉えていい。

【私は全てを疑ったが、疑っている自分の存在だけは疑えない。疑おうとした瞬間、疑う自分が存在するからだ】

〓【つまり疑う自分はいる】

〓【我思う、ゆえに我あり】

まあ、こんな論理展開で彼女は・・・

【疑う自分は存在する】事を証明したと主張するわけだ。

「さあ！ どんな亡霊さんも・・・ かかってきなさい！！」

妄想力はなかなかのものだと付け加えておく。

「ふおえっ ふおえっ ふおえっ なかなか面白い理論じゃが・・・

」

フェルマーちゃんは、まだまだ余裕といった表情だ。

「ルネの論理は間違っておるぞ・・・」

「何ですって!？」

「【我思う】と【我あり】の間には・・・

【思う者は存在する】という命題の証明が必要じゃ。

ルネの論理は、三段論法を無視しておる」

『西田先生？ 三段論法の説明だけでも、お願いできますか?』

『【A B】かつ【B C】が成り立つとき、【A C】も成り立つ。』

これが三段論法です』

つまりフェルマーちゃんの反論はこう。

？【私は疑う】 ？【疑っている者は存在する】 ？【私は存在する】

デカルトちゃんは、この真ん中?の命題を証明する必要があるという。でなければ【私は疑う】から、【私は存在する】を導いた事にはならないというのだ。

「そ、そんな事ないもん！

疑ってる私・・・ いるもん！」

「それも亡霊の仕業かも・・・ ふおえ？」

「だって・・・ だって・・・ デカちゃん、疑ってるのよ！
疑ってる自分は・・・ 疑えないでしょ！？」

疑った時点で、疑う自分がいるんだから！！」

「どうやってそれを証明するのじゃ？」

「どうって・・・ 私、疑ってるもん！ それは当たり前でしょ！
！」

『勝負ありましたね・・・ デカルトちゃんの負けです』

『え？ 西田先生・・・ まだ決着は早いのでは？』

『第1試合とは逆の立場になりました。まあ、見ててください・・・』

『

「ルネよ・・・ 気づかぬか？」

【疑ってる私】を、証明無しに認めるという事は・・・

余が最初にトリビアルといった事と同じじゃぞ？」

「はわ！？」

「つまりルネは、余と同じ方法で存在論を語った。
それすなわち・・・ルネ、お前の負けじゃぞえ？」

「ぐ・・・」

言葉に詰まるデカルトちゃん。とうとう・・・

「うわーん・・・」

泣き出しちゃった。

『なるほど。これは勝負ありですね、西田先生』

『はい。では・・・』

カン カン カン！！

『ここでゴング！ 試合終了！ 勝者はフェルマーちゃんです！！
何と専門は法律学で、数学を趣味としているフェルマーちゃん。』

哲学を専攻していないにも関わらず・・・

デカルトちゃんを見事破りました！！ 西田先生、感想を！』

『まあ、存在する事についてに結論を得たわけではありませんが・・・

デカルトちゃんを泣かせたんです。

つまり、己の哲学を語るための言葉を奪った。

1対1の勝負としては、決着ありですね』

『第1試合同様・・・
フェルマーちゃんが、カウンターパンチを食らわせた形になりました』

『さつきもチラッと【デカルト批判】について言いましたが・・・
カントちゃん、ニーチェちゃん、ハイデガーちゃんなど・・・

【デカルト批判】の上で、近代哲学が発展していくわけです。
そういう意味で、やっぱりデカルトちゃんの哲学的業績は大きい
ですよ』

『おや？ 西田先生。急にデカルトちゃん擁護する発言をしますね
？』

『まあ、私も・・・
【デカルト批判】で、少しばかり名をなしましたからね。はっは
っは』

『というわけで・・・
これで【タイムトラベル組】、【過去組】ともに1勝1敗。』

決着は、第3試合・・・
ピタゴラスちゃんVSラマヌジャンちゃんが決まります!!』

(第27話へ続く)

第26話 デカルト VS フェルマー（後書き）

次回予告

1勝1敗で迎えた第3戦。私は、ラマヌジャンちゃんと相対する。あいたい

ラマヌジャンは完全にペースを掴み、私は防戦一方。

そしてラマヌジャンちゃんの予言通り、私は・・・

次回 「 第27話 ピタゴラス VS ラマヌジャン 」

第27話　ピタゴラス　V S　ラマヌジャン　（前書き）

~~~~~  
前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を2つ知る。1つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。1つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの3名は・・・  
ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

屋上にいた私達。クラスメイト・タレスちゃんが屋上から落ちそうになり、部長はそれを救う。それがきっかけとなり私達3人と、【過去組】タレスちゃん、フェルマーちゃん、ラマヌジャンちゃんの3人で・・・

哲学バトルが始まった。第1戦はラッセルちゃんが、タレスちゃんに勝利！

しかし第2戦はデカルトちゃんが、フェルマーちゃんに敗北。

1勝1敗で向かえ、勝負の行方は・・・

第27話    ピタゴラス VS ラマヌジャン

## 第27話    ピタゴラス VS ラマヌジャン

「ふえ〜ん・・・ 負けちゃったです〜」

「おー よしよし。デカ子は頑張ったよ。  
大丈夫、大丈夫・・・」

あとはピタ子が何とかするから・・・」

「う・・・」

大きなプレッシャーがのしかかる。だって、ラマヌジャンちゃん・・・

「この子、【インドの魔術師】って異名を持ってるからね。  
僕の知る限り、数字の感覚は世界一だわ」

って、部長言ってたし。

「・・・・・・」

わ。ラマヌジャンちゃん、こっち見てる。

「ほら、ピタ子。早く行って、勝ってきて！  
もうお昼過ぎよ。とっととバトル終わらせないと。

ルブラン君、何とかしなきゃいけないんだし」

「うん・・・」

そう。バトルは主要なポイントだけ描かれているけれど・・・ 実際は1試合1〜2時間で繰り広げられていた。

「もう12時過ぎ・・・」

過去の世界にきて5時間以上。なのにルブラン君を救う事に関して、全く進展がない。

「イ、インドの魔術師だろうと・・・」

哲学者ピタゴラスとして

「哲学バトルでは負けたくない！ い、いざー!!」

私は屋上の中央に歩み寄り・・・ インドの魔術師にあいたい相対する。

「どうぞ」

ラマヌジャンちゃんが、私にサイコロを渡してきた。私に振れと言ってるのね。上等。

「・・・・・・」

私は無言で受け取り、サイコロを振る。

「ほし・・・」

サイコロが止まる前に、魔術師は言い放った。そして・・・

『出ました！ 最終戦のテーマは【】！

テーマフリーです！！ それにしても西田先生。

今、ラマヌジャンちゃんは・・・

確かサイコロが止まる前に、目を言い当てましたよ？』

『うん。今は、私にもわかりません。

とにかく彼女は、常人の脳とは別の・・・

神がかり的な何かを持っていますから。

我々では理解し得ない展開が・・・ 待ってるかもしれません』

「な、なんでわかったの！？ 【】が出るって！！」

「・・・」

ラマヌジャンちゃんは優しい目でこう言った。

「ナマギーリ女神のおかげで・・・」

またそれが。いや・・・

「未来は、決まっているから・・・」

何ですって！？



『おっと！ 【未来】も、哲学のテーマの1つではありますが・・・

はて？ 西田先生、彼女の発言の真意は？』

『うゝん。【ニュートン力学】的なもののなか・・・

あるいは【因果律】の事を言っているのか？

はたまた【ラプラスの魔物】なのか？』

『難しい言葉が、たくさん出てきましたね』

『正直、言います。ラマヌジャンちゃんだけは、私も解説が難しいです。

とりあえず言葉の説明は置いといて・・・

バトルに注目しましょう』

「未来が・・・決まっている？」

ちよっと。

「ええ。ナマギーリ女神が、そう言っています」

冗談じゃない。私はこの世界からしたら、未来から来たのよ。未来が決まってるなら、この世界でもルブラン君が死ぬって事になっちゃうじゃん。

「未来は・・・決まってなんかいないわ！ さあ、勝負よ！」

「ふふ。あなたはナマギーリ女神のおかげで・・・  
未来を歩むのよ・・・」

ま、また・・・。だんだん頭に血が登ってきた私。

「な、何とでも言いなさい！ さあ・・・」

って、どうやって勝負すんの？ 何をテーマにすれば？

「あなた確か・・・ 万物の根源は【数】<sup>アルケー</sup>だと言ってた子よね？  
間違ってたなら、ごめんなさい」

む！？ 部長の時と同じテーマ【根源】<sup>アルケー</sup>か！？

「例えば時間、例えば位置、例えば元素だって・・・  
全て数字で表すことが出来る！

万物の根源は、ズバリ【数】！！ 文句ある！？」

部長の受け売りだけど。

「逆に数字がなければ・・・

私達はこの世界を表現することなど出来ないわ！」

反論できるかしら！？ ラマヌジャンちゃん！

「A～HA～」

ピタゴラスちゃんといえば、【万物は数なり】の言葉で有名。

いいセンついてると思いますが・・・ どうでしょう、西田先生  
『？』

『かつてガリレオは・・・』

【宇宙は数学の言語で書かれている】という言葉を残しています』

『A～H A～ 深い言葉ですね』

『数学を理解出来なければ・・・  
宇宙に限らず、この世界に関して理解することは難しい。

ガリレオはそう言っていたんですね。なかなか哲学的だと思います。

ピタゴラスちゃんの攻撃は、ガリレオを彷彿とさせます』

『A～H A～ まずはピタゴラスちゃんの先制攻撃といった所でし  
ようか』

『でも、このままラマヌジャンが引き下がるとは思えません。  
バトルに注目です・・・』

勝ち誇る私に、ラマヌジャンが口を開く。

「では・・・ あなた達が別世界から来たとしたら？」

え？

「それを、どうやって説明するのかしら？」 【数】で説明できるの

？」

な・・・ 今、私達が別世界から来たって・・・ そう言っただわよね？

『何と、西田先生！！』

ラマヌジャンちゃんから、不思議な発言が飛び出しました。

まるでピタゴラスちゃん達が、未来から来た事を知っているような？』

『うん・・・ たまたまなのか、あるいは何かを知っているのか？』

真意は分かりませんが、ひよつとしたら・・・』

『ひよつとしたら？ 何でしょう、西田先生』

『最近世界的に研究が進められている・・・』

【統一理論】についてちょっとお話を』

『統一理論？』

『4つの力を統一しようと試みる理論で、まだ未完成の理論です。現在の物理学が、完成を目指している究極の理論なんですよ。』

その候補として、数学の【超ひも理論】などがあります。

我々の住むこの世界を、物理・数学で説明しようとしています。が・・・』

『何やら、難しい話が出てきましたね』

『ええ。我々の住む世界は、薄い膜のようなものだとして……いくつかの膜が重なった世界とみなすんです。』

その膜はブレンワールド……  
いわゆるマルチバースの中のパラレルワールド、別世界です』

『そういえば冒頭でも……  
パラレルワールドどうこうと言ってましたが……』

ちよつと、わからないですね　西田先生』

『では結論だけ。数学的・物理的に矛盾のない理論だったとしても……  
それが観測できないのなら、それが実在するともしないとも言えない。』

素粒子の動向観測だけでは……  
ブレンワールドの存在を100%示せないと言われているんです』

『それは、どういう……?』

『数学や物理にも限界があるという事です。つまり……』

『つまり?』

『この世界は、神なくして語り得ないって事ですわ。』

断言します。

あなたのいう【数】では・・・  
この世の全てを語る事は出来ない」

『ラマヌジャンちゃんの攻撃！

これは、ピタゴラスちゃんの【万物は数なり】を真っ向否定です  
『！

『ええ。確かに【数】は、この世の多くの事を我々に教えてくれます。  
す。

でも【数】だけでは、この世を語るに限界がある・・・

神でしか語れない事がある・・・

それがラマヌジャンちゃんの主張かと思われます』

『A～H A～ さあ、このラマヌジャンの哲学攻撃。

ピタゴラスちゃん、どう動くか？』

「ぐ・・・」

まるで私達が、未来から来た事を知ってるようなその口ぶり。

確かに・・・

何がどうなって、私達が過去の世界にいるのか・・・

今の私には説明できない。

『おつと・・・ピタゴラスちゃんが言葉に詰まっていますよ、西田先生？』

これは早くも勝負ありか？』

「このまま勝負がつくのも・・・興ざめたわ。いいわ。あなたの土俵で戦ってあげる」

『むむ！？ 何と・・・』

勝利目前と思われたラマヌジャンちゃんから・・・』

「あなたの代名詞は確か・・・【ピタゴラスの定理】よね？いいわ。直角三角形で勝負してあげる！」

『何と、直角三角形での勝負の申し入れが！！ に、西田先生・・・直角三角形で・・・何をどう、勝負するのでしょうか？』

『さあ？ 私にもわかりません。』

ラマヌジャンちゃんも私のクラスの生徒ですが・・・

正直、彼女は私にも掴めない所が多くて・・・ただ、神に選ばれし天才・・・それだけは間違いないと思います『す』

『何と、神に選ばれし者が・・・ 私達の目の前にいるわけですね』

『ええ．．．ただ．．．』

『ただ？』

『．．．いや、勝負を見守りましょう』

「直角三角形の3辺のうち．．．底辺が12345としましょう。

高さと斜辺が1つ違いの整数になるなら．．．

それらの長さは何かしら？」

「．．．．．」

面白い。私にそんな簡単な問題を出すなんて。

【 $a^2 + b^2 = c^2$ 】を満たす【 $a, b, c$ 】をピタゴラス数と言う。それを求める手順は、すでに確立されている。

私は自分のリュックから、紙と鉛筆を取り出し．．．計算を始める。

数分後

「12345<sup>2</sup> + 76199512<sup>2</sup> = 761999513<sup>2</sup>

すなわち、残り2辺の長さは．．．



7 6 1 9 9 5 1 2 と 7 6 1 9 9 5 1 3 よ!」

「・・・・・・」

しばし沈黙のラマヌジャンちゃん。

「ちょっと時間がかかり過ぎだけど・・・ 正解を認めるわ」

よし!! 自信はあつたけど、一安心!!

「今度はあなたが・・・ 何か問題を出して。  
直角三角形でも、何でも構わないわ。」

私が答えられなければ・・・ あなたの勝ちでいい」

え? それでいいの?

「じゃ、じゃあ・・・ とびつきり難しいの、出すわよ?」

「どうぞ・・・」

最近本で読んだの。オイラー予想つてのを・・・

「 $x^4 + y^4 + z^4 = w^4$ ・・・ これを満たす自然数  
はあるかしら?」

私の定理と似ていたから、ついつい覚えちゃったのよね。数学界  
の大天才と言われるオイラーちゃん。オイラーちゃんは【フェルマ  
ーの最終定理】に挑戦していく中で、この問題に直面したという。

そして上式を満たす自然数はない・・・そう予想したんだけど。

「そんな・・・簡単な問題でいいの？」

「え？」

実はオイラー自身、この問題に対し・・・正しいという証明も与えられず、反例（正しくない例）を見つけることも出来ずにこの世を去った・・・そう、本に書かれてあった。あの大天才ですら、証明出来なかったのよ。

「 $95800^4 + 217519^4 + 414560^4 = 422481^4$

どう？ その方程式を満たす例よ・・・」

「な・・・」

あ、当たってる・・・

「せ、正解・・・」

この反例が見つかったのは・・・オイラーちゃんが亡くなって、実に200年以上経ってからの事。それを・・・

ラマヌジャンちゃんはあつさり？

「な・・・なんで？」

彼女も、その本を読んだの？

「ナマギーリ女神のおかげ」

う・・・ 続けてラマヌジャンちゃんは言う。

「私・・・ 今日のお昼、3時までには病院へ行かなくちゃいけないの。」

だから2時には、学校を早退する事になっているわ。

時間がないから、今から私が出す問題・・・

それが最後の問題という事にしていただけ？」

「え・・・ ええ、いいわ・・・」

つ、次が最後の問題・・・

「あなたが答えられたら、あなたの勝ちでいい・・・」

「の・・・ 望む所よ!!」

ああ、言っちゃった。もし、オイラー予想みたいな問題出されたら・・・  
負けちゃうよ。

「じゃあ、問題。

【世界全ての人がナマギーリ女神を信じていないならば、人類は滅びる】

この命題は正しいかしら？ 答えは【真】か【偽】の2択。  
当たればあなたの勝ち。ハズれれば私の勝ち・・・」

「・・・」

『おっと、西田先生！ 答えは2つに1つの、最終問題。しかも【神】がらみです！』

果たしてこの勝負の行方は！？』

『・・・・・・』

『西田先生？』

『あ、失礼。やっぱりラマヌジャンちゃんは・・・ピタゴラスちゃんに勝たせようとしていますね』

『え？ そ、そうなんですか？ でも確かに・・・勝利目前、いきなりピタゴラスちゃん得意の直角三角形問題を出したり・・・』

『思えば、途中の数学の問題は・・・全く、哲学に関係ありません。不思議ちゃんキャラとはいえ、勝つ事にこだわってないような気がしますね？』

『ええ。ラマヌジャンちゃんは、勝とうと思えばとつくに勝ってます。間違いありません。ピタゴラスちゃんの勝利を・・・』

『彼女は願ってます』

『では・・・ピタゴラスちゃんは、この問題に答えられると？』

『もちろん。ところで茂木ちゃん先生は・・・』

【世界全ての人がナマギーリ女神を信じていないならば、人類は滅びる】

この命題の真偽、わかりますか？』

『世界全ての人がその女神を信じなくても、人類が滅びるとは思えません。』

よってその命題は・・・偽です。

どうです？ 西田先生？』

『まだまだですね。茂木ちゃん先生』

『え？ 間違いですか？』

『さあ、どっちでしょう？』

『そんな・・・簡単な問題でいいの？』

さっきのラマヌジャンちゃんのセリフを奪った私。

「【真】よ！ 間違いない！」

『おや？ 【真】なんですか？』

じゃあ、全ての人がナマギーリ女神を信じなければ・・・

人類は滅びると？ とてもそうは思えませんが・・・ 西田先生  
？』

『解説は・・・ピタゴラスちゃんに預けます。

茂木ちゃん先生も・・・彼女から学んで下さい』

「前提の【世界全ての人がナマギーリ女神を信じていない】・・・  
実は、これ自体が【偽】。

【全て】の否定は、【少なくとも1人は でない】。  
ラマヌジャンちゃん、あなたはナマギーリ女神を信じているんで  
しょ？」

「ええ・・・」

彼女は嬉しそうに笑った。

「あなたがナマギーリ女神を信じている時点で・・・  
前提は【偽】って事よね？」

「ええ・・・」

ラマヌジャンちゃんは、さらに嬉しそうに笑った。

「【pならばq】という命題は・・・  
前提のpが偽の時点で、【真】になる。

だからあなたの言った命題は【真】！！ どう？」

「うん・・・」

笑顔のまま、頷くラマヌジャンちゃん。

「あなたの勝ちよ。おめでとう・・・」

『おっと！ 何とラマヌジャンちゃん・・・ 自ら敗北を認めました！』

カン カン カン！！

『ピタゴラスちゃんの完璧な解説。私の出る幕、ありませんでしたね』

『って事は・・・ 今回の【爆哲、オンエアバトル】団体戦は・・・

2勝1敗で【タイムトラベル組】の勝利です！！

西田先生、最後・・・ まとめてください』

『今回バトった6人は全て・・・ 著名な数学者でもあります。そのせいでしょう。』

全ての勝敗は、論理ロジックのスキについて決まりました。

哲学と論理は密接に繋がってます。視聴者もいい勉強になったのでは？』

『私も勉強させて頂きました』

『数学や化学、物理学や科学などなど。それら学問の発展と共に・  
新しい思想や論理が導入され、哲学自体也大いに発展してきました』

『A～H A～』

『学問だけでなく、全てのものは哲学に通じ・・・  
哲学もまた、全てに通じます。』

視聴者の皆さんも・・・

日常にあふれる哲学に触れてみてはいかがでしょうか？』

『ステキな言葉、ありがとうございます、西田先生。では・・・  
来週のこの時間も、お楽しみに』

「・・・」

握手を交わした私とラマヌジャンちゃん。彼女の手はとても冷たかった。

「おめでとう」

「ありがとう・・・」

勝った事は嬉しいけど、ちょっと複雑な気分。

「ね？ ナマギール女神のおかげで・・・  
未来を歩いていけるんでしょ？」



・ ラマヌジャンちゃんのいう【ナマギーリ女神】を信じてないのに・

「うん・・・」

ある意味その女神のおかげで、勝利する事が出来た私。

「なんで・・・私に勝たせてくれたの？」

彼女が私を勝たせてくれた・・・それは私自身が1番感じている。

「・・・」

しばらくの沈黙の後

「その理由は・・・もうすぐあなた自身、わかる事になる・・・」

「・・・」

相変わらず不思議なオーラを放っている。

「じゃあ・・・私、病院に行くから・・・」

そう言うと彼女は・・・笑顔のまま、屋上の出口に向かった。

「今度は・・・負けませんわよ」

タレスちゃんも

「ルネも・・・もっと成長せんとな」 ふぉえ ふぉえ・・・」

フェルマーちゃんも、ラマヌジャンちゃんに続いて屋上を後にした。

「はわわ」 Pちゃん、勝利おめでとうです」！」

「とりあえず団体戦、僕達の勝利」！！」

「う、うん・・・」

この時の私達は気づいていなかった。

ラマヌジャンがついていた1つの嘘を・・・

・・・。。

10分後。

学校を背に、歩道を歩くラマヌジャンちゃん。

「・・・」

ある人物と遭遇する。

「ありがと・・・」

その人物は、お礼の言葉を口にした。

「あれで・・・よかった？」

優しい笑顔のラマヌジャンちゃん。

「うん。ホントに・・・ありがとう」

その人物は・・・冷たい彼女の手を、しばらく握り続けた。

（第28話へ続く）

## 第27話 ピタゴラス VS ラマヌジャン（後書き）

### 次回予告

部長がたてた作戦で、私達は二手<sup>ふたて</sup>に分かれて行動する事に。

私はポール公園に行って、過去の私をルブラン君の家に向かわせるように。

そして部長とデカルトちゃんは、ルブラン君の家に行って・・・

### 次回 「第28話 作戦」

## 第28話 作 戦（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を2つ知る。1つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。1つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの3名は・・・  
ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

屋上にいた私達。哲学バトルに勝利し、ようやくルブラン君を救うために動き出す。

## 第28話 作 戦

## 第28話 作 戦

「生乳なまぢち！！ この僕が哲学に夢中になって・・・  
生乳忘れるとは！！」

いや、哲学に夢中になれたんなら・・・ 哲学者として、いい事では？

「そ、それよりさ。もうすぐ昼の2時よ？

全然、ルブラン君の事・・・ 進展してないんだけど？」

「確かに、デカちゃん達、この世界に来て」

ルブラン君の為に、何1つ行動起こしてないです」

「そだね うん・・・」

しばらく悩んだ部長。

「ここはふたて二手に分かれよう」

「二手？」

「僕とデカ子は、ルブラン君の家に。ルブラン君の様子を探ってくる。」

ピタ子は・・・ なんとか過去ピタを、ルブラン君の家に連れてきて。

過去ピタと、過去ルブラン君をくつつけてあげるから」

それは嬉しいけど・・・

「私が過去の自分に遭遇すると・・・ マズいのよね？  
部長やデカルトちゃんが、過去の私を連れてきた方がいいんじゃない？」

「過去の僕やデカ子も、過去ピタと一緒に行動してるわけだし・・・  
みんな、過去の自分と遭遇する可能性はある。リスクは同じよ」

それもそうか・・・

「まあ、ピタ子のルブラン君なんだからさ。  
過去ピタの件は、ピタ子が頑張ってよ。」

デカ子は、ルブラン君のクラスメイトって事で・・・  
彼を呼び出すのに必要だからさ」

「わ、わかった・・・」

とにかく過去の私に直接会うことなく、過去の私をルブラン君の所へよこせばいいわけね？

「デカ子は、私と行動する事。絶対1人になっちゃダメよ！」

「はいです」

デカルトちゃんだけは絶対1人にしちゃいけないタイプ。

「デカ子の役目は、ルブラン君を家に閉じ込めておくか・・・  
あるいは家から引きずり出して、交通事故の起きない場所へ案内  
する！」

とにかく事故の遭った場所から遠ざける事！　それがデカ子の使  
命！」

「了解です」

部長と別行動つてのは心細いけど・・・

「必ず過去の私を、ルブラン君の家によこすから・・・  
絶対くつつけてよ！！」

現在に戻った時、ルブラン君の彼女になっていると信じて！

「任せて！　僕、恋のキューピッドになってみせるから！」

「デカちゃんも　Pちゃんの恋の成就のため、頑張るです」

私達3人は右手を下に向け重ねた。

「携帯は通じるからさ。何か動きあつたら、こまめに連絡し合ふ事」

「うん」

「はいです」

「あと最初に言ったように・・・  
あまり、ここの世界の住人と接触しない、過去を変えない！



ただし、ルブラン君を救う事だけは例外ね」

まあ、ついさっきまで・・・

がつつり過去の住人とバトってたけどね。

「絶対・・・絶対ルブラン君、助けるわよ！！

頼んだわよ、部長！ デカルトちゃん！」

「ラッセル ラッセル」

「はいです」

こうして・・・

私は、ポール公園へ。部長とデカルトちゃんは、ルブラン君の家へと向かった。

・・・。

非常口から校舎を出て、裏口から学園の外へ出た私。まず最初に<sup>えんの</sup>楢田野商店に向かい、変装用のコートと帽子を買う。その後、ポール公園へと向かった。

「・・・」

しばらくトイレの前のベンチに座る私。携帯の時計を見ると午後4時過ぎ。過去の私がここに現れるのは、今から1時間後だ。

「・・・」

タイムスリップから9時間以上が経過している。この世界にいられるリミットは24時間。その3分の1が過ぎているのに・・・

「まだ、何の進展もない・・・」

沈みかけた私は深呼吸する。ここで焦ってはいけない。過去の私がここへ来るまで、心を落ち着かせなければ。

「・・・」

もし、ルブラン君が私のラブレターを受け取って・・・ここにきてくれたなら？

私はどんな気持ちになって、このベンチに座っていただろう？

そんな妄想は、私の中の使命感を増幅させる。

「よし・・・」

何が何でもルブラン君を助ける！！

私はリュックからレターセットと筆記用具を取り出し、便せんの上にペンを置く。

「・・・」

ここはやはり・・・

・・・。

「ふっ・・・」

携帯の時計を見ると、5時ちょっと前。あつという間に1時間近くが過ぎていた。そろそろだと思った私は、過去の私がやって来る方向と反対側へ移動する。

大きな木の陰に隠れた私。椿田野商店で買ったブカブカの帽子をかぶり、黒い大きめのコートを着ける。そして待つこと数分。

向こう側から、2日前の私達が姿を見せた。

「過去の・・・私・・・」

何度見ても、自分自身を見るのに違和感がある。

「・・・」

私の視線の先・・・ 3人はトイレへと向かった。2日前と全く一緒だ。

「・・・」

携帯の時計を確認すると、5時11分。

「・・・よし・・・」

1分後。

ドキドキしながら、私はベンチに向かった。トイレからこちらを見ている過去の私に、顔は見えないよう・・・

あのベンチに座る。そしてコートのポケットの中にある手紙を、さりげなく置いた。

過去の私が慌ててトイレから出てくる。私はその自分に捕まらないよう・・・公園を走り去っていった。

過去の私は【犯人】（つまり、現在の私）を追いかけてやうとするが・・・やがて歩を止め、ベンチの上の手紙に釘付けになる。

その手紙にはもちろん・・・

表に【ピタゴラスに告ぐ】、裏には【from U】と書かれている。

・・・。

「はあ、はあ・・・」

公園から少し離れた通りまで走ってきた私。

今頃、過去の私達は

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ！】

という内容を確認しているはず。そして過去の私はこう思っている。

犯人は私の性格を全くわかってない。【邪魔するな】なんて言われ  
たら、邪魔したくなるのが私・・・とね。

2日前の私、残念ね。そう書けばあなたは、絶対ルブラン君の家に  
行く・・・でしょ？

10分程歩き、駅前まで来た私。携帯を取り出すと部長に電話した。

「あ？ 部長？ こちらはうまくいった！  
過去の私、そっちに向かうわよ。そちらの状況は？」

「ピタ子・・・それが・・・」

（第29話へ続く）

## 第28話 作 戦（後書き）

### 次回予告

ルブラン君の家で合流した私達。ルブラン君は家にいなかった。

通りの向こうからルブラン君がやってくる。事故に遭ったその時間直前に。

部長の指示で私達は、ルブラン君に包囲網をしくんだけど・・・

次回 「 第29話 過去を変える！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1365z/>

---

ピタゴラスちゃんのジレンマ

2011年12月20日21時59分発行